



ロックウール断熱材カタログ

建築物省エネ法対応版

2017年4月版



Rock Wool

heat insulating material

JFE ロックファイバー 株式会社

ものづくりは JFE

住宅用ロックウール断熱材のトップメーカーとして



グループの総合力

低炭素・省エネルギー社会の実現に貢献します。



主原料は高炉スラグ



営業コンサルタント



施工研修会



気密測定

人にやさしく、地球にやさしく。

ロックウールの主原料は製鉄所の副産物である高炉スラグです。

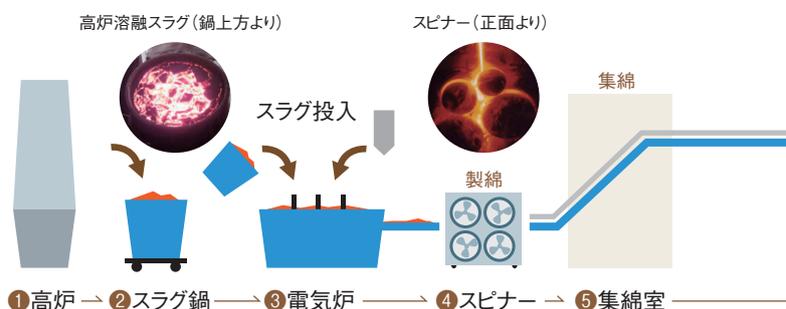
つまり、JFEロックファイバーで製造したロックウールは高炉スラグを再資源化した環境性能に優れた断熱材。

「国等による環境物品等の調達の推進等に関する法律」(グリーン購入法)の対象材料にも含まれています。



ロックウール成形品の製造方法

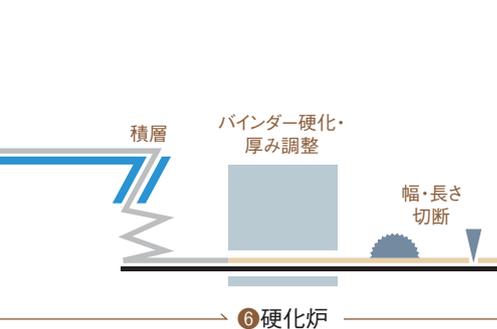
弊社のロックウール成形品は、製鉄所で鉄鉱石を高炉で熔融した際に生成されるスラグを約1,500℃に温め遠心力で吹き飛ばし、繊維状に均質化してマットやボードに成形加工しています。リサイクルの観点からも地球環境保全に貢献している商品です。海外では、玄武岩などの天然岩を原料に使用したものが多いようです。





CONTENTS

1. ロックウール成形品の製造方法	3
2. 断熱材の種類と特徴	5
3. ロックウールの特徴	7
4. 製品紹介(断熱材)	9
・住宅用断熱材(マット)	
・住宅用断熱材(フェルト・ボード)	
・建築用断熱材(マット・フェルト)	
5. 住宅の省エネルギー	17
・建築物省エネ法「住宅仕様基準」	
・建築物省エネ法「住宅計算方法」	
・省エネルギー政策について(ZEHなど)	
6. 断熱の目的と基本的な知識	49
7. 断熱リフォーム(改修)	55
8. 住宅の防耐火	59
9. 断熱施工の基本	63
・代表的な施工方法(充填断熱工法)	
・防露性能の確保に関する配慮事項	
10. 資料編	83
・熱伝導率	
・熱貫流率(U値)計算シート例	
・平成25年基準の別表1・2・3	
・施工チェックリスト	
11. 製品紹介(建築内装・吸音・保温・保冷)	91
・ボード	
・フェルト	
・ブランケット	
・粒状綿	
12. 技術資料	103



断熱材の種類と特徴

断熱材には多くの種類がありますが、大きくは繊維系と発泡プラスチック系に分類されます。

また、熱伝導率で7種類に区分される事もあります。



断熱材の種類例			熱伝導率λ [W/(m・K)]	
グラスウール断熱材	通常品	10-50	0.050	
		16-45	0.045	
		20-42	0.042	
		24-38	0.038	
		32-36	0.036	
	高性能品	HG16-38	0.038	
		HG24-36	0.036	
		HG32-35	0.035	
		HG40-34	0.034	
		HG48-33	0.033	
ロックウール断熱材	MA	0.038		
	HA	0.036		
	HB	0.035		
	HC	0.034		
吹込み用グラスウール	13K、18K	0.052		
	30K、35K	0.040		
吹込み用ロックウール断熱材	25K	0.047		
	65K	0.039		
吹込み用セルローズファイバー	25K、45K、55K	0.040		
ビーズ法ポリスチレンフォーム断熱材	1号	0.034		
	2号	0.036		
	3号	0.038		
	4号	0.041		
押出法ポリスチレンフォーム断熱材	1種	b A	0.040	
	2種	b A	0.034	
	3種	b A	0.028	
硬質ウレタンフォーム断熱材	1種		0.029	
	2種	1号	0.023	
		2号	0.024	
		3号	0.027	
	4号	0.028		
ポリエチレンフォーム断熱材	1種	1号、2号	0.042	
	2種		0.038	
	3種		0.034	
フェノールフォーム断熱材	1種	2号	CI、CII	0.020
		3号	CI、CII	0.020
	3種	1号	AI、AII	0.035
吹付け硬質ウレタンフォーム断熱材	A種	1H、2H	0.026	
		1、2	0.034	
		3	0.040	

〈出典:施工技術者講習テキスト(H28年基準対応)基本編〉 *詳細はP.83をご参照ください。

■ 主な断熱材の特徴

	繊維系断熱材			ポリスチレンフォーム		硬質ウレタンフォーム	
	ロックウール	グラスウール	フェノールフォーム	ビーズ法 EPS	押出法 XPS	保温板 PUF	現場発泡
J I S	A9521	A9521	A9521	A9521	A9521	A9521	A9526
主原料	玄武・安山岩 高炉スラグ	ガラス 廃ガラス	ポリフェノール	ポリスチレン	ポリスチレン	ポリイソシアネート ポリオール	ポリイソシアネート ポリオール
基材の説明	石灰及びけい酸を 主成分とするスラグ 及び鉱物を溶融し、 製造した繊維をバイ ンダを用いて成形し たもの。必要に応じて 外被材を用いる。	ガラスを溶融し、製 造した繊維をバイ ンダを用いて成形し たもの。必要に応じて 外被材を用いる。	レゾール樹脂、発泡剤及び 硬化剤を主剤として、成形 面材の間で発泡させ、サン ドイッチ状に成形した成形 面材付きのもの。又はレゾ ール樹脂、発泡剤及び硬化 剤を主剤として、発泡成形 した成形面材なしのもの。	ポリスチレン又はその 共重合体に発泡剤、 難燃剤(HBCDを含 まない)及び添加剤を 加えた発泡性ビーズ を型内発泡成形又は 発泡成形したブロック から切り出したもの。	ポリスチレン又はそ の共重合体に発泡 剤及び添加剤を溶 融混合し、連続的に 押出発泡成形した もの。又は押出発泡 成形したブロックから 切り出したもの。	ポリイソシアネート、ポリ オール及び発泡剤を主 剤として、発泡成形した もの。発泡成形したブ ロックから切り出したも の。又は成形面材の間 で発泡させ一体化した 成形面材付きのもの。	ポリイソシアネートと ポリオールとの反応 によって吹付け発泡 して製造した硬質発 泡プラスチック。
形状	マット・ボード	マット・ボード	ボード	ボード・成形品	ボード	ボード	—
断熱材の区分	C	A2・B・C・D	C・D・E・F	B・C・D	C・D・E	E	C・D・E
最高使用温度	650℃	300℃	—	80℃	80℃	100℃	—
施工者	大工	大工	大工	大工	大工	大工	専門工事店
備考	透湿抵抗が低い ので防湿層が必要	透湿抵抗が低い ので防湿層が必要	透湿抵抗が低い ので防湿層が必要	—	—	—	透湿抵抗が低い ので防湿層が必要

〈出典：JIS A 9521他、各社カタログ〉

■ 断熱材の熱伝導率比較

区分	λ (W/m·K)	繊維系断熱材		ポリスチレンフォーム		硬質ウレタンフォーム	
		ロックウール	グラスウール 通常品 高性能	フェノールフォーム	ビーズ法 EPS	押出法 XPS	保温板 PUF
A2	0.050		10-50				
	0.045		16-45				
B	0.043						
	0.042		20-42		4号(0.041)		
C	0.040					1種bA	A種3
	0.038	MA	24-38 HG14-38 HG16-38		3号		
	0.037						
	0.036	HA	32-36 HG24-36	2種1号	2号		
D	0.035		HG32-35	3種			
	0.034		HG40-34	2種2号	1号	2種bA	A種1・2
	0.033		HG48-33				
E	0.028 ~23			2種3号		3種aA／3種bA	2種
F	0.022 以下			1種		3種aD 3種bD	

〈出典：JIS A 9521各社カタログの代表例、詳細はP.83をご参照ください。〉

ロックウールは快適な暮らしを創造します。

ロックウールは微細な繊維の隙間に大量の空気を含む構造をしているため、抜群の断熱効果を発揮します。また、優れた耐水性能や吸音性能で快適な環境づくりに貢献いたします。



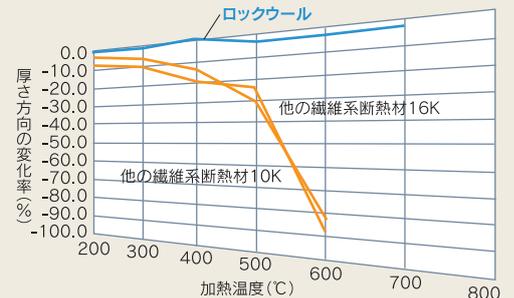
火災から大切なご家族や財産を守ります。

ロックウールは万一火災が発生しても延焼や類焼を抑えます。また、建築基準法において、国土交通大臣の不燃材料認定を取得しています。

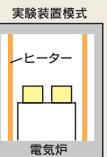
■ 実験内容



■ 耐熱性能比較(厚さ方向の変化率)



200~700°Cまで、100°C単位で温度変化させ、各温度で30分間保持した場合の体積変化の数値を比較
*当社実験による。



[試験方法]

- ① 電気炉を所定温度(600°C・700°C)で温度保持
- ② 各断熱材をセラミック板上に置いて電気炉に入れ、所定時間経過後に取り出し空冷(冷却後に写真撮影)



結露を防ぎ、構造体を長持ちさせます。

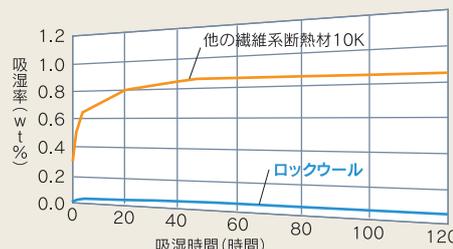
ロックウールは、水を吸いにくく半永久的に断熱性能を維持します。また、シロアリ・腐食・シミの発生等を防止し、家屋を長持ちさせます。

■ 実験



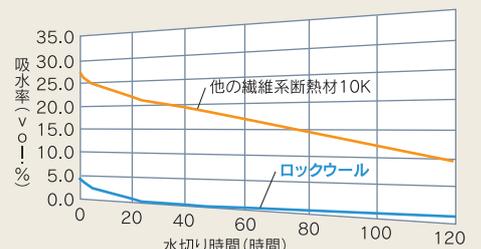
ロックウール(カットサンプル)を6時間水面下に浸し、6時間後に押さえ板を外しても耐水性が高いロックウールは浮かんでいません。
*当社実験による。

■ 吸湿性能比較(吸湿時間と吸湿率の関係)



JIS A 9523の吸湿性試験方法に従って、温度50±2°C、湿度50±2°Cで調湿後、90±2%の状態を保持し、重量変化を比較
*当社実験による。

■ 吸水性能比較(水切り時間と吸水率の関係)



100×100×100mmにカットしたロックウールと他の繊維系断熱材を、水面下50mmに24時間浸し、傾斜角度30°の金網に置いたときの吸水量の経時変化を比較
*当社実験による。

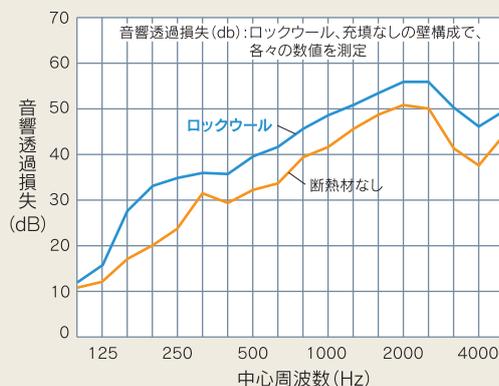


静かで心地よい生活を提供します。

ロックウールは、外部からの騒音や隣室、2階の物音など不快な音の進入を軽減。

また室内から外部への音漏れの減少にも役立ちます。

■ 遮音性能比較



(出典:ロックウール工業会)



現場作業がスムーズです。

ロックウールは柔軟性がありながら、腰が強く折れにくいという性質を合わせ持っています。また、カッターで簡単に切断でき、従来の繊維系断熱材と比べ痒さが少ないため、取扱・作業性に優れます。



安心してお使いいただけます。

ロックウールは、ホルムアルデヒドをほとんど発生しません。F☆☆☆☆(ロクセラムボード保温板3号のみF☆☆☆)ですから内装仕上げ材の使用面積の制限を受けることなく、安心してご使用いただけます。また、揮発性有機化合物(VOC)の発生もございません。さらにロックウールは、IARC(国際ガン研究機関)による発ガン性評価においてグループ3(発がん性について分類できない=お茶と同じ評価)となっています。

*ロックウールとアスベストは全く異なる繊維です。



製造エネルギーが約1/2*です。

JFEのロックウールの原材料は100%熔融スラグです。製鉄所の中に工場がありますので、主原料の高炉スラグは、製鉄所の高炉から巨大な鍋に入れて場内専用鉄道で運ばれます。1400℃という高温のまま運搬するため、再加熱量が圧倒的に少なく、製造エネルギーは他の繊維系断熱材に比べ約1/2です。

*熔融エネルギーの比較による。

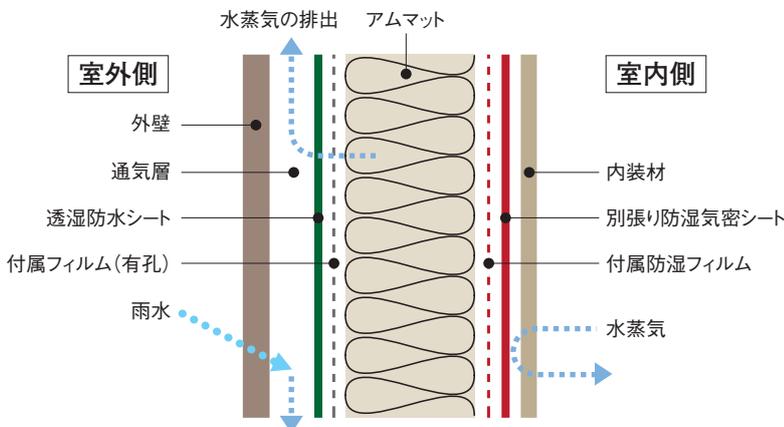
付属防湿フィルム 厚さ50 μ m

湿気に強い! 防湿層一体構造。

アムマット プレミアムは、
断熱性・耐水性・耐熱性に加え、
防露性能を大幅に向上。
壁体内の湿気の侵入を防ぎ、
構造躯体の耐久性を維持し
家を長持ちさせます。



■ 一般的な外壁の納まり



繊維系断熱材等では室内側に「防湿層」が必要です。「防湿層」は下の表の①以上とされています。アムマット「プレミアム」はその①の防湿フィルムを断熱材に一体化しています。即ち、JIS A 6930 A種相当の防湿フィルムを商品の室内側に使用しています。

一般の「アムマット」では、18 μ mのフィルムを使用しており、透湿抵抗比の計算で、「防湿層」になる、要件もございます。

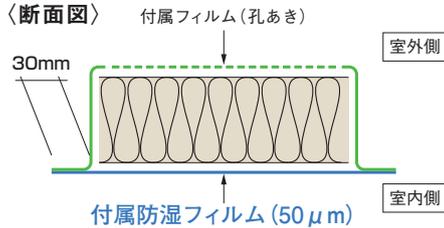
詳しくはP.77又は、ホームページをご参照ください。

	透湿抵抗 (m ² ·hmmHg/g) カッコ内 (m ² ·s·Pa/ng)	主な例示仕様
㊦	60 (0.029)	防湿フィルムの材厚15 μ m以上のもの
①	170 (0.082)	防湿フィルムの材厚50 μ m以上のもの (JIS A6930に規定するA種と同等以上の透湿抵抗を有するもの)
㊧	300 (0.144)	防湿フィルムの材厚100 μ m以上のもの (JIS A6930に規定するB種と同等以上の透湿抵抗を有するもの)

(出典:平成25年省エネルギー基準に準拠した算定・判断の方法及び解説(Ⅲ 住宅の設計施工指針))

アママット プレミアム

- 耳幅30mm以上で施工性向上
- 6面パックにより施工時のチクチク感を低減
- 付属防湿フィルムが従来のもより厚くなり、さらに結露対策を強化
透湿抵抗0.082[m²・s・Pa/ng]、170[m²・h・mmHg/g]以上 JIS A 6930 A種相当品です。



品番	JIS認証種類 密度 (kg/m ³)	標準寸法			入り数 (枚/梱)	相当施工面積 (坪/梱)	熱伝導率 (W/m ² ·K) 平均温度23℃	熱抵抗値 (m ² ·K/W) 平均温度23℃	設計価格 (円/坪)
		厚さ (mm)	幅 (mm)	長さ (mm)					
BHP3155	MA (30以上)	155	425	1360	6	約1.2	0.038	4.1	7,900
BHP3140AS	MA (30以上)	140	390	1180	9	約1.5	0.038	3.7	7,100
BHP3140S			425		7	約1.2			7,100
BHP3105AL	MA (30以上)	105	390	2880	5	約2.0	0.038	2.8	5,200
BHP3105			425	1360	9	約1.7			5,200
BHP3105L				2880	4	約1.6			5,200
BHP3105WL			470	約1.7	5,800				
BHP390AL	MA (30以上)	92	390	2880	5	約2.0	0.038	2.4	4,600
BHP390L			425						11
BHP390			1360	5	約2.2	5,100			
BHP390WL			470	5	約2.2	5,100			

●熱伝導率による断熱材区分はCです。

充填工法 天井2枚重ね用断熱材

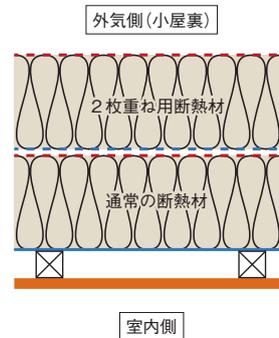
アママット

- 住宅省エネルギー技術 施工技術者講習テキスト—施工編—
(平成25年省エネルギー基準対応)の推奨施工方法が容易に出来ます。



2層の断熱施工

天井の断熱材を2層にする場合は、上の断熱材と下の断熱材の方向が直交するように施工します。
上側の断熱材の防湿フィルムは、剥がすか穴を開けて湿気が通るようにします。



品番	JIS認証種類 密度 (kg/m ³)	標準寸法			入り数 (枚/梱)	相当施工面積 (坪/梱)	熱伝導率 (W/m ² ·K) 平均温度23℃	熱抵抗値 (m ² ·K/W) 平均温度23℃	設計価格 (円/坪)
		厚さ (mm)	幅 (mm)	長さ (mm)					
BHM310WT	MA (30以上)	100	470	1360	9	約1.9	0.038	2.6	5,400

※定常計算による内部結露の確認はホームページから出力できます。

快適さと機能性を追求した
住宅用ロックウール断熱材

AMMAT

アママト

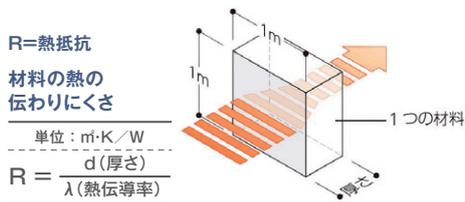


アママトはJIS A 9521 (2014) に認証された商品です。

■ 梱包表記の見方



■ 熱抵抗と熱伝導率との関係



■ JIS表記の見方

種類	ホルムアルデヒド	熱伝導率	熱抵抗値	寸法	包装	外皮の有無等
RWMA	F☆☆☆☆	λ38	R2.6	100×425×1360	L	V C

種類	密度	熱伝導率 W/(m·K)								
		0.045	0.043	0.041	0.039	0.038	0.037	0.036	0.035	0.034
L	LA	○								
	LB		○							
	LC			○						
	LD				○					
M	MA					○				
	MB						○			
	MC							○		
H	HA							○		
	HB								○	
	HC									○

アムマット

- 湿気に強いロックウール断熱材です
- 室内側は、18 μ mの付属防湿フィルム貼りです
- 耳幅約30mmで、施工性向上



住宅用

品番	JIS認証種類 密度(kg/m ³)	標準寸法			入り数 (枚/梱)	相当施工面積 (坪/梱)	熱伝導率(W/m \cdot K) 平均温度23 $^{\circ}$ C	熱抵抗値(m \cdot K/W) 平均温度23 $^{\circ}$ C	設計価格 (円/坪)
		厚さ(mm)	幅(mm)	長さ(mm)					
BHM3155*1	MA(30以上)	155	425	1360	6	約1.2	0.038	4.1	6,800
BHM3140A	MA (30以上)	140	390	1360	8	約1.5	0.038	3.7	6,100
BHM3140AS			1180	9	約1.4				
BHM3140			425	1360		7			約1.2
BHM3140S			1180	7					
BHM3105AL	MA (30以上)	105	390	2880	5	約2.0	0.038	2.8	4,200
BHM3105L			425	2880	4	約1.6			4,200
BHM3105			470	1360	9	約1.7			4,200
BHM3105W			470	1360	8				4,600
BHM310AL	MA (30以上)	100	390	2880	5	約2.0	0.038	2.6	3,900
BHM310L			425	2880	10	約1.9			3,900
BHM310			470	1360	9				約1.9
BHM310W			470	1360	9				
BHM390AL	MA (30以上)	92	390	2880	6	約2.4	0.038	2.4	3,500
BHM390AS			1180	13	約2.1	3,500			
BHM390L			2880	5	約2.0	3,500			
BHM390			425	1360	11	約2.1			3,500
BHM390S			1180	13	約2.1				3,500
BHM390W			470	1360	10				4,000
BHM385 *2	MA (30以上)	85	425	1360	11	約2.1	0.038	2.2	3,300
BHM385S *2			1180	13					3,300
BHM375AL	MA (30以上)	77	390	2880	7	約2.8	0.038	2.0	3,000
BHM375L			425	2880	6	約2.4			3,000
BHM375			470	1360	14	約2.6			3,000
BHM375W			470	1360	12	約2.5			3,400
BHM355AL	MA (30以上)	55	390	2880	10	約4.0	0.038	1.4	2,200
BHM355L			425	2880	9	約3.6			2,200
BHM355			1360	19					2,200
BHM355S			1180	21	約3.5	2,200			
BHM355W			470	1360		17			

【品番凡例】 BHM 3 \square \square \square (幅)A:390/無印:425/W:470 (長さ)S:1180/無印:1360/L:2880 ●フラット35の熱伝導率による断熱材区分はCです。

※1 主として天井用 ※2 受注生産品

根太レス工法用断熱材

アママット 床ボードⅡネダレス

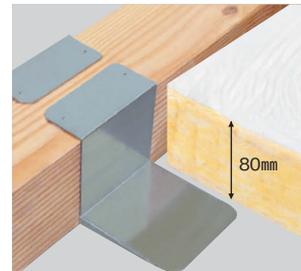
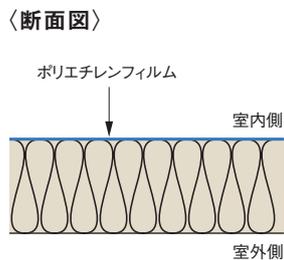
経済産業省
建材トップランナー制度
適合材
目標値 ≤ 0.03781

F★★★★★

JIS A 9521 建築用断熱材

受注生産品です。納期等詳細については弊社へお問い合わせください。

- 平成25年省エネルギー基準の4~7地域設計施工指針仕様基準(附則)に適合
- 大引き間用床ボード



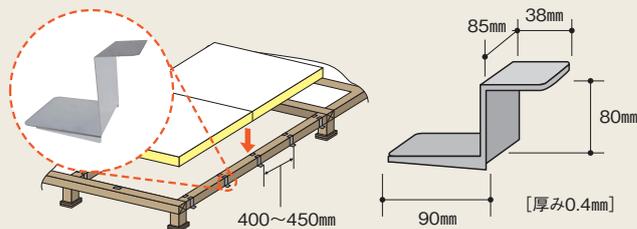
品番	適用	JIS認証種類 密度 (kg/m ³)	厚さ (mm)	幅 (mm)	長さ (mm)	入り数 (枚/梱)	相当施工面積 (坪/梱)	熱伝導率 (W/m·K) 平均温度23℃	熱抵抗値 (m ² ·K/W) 平均温度23℃	設計価格 (円/坪)
BH0680RSB*	ネダレス工法用	HA (60以上)	80	805	910	4	約1.0	0.036	2.2	18,900
BH0680RSC*				820						20,900
BH0680RMC*				880	1000					22,000
BH0680RMD*				895						22,700

※ 受注生産品

アママット 床ボードⅡ ネダレス専用受け金具 かかる~の

- 面取り加工・折り曲げ加工・ツメ加工等、随所に工夫が施されたネダレス専用金具です。

品番	材質	入り数 (個/箱)	施工面積 (坪)	梱包仕様	設計価格 (円/箱)
BH84080	溶融亜鉛鋼板	144	約8	ダンボール梱包	20,020



床用断熱材

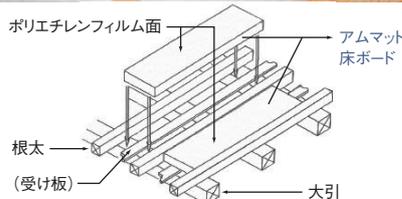
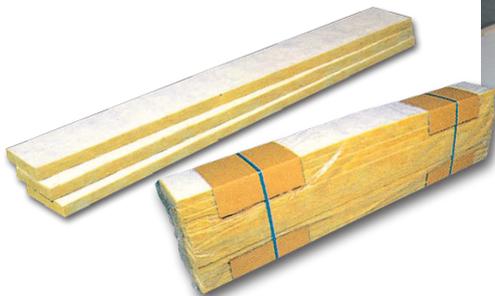
アママット 床ボード

経済産業省
建材トップランナー制度
適合材
目標値 ≤ 0.03781

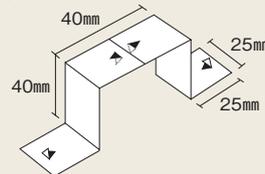
F★★★★★

JIS A 9521 建築用断熱材

- 根太間用床ボード
- 室内側はポリエチレンフィルム貼り



2×4工法金具 (別売品)



品番	材質	入り数
BH84040	ガルバリウム鋼板	500個/箱

品番	適用	JIS認証種類 密度 (kg/m ³)	厚さ (mm)	幅 (mm)	長さ (mm)	入り数 (枚/梱)	相当施工面積 (坪/梱)	熱伝導率 (W/m·K) 平均温度23℃	熱抵抗値 (m ² ·K/W) 平均温度23℃	設計価格 (円/坪)
BH0642S	根太工法用	HA (60以上)	42	257	1820	12	約2.0	0.036	1.1	4,500
BH0642L				1910	4,800					
BH0642W*				415	1820	8				6,300

※ BH0642Wには専用金具(48個入)が同梱されております。

外張工法・充填工法用

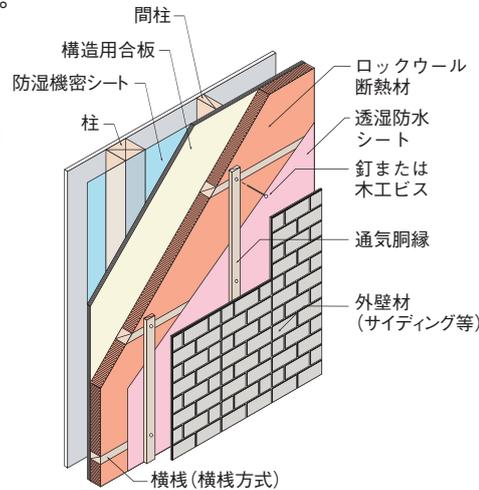
ロクセラムボード

経済産業省
建材トップランナー制度
適合材
目標:λ≦0.03781

F★★★★★

JIS A 9521 建築用断熱材
不燃材料:NM-8600

断熱性、耐水性に優れているロクセラムボードは、外張工法に最適なボードタイプ断熱材です。



住宅用

品番	適用	JIS認証種類 密度 (kg/m ³)	厚さ (mm)	幅 (mm)	長さ (mm)	入り数 (枚/梱)	相当施工面積 (坪/梱)	熱伝導率 (W/m·K) 平均温度23℃	熱抵抗値 (m ² ·K/W) 平均温度23℃	設計価格 (円/梱)
BB0610ZC	充填用	HA (60以上)	100	395	1360	4	約0.8	0.036	2.7	12,000
BB0610ZD				430						12,000
BB06010※	外張・ 外断熱用		100	605	910	4	約0.7		2.7	10,000
BB06060※			60			6	約1.0		1.6	6,700
BB06050		50	8			約1.3	1.3	10,000		

※ 受注生産品 ポリシート無し・裸品

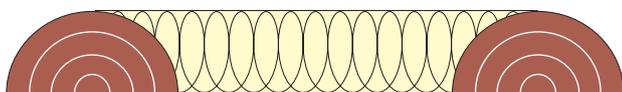
床用断熱材

アムマット床ロール

F★★★★★

JIS A 9521 建築用断熱材

● たいこ根太に最適



品番	適用	JIS認証種類 密度 (kg/m ³)	厚さ (mm)	幅 (mm)	長さ (mm)	入り数 (巻/梱)	相当施工面積 (坪/梱)	熱伝導率 (W/m·K) 平均温度23℃	熱抵抗値 (m ² ·K/W) 平均温度23℃	設計価格 (円/坪)
BH0350F	根太工法用	MA (40以上)	50	265	15000	3	約4.0	0.038	1.3	2,500

充填工法 天井・界壁用断熱材

建築用ロクセラム マット・フェルト

F★★★★

JIS A 9521 建築用断熱材
不燃材料:詳細は下記※

昭和45年12月28日建設省告示第1827号
等で、かさ比重0.04以上が規定されている
建物で使用できます。



フェルト



●マット ※不燃材料:NM-3616

品番	JIS認証種類 密度(kg/m ³)	厚さ (mm)	幅 (mm)	長さ (mm)	入り数 (枚/梱)	相当施工面積 (坪/梱)	熱伝導率 (W/m ² ·K) 平均温度23℃	熱抵抗値 (m ² ·K/W) 平均温度23℃	設計価格 (円/坪)
BH0410F	MA (40以上)	100	425	1360	8	約1.5	0.038	2.6	4,400
BH0410FW			470		7	約1.4			4,400
BH0455F		55	425	1360	16	約3.0		1.4	2,500
BH0455FW			470		15	約3.1			2,900

※ チューブ、マット付属フィルム共にアムマットと同じ仕様

●フェルト ※不燃材料:BD04010P(NM-8602 片面ポリ貼)、BF04050B(NM-8600 裸品)

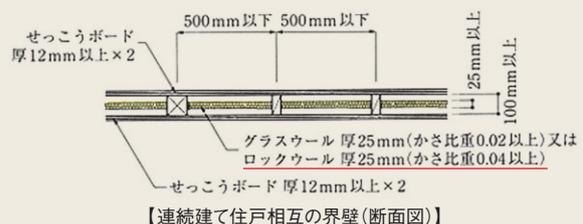
品番	JIS認証種類 密度(kg/m ³)	厚さ (mm)	幅 (mm)	長さ (mm)	入り数 (枚/梱)	施工面積 (坪/梱)	熱伝導率 (W/m ² ·K) 平均温度23℃	熱抵抗値 (m ² ·K/W) 平均温度23℃	設計価格 (円/梱)
BD04010P	MA (40以上)	100	910	5500	1	約1.5	0.038	2.6	11,200
BF04050B		50		11000		約3.0		1.3	10,700

ロクセラム マット・フェルトは、密度が決められている共同住宅等の界壁等に使えます。

構造の種類	基準・認定者	内容	断熱材仕様・他
省令準耐火構造	住宅金融支援機構 フラット35仕様書	住宅金融支援機構が定める基準 フラット35・フラット35S・ 認定低炭素住宅等で仕様異なります。	[床直下の天井] 厚さ:50mm以上、かさ比重:0.024以上 [長屋建て・共同住宅の界壁] 厚さ:50mm以上、かさ比重:0.040以上
	一般社団法人 日本木造住宅産業協会	住宅金融支援機構が定める基準に合格	日本木造住宅産業協会が定める仕様

住宅金融支援機構のフラット35仕様書ではロックウールの密度に関して規定されています。一般的に、ロックウールで密度に関する表記が出てくるのは、この仕様書と下記の告示です。

- 建設省告示1827号(界壁遮音)かさ比重0.04
- 建設省告示1358号及び1380号(準耐火構造)かさ比重0.024
→通常のアムマットもご使用いただけます。

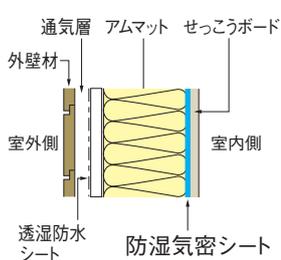


〈出典:住宅金融支援機構〉

防湿気密シート

JIS A 6930 B種相当住宅用
プラスチック系防湿フィルム

防湿気密シートで建物全体を覆えば手軽に低コストで高気密化できます。室内側の水分を壁体内へ侵入させないため、断熱材の室内側に施工します。



品番	材質	厚さ×幅×長さ	梱包数 (本/梱)	梱包 仕様	設計価格 (円/箱)
BH8412JA	ポリ エチレン	0.1×1,200×50m	2	紙巻 梱包	13,000
BH8421JB		0.1×2,100×50m(半折)	1		11,000

気密テープ

施工しやすく、接合部を確実にシールするテープ。シートとシートの継ぎ目はもちろん、柱や配管まわりなども確実にシールする気密テープ。



品番	材質	厚さ×幅×長さ	梱包数 (巻/箱)	梱包 仕様	設計価格 (円/箱)
BH8450J	アクリル 系	0.2×50×20m	30	ダン ボール	31,000

建材トップランナー制度



対象商品には左記の
マークを入れております。

トップランナー制度は、経済産業省 資源エネルギー庁が、製品の性能をさらに向上させるように目標値を設定し、その達成を求める制度です。1998年(平成10年)より家電や自動車等が対象となり、省エネルギー性の向上が図られ大きな成果を上げています。そして、2013年(平成25年)12月に建築材料にもトップランナー制度(建材トップランナー制度)が拡大され「住宅用断熱材」が加わりました。2014年(平成26年)11月には「ガラスとサッシ」が加わりました。

■ 2022年の具体的な目標値は下記になります

ロックウールの熱伝導率は「グラスウール高付加価値品」と同等の断熱性能「0.038W/(m・K)」ですが、更に0.5%改善し、平成34年(2022年)に0.03781[W/(m・K)]を達成することを目指しています。

断熱材区分		トップランナー値 [(熱伝導率)W/(m・K)]	効率改善後の トップランナー値 [(熱伝導率)W/(m・K)]	現在 出荷割合	目標年度 出荷割合	目標基準値 [(熱伝導率)W/(m・K)]	性能 改善率
ロックウール断熱材		0.038	0.03781 (0.5%改善)	—	—	0.03781	0.5%
グラスウール断熱材	普及品	0.050	0.04975 (0.5%改善)	40.48%	31.41%	0.04156	6.04%
	高付加価値品	0.038	0.03781 (0.5%改善)	59.52%	68.59%		
押し出し法 ポリスチレンフォーム 保温材	普及品	0.040	0.03900 (2.5%改善)	48.12%	41.80%	0.03232	6.19%
	高付加価値品	0.028	0.02752 (1.7%改善)	51.88%	58.20%		

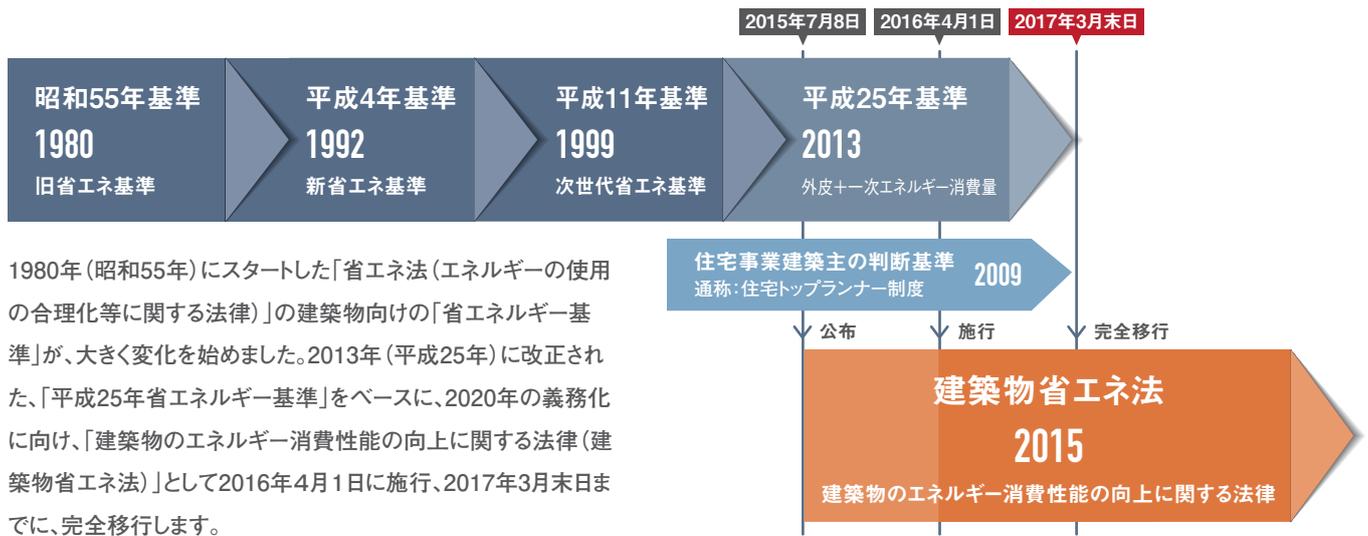
【以下の断熱材については、対象範囲から除外されました。】

- グラスウール断熱材のうち密度24[kg/m³]以上の建築材料(遮音・防火性能が求められる場合に用いられる断熱材であるため。)
- 硬質ウレタンフォーム(施工現場によって性能が変わる可能性があり、現段階では製造事業者等による出荷時点における材料の性能と施工後の断熱性能との関係が必ずしも明らかでないため。)
- ロックウール断熱材及びグラスウール断熱材のうち吹き込み品(施工現場によって性能が変わる可能性があり、現段階では製造事業者等による出荷時点における材料の性能と施工後の断熱性能との関係が必ずしも明らかでないため。)
- グラスウール断熱材を使用した真空断熱材(市場に占めるシェアが低いため。)
- セルロースファイバー、高発泡ポリエチレン、ビーズ法ポリスチレンフォーム及びフェノールフォーム(市場に占めるシェアが低いため。)

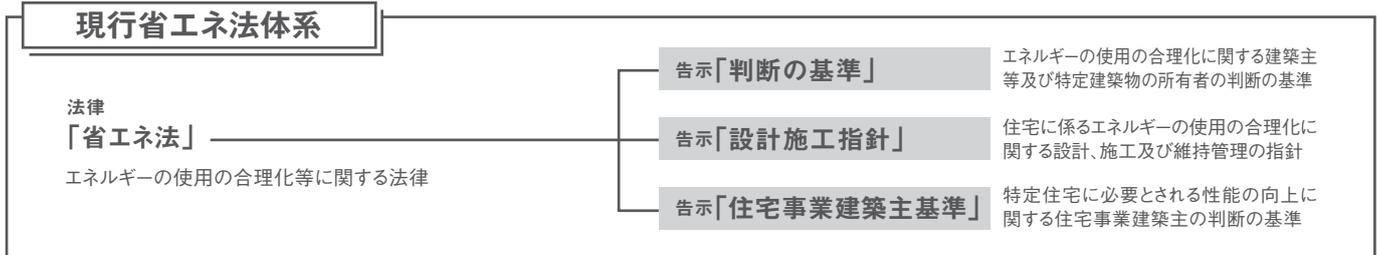
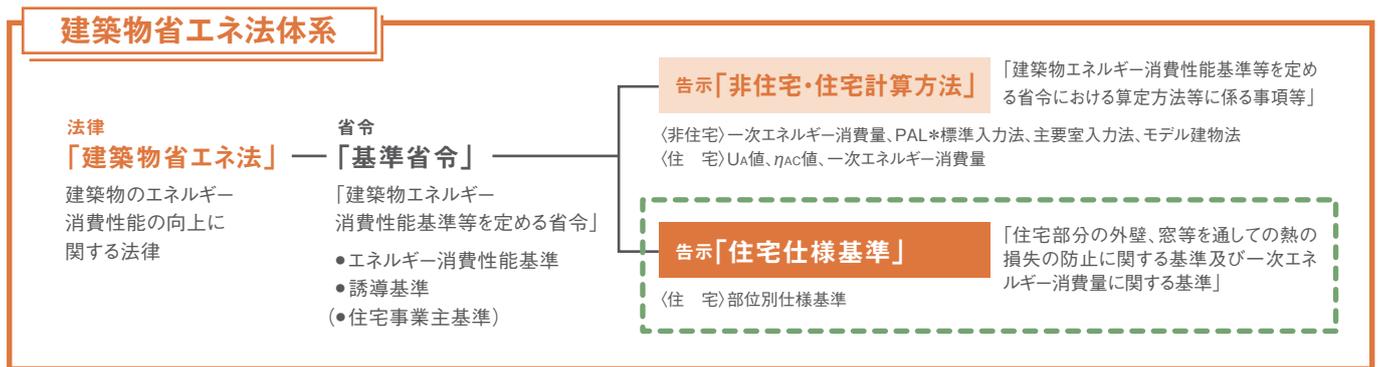
地球と暮らす、あたらしい住まいのかたち。



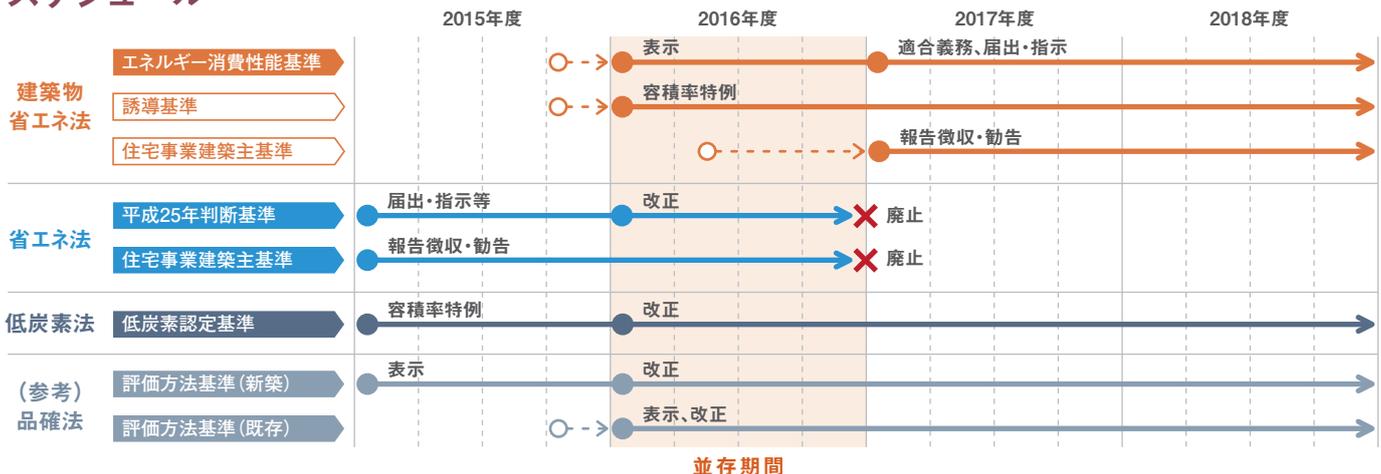
省エネルギー基準は「建築物省エネ法」に完全移行します。



建築物省エネ法、基準の体系



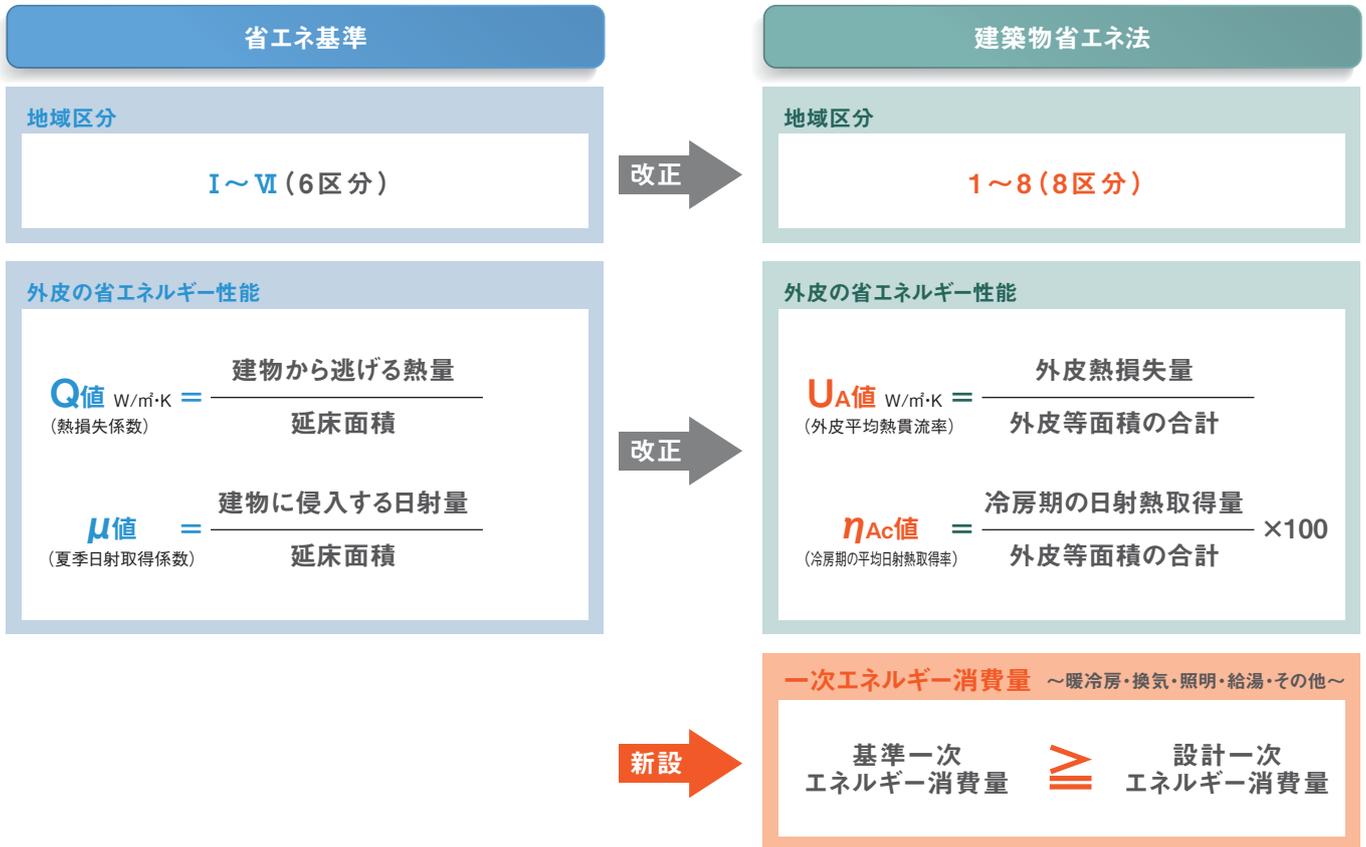
スケジュール



建築物省エネ法の基準と評価方法

（建築物エネルギー消費性能基準を定める省令）

建築物省エネ法の基準は、外皮性能と一次消費エネルギーで評価となりました。



地域区分と外皮性能・基準値

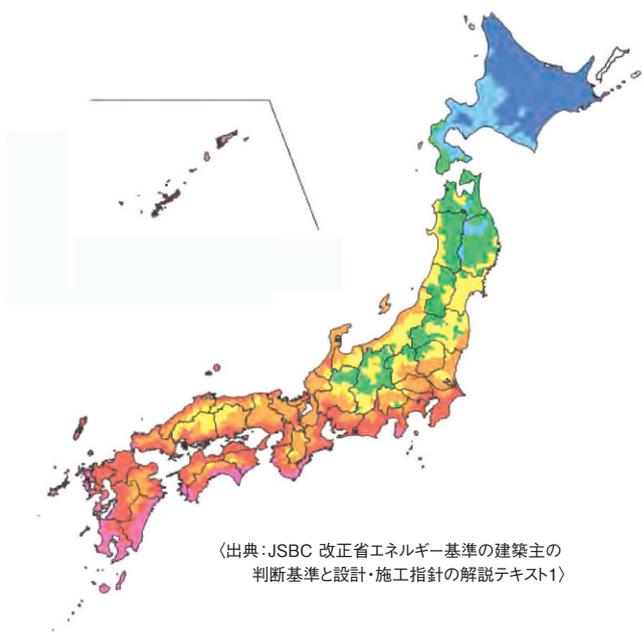
外皮性能は「平均熱貫流率 U_A 」と「冷房期の平均日射熱取得率 η_{Ac} 」が地域別で下記の基準値を満足する事が必須です。

省エネ法		建築物省エネ法	U_A W/(m ² ·K) 外皮平均熱貫流率の 基準値	η_{Ac} 冷房期の 平均日射熱取得率
I	Ia、Ik	1地域	0.46	—
II	II	2地域	0.46	—
III	III	3地域	0.56	—
IV	IVa、IVb	4地域	0.75	—
V	V	5地域	0.87	3.0
VI	VI	6地域	0.87	2.8
		7地域	0.87	2.7
		8地域	—	3.2

都道府県別の地域区分一覧表 (平成11年基準・住宅事業建築主基準との比較)

建築物省エネ法の地域区分	都道府県名
1, 2	北海道
3	青森県、岩手県、秋田県
4	宮城県、山形県、福島県、栃木県、新潟県、長野県
5, 6	茨城県、群馬県、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、富山県、石川県、福井県、山梨県、岐阜県、静岡県、愛知県、三重県、滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県、鳥取県、島根県、岡山県、広島県、山口県、徳島県、香川県、愛媛県、高知県、福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県、大分県
7	宮崎県、鹿児島県
8	沖縄県

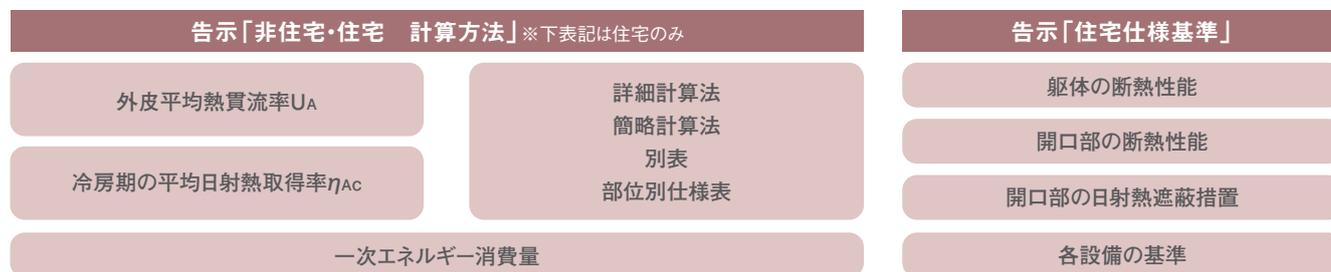
*「建築物省エネ法」の地域区分の詳細は、1月29日に公布された告示をご参照ください。
<http://www.mlit.go.jp/common/001118363.pdf>



〈出典：JSBC 改正省エネルギー基準の建築主の判断基準と設計・施工指針の解説テキスト1〉

「建築物省エネ法」の評価フロー

建築物省エネ法の評価フローは大きく分けて2種類。「公開プログラムによる計算方法」と「住宅仕様基準」です。



「公開プログラムによる計算方法」：P.27から説明 「住宅仕様基準」：P.21から説明

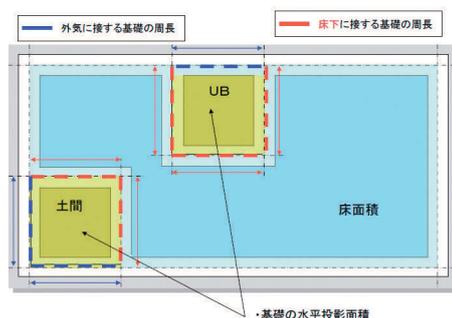
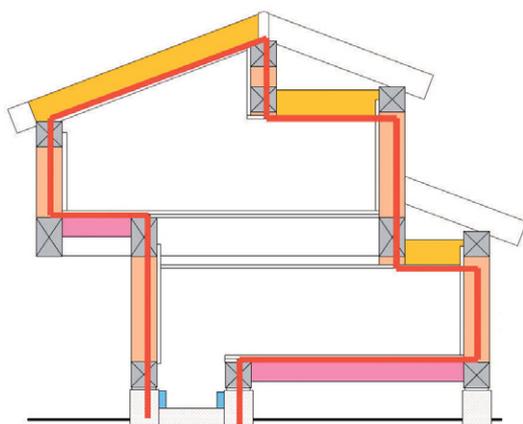
事前準備 (共通事項)

熱的境界の決定

断熱材・開口部等と外部との境界線をまず決めます。

「断熱構造とする部分」のルールはP.63をご参照ください。

躯体・断熱化の基本は、住宅の外気に接している部分(床・外壁・天井・屋根等)を、断熱材で隙間なくスッポリと包み込むことです。

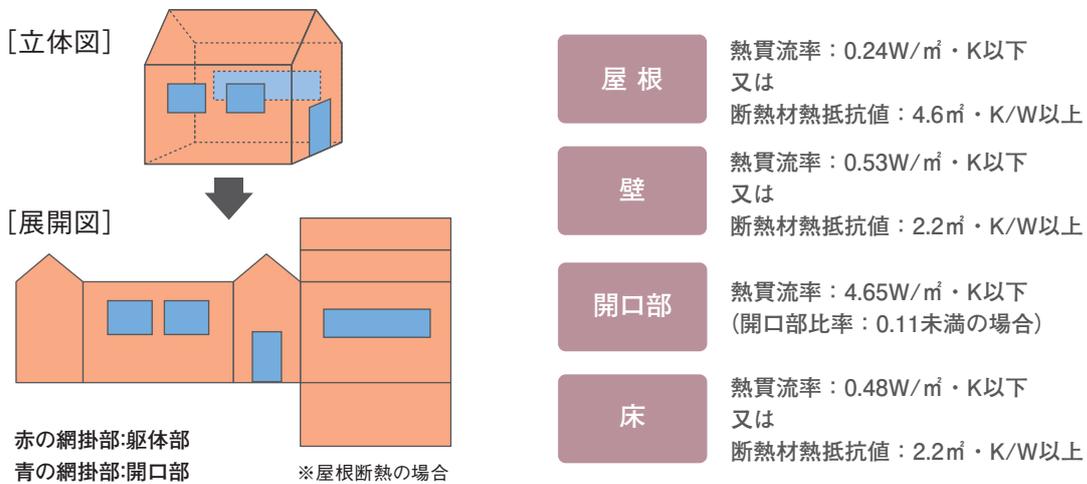


住宅仕様基準の概要

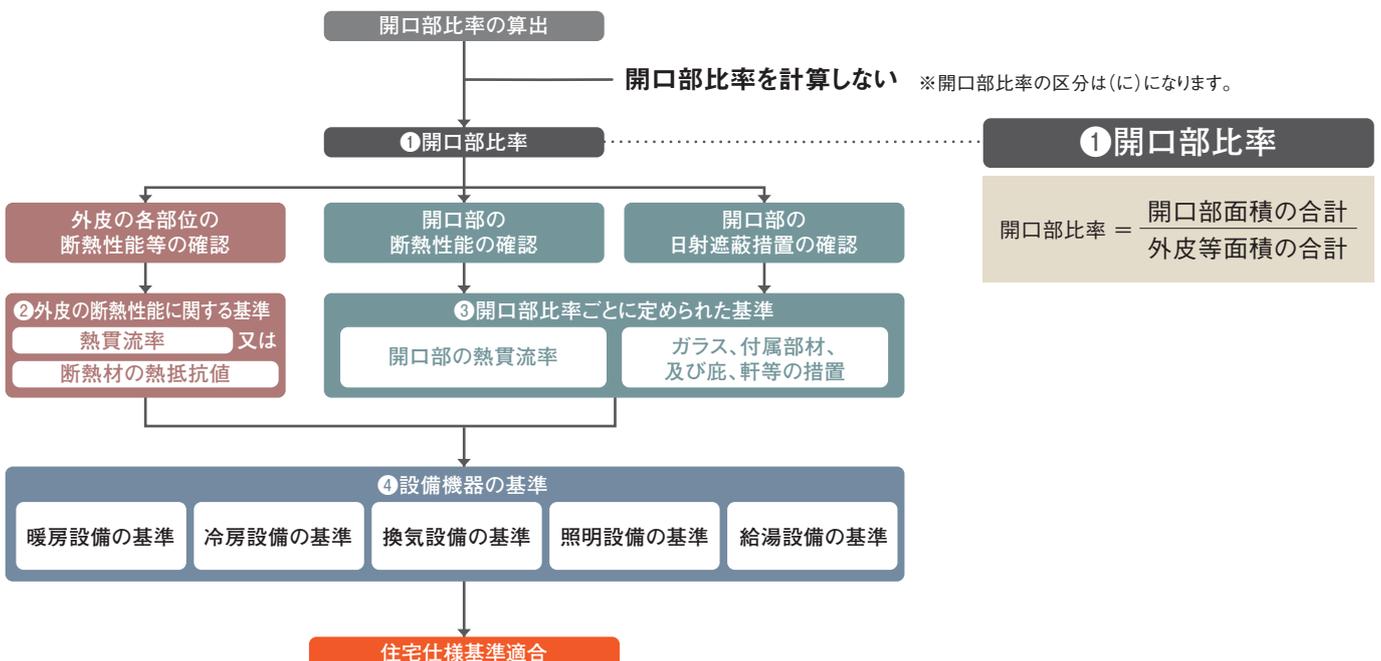
（住宅部分の外壁、窓等を通しての熱の損失の防止に関する基準及び一次消費エネルギー量に関する基準）

仕様基準は、単位住戸の天井又は屋根、壁、床、開口部の、それぞれについて、住宅の構造（RC・その他）・断熱方法（内断熱・外断熱・ほか）に応じて、地域区分毎に、断熱性能（熱貫流率又は断熱材の熱抵抗）の基準値を設定しています。特に、開口部については、開口部比率（開口部面積/外皮合計面積）に応じて、断熱性能（熱貫流率）と、日射熱遮蔽措置に関する仕様もあります。

仕様基準のイメージ（6地域の木造住宅充填断熱の場合）



住宅仕様基準（部位別仕様基準）の評価フロー



外皮性能仕様基準 ②「外皮の断熱性能」に関する基準

■ 躯体の熱貫流率の基準値 (その他の単位住戸)

単位: W/(m²・K)

部位	地域区分	地域区分							
		1	2	3	4	5	6	7	8
屋根または天井		0.17	0.24		0.24				0.24
壁		0.35	0.53		0.53				—
床	外気に接する部分	0.24	0.24		0.34				—
	その他の部分	0.34	0.34		0.48				—
土間床等の外周部の基礎	外気に接する部分	0.27	0.27		0.52				—
	その他の部分	0.71	0.71		1.38				—

■ 断熱材の熱抵抗値の基準値 (木造の単位住戸・充填断熱工法)

単位: m²・K/W

部位	地域区分	地域区分							
		1	2	3	4	5	6	7	8
屋根または天井	屋根	6.6	4.6		4.6				4.6
	天井	5.7	4.0		4.0				4.0
壁		3.3	2.2		2.2			—	
床	外気に接する部分	5.2	5.2		3.3			—	
	その他の部分	3.3	3.3		2.2			—	
土間床等の外周部の基礎	外気に接する部分	3.5	3.5		1.7			—	
	その他の部分	1.2	1.2		0.5			—	

■ 断熱材の熱抵抗値の基準値 (枠組壁工法の単位住戸・充填断熱工法)

単位: m²・K/W

部位	地域区分	地域区分							
		1	2	3	4	5	6	7	8
屋根または天井	屋根	6.6	4.6		4.6				4.6
	天井	5.7	4.0		4.0				4.0
壁		3.6	2.3		2.3			—	
床	外気に接する部分	4.2	4.2		3.1			—	
	その他の部分	3.1	3.1		2.0			—	
土間床等の外周部の基礎	外気に接する部分	3.5	3.5		1.7			—	
	その他の部分	1.2	1.2		0.5			—	

■ 断熱材の熱抵抗値の基準値 (木造、枠組壁工法又は鉄骨造の単位住戸・ 外張断熱工法または内張断熱工法)

単位: m²・K/W

部位	地域区分	地域区分							
		1	2	3	4	5	6	7	8
屋根または天井		5.7	4.0		4.0				4.0
壁		2.9	1.7		1.7			—	
床	外気に接する部分	3.8	3.8		2.5			—	
	その他の部分	—	—		—			—	
土間床等の外周部の基礎	外気に接する部分	3.5	3.5		1.7			—	
	その他の部分	1.2	1.2		0.5			—	

外皮性能仕様基準 ③開口部の断熱性能等に関する基準

開口部では開口部比率に応じて、熱貫流率(U)と窓の日射遮蔽の仕様が定められており、付属部材等も必要な場合があります。詳細は窓サッシ・ガラスメーカーにお問い合わせください。

■ 開口部比率の区分

地域の区分と 開口部比率の 区分	一戸建ての住宅			一戸建ての住宅以外の住宅及び複合建築物		
	1～3地域	4～7地域	8地域	1～3地域	4～7地域	8地域
(い)	0.07未満	0.08未満	0.08未満	0.05未満	0.05未満	0.05未満
(ろ)	0.07以上0.09未満	0.08以上0.11未満	0.08以上0.11未満	0.05以上0.07未満	0.05以上0.07未満	0.05以上0.07未満
(は)	0.09以上0.11未満	0.11以上0.13未満	0.11以上0.13未満	0.07以上0.09未満	0.07以上0.08未満	0.07以上0.08未満
(に)	0.11以上 計算をしない	0.13以上 計算をしない	0.13以上 計算をしない	0.09以上 計算をしない	0.08以上 計算をしない	0.08以上 計算をしない

※単位住戸の床面積に0.02を乗じた数値以下の小窓は対象外です。

住宅仕様基準の概要

（住宅部分の外壁、窓等を通しての熱の損失の防止に関する基準及び一次消費エネルギー量に関する基準）

単位：W/(m²・K)

開口部比率の区分と熱貫流率(U)の基準値

地域の区分と開口部比率の区分	熱貫流率の基準値			
	1～3地域	4地域	5～7地域	8地域
(い)	2.91	4.07	6.51	—
(ろ)	2.33	3.49	4.65	—
(は)	1.90	2.91	4.07	—
(に)	1.60	2.33	3.49	—

※単位住戸の床面積に 0.02 を乗じた数値以下の小窓は対象外です。

一戸建て住宅の建具の種類若しくはその組み合わせ又は付属部材若しくは「ひさし」、軒等の設置に関する事項

開口部比率	建具の種類若しくはその組み合わせ又は付属部材若しくは「ひさし」、軒等の設置に関する事項		
	1～4地域	5～7地域	8地域
(い)	—	—	付属部材又はひさし、軒等を設けるもの
(ろ)	—	イ又はロに該当するもの イ) ガラスの日射熱取得率が0.74以下であるもの ロ) 付属部材又はひさし、軒等を設けるもの	イ又はロに該当するもの イ) ガラスの日射熱取得率が0.68以下のものに、ひさし、軒等を設けるもの ロ) 付属部材を設けるもの
(は)	—	イ、ロ又はハに該当するもの イ) ガラスの日射熱取得率が0.49以下であるもの ロ) ガラスの日射熱取得率が0.74以下のものに、ひさし、軒等を設けるもの	イ又はロに該当するもの イ) ガラスの日射熱取得率が0.68以下のものに、ひさし、軒等を設けるもの ロ) 付属部材を設けるもの
(に)	—	ハ) 付属部材(南±22.5度に設置するものについては、外付けブラインドに限る。)を設けるもの	

※単位住戸の床面積に 0.04 を乗じた数値以下の小窓は対象外。一戸建ての住宅以外の住宅及び複合建築物の基準は告示を参照ください。(8地域のみ)

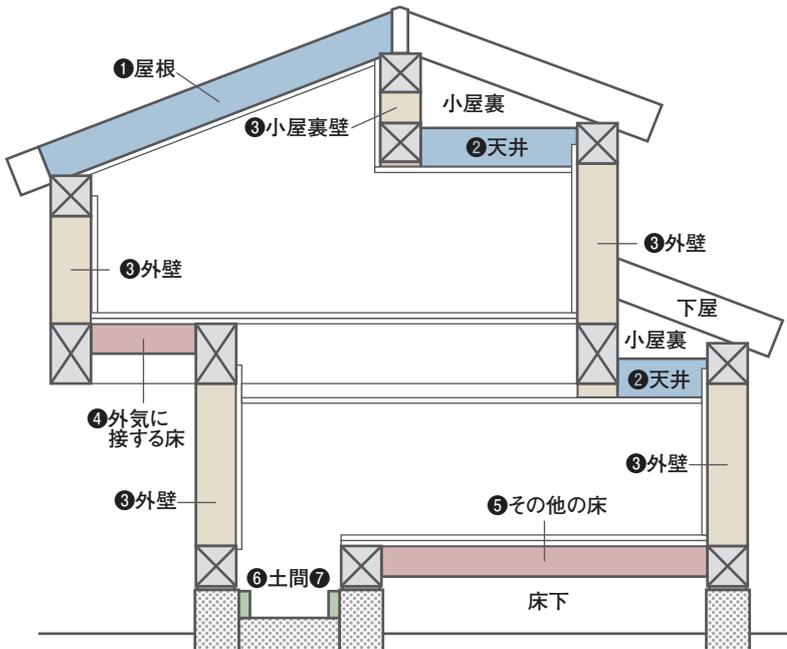
一次消費エネルギー仕様基準 ④各設備機器の基準

冷・暖房方式、運転方式	1、2、3及び4地域	5、6及び7地域
単位住戸全体を暖房する方式	ダクト式セントラル空調機であって、ヒートポンプを熱源とするもの	
居室のみを暖房する方式	連続運転	石油熱源機を用いた温水暖房用パネルラジエーターであって、日本工業規格S3031に規定する熱効率が83.0%以上であり、かつ、配管に断熱被覆があるもの
	間歇運転	強制対流式の密閉式石油ストーブであって、日本工業規格S3031に規定する熱効率が86.0%以上であるもの
単位住戸全体を冷房する方式	ダクト式セントラル空調機であって、ヒートポンプを熱源とするもの	
居室のみを冷房する方式	ルームエアコンディショナーであって、日本工業規格 B8615-1 に規定する冷房能力を消費電力で除した数値が、以下の算出式により求められる基準値以上であるもの $-0.504 \times \text{冷房能力 (単位 キロワット)} + 5.88$	
換気設備	全般換気設備の比消費電力(熱交換換気設備を採用する場合にあっては、比消費電力を有効換気量率で除した値)が、換気回数が0.5回以下の場合において、0.3(単位1時間につき1立方メートル当たりのワット)以下であること又は建築物エネルギー消費性能基準等を定める省令における算定方法等に係る事項に定める算出方法を用いる方法においてこれと同等以上の評価となるものであること。	
照明設備	単位住戸に採用する照明設備について、非居室に白熱灯又はこれと同等以下の性能の照明設備を採用しないこと。	
給湯設備	単位住戸に採用する給湯設備(排熱利用設備を含む。)が、地域の区分に応じ、次の表に掲げる事項に該当するもの又は建築物エネルギー消費性能基準等を定める省令における算定方法等に係る事項に定める算出方法を用いる方法においてこれと同等以上の評価となるものであること。	
	石油給湯機であって、日本工業規格S2075に基づくモード熱効率が81.3%以上であるもの。	ガス給湯機であって、日本工業規格S2075に基づくモード熱効率が78.2%以上であるもの。

仕様基準の断熱材仕様例(1~2地域)

木造の単位住戸・充填断熱工法

地域区分:1~2



1~2地域の断熱材部位	断熱材の熱抵抗値の基準値 [m ² ·K/W]	断熱材の例	
		種類	厚さ
屋根または天井	①屋根	XPS _{3b}	185mm
	②天井	RW _(MA)	155+100mm
壁	③壁 ※1	RW _(MA)	140mm
床	④外気に接する部分※2	XPS _{3b}	150mm
	⑤その他の部分	XPS _{3b}	95mm
土間床等の※3 外周部の基礎	⑥外気に接する部分	XPS _{3b}	100mm
	⑦その他の部分	XPS _{3b}	35mm

※1 躯体壁厚さが必要です。

※2 外気に接する床で、床面積の合計に0.05を乗じた面積以下の部分については、「その他の部分」と見なすことができます。

※3 玄関部の土間立ち上がり部のみは、一般的には不要です。詳しくは評価機関にご確認ください。

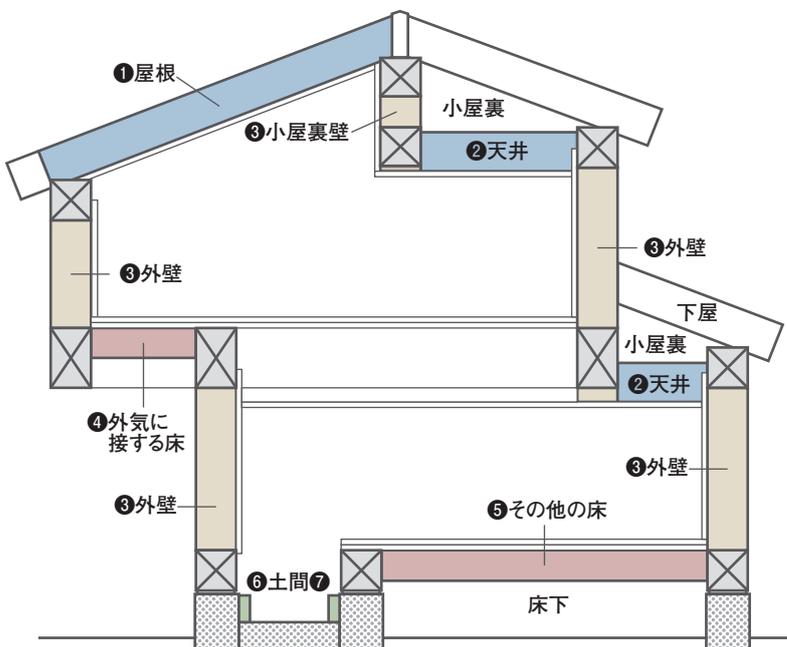
開口部比率の区分	開口部の熱貫流率の基準値[W/(m ² ·K)]
	1~2地域
(い) 0.07未満	2.91
(ろ) 0.07以上~0.09未満	2.33
(は) 0.09以上~0.11未満	1.90
(に) 0.11以上(新規設定)※4	1.60

※4 開口部比率計算をしない場合も適用。 *床面積の2%以下の小窓は対象外。

仕様基準の断熱材仕様例(3地域)

木造の単位住戸・充填断熱工法

地域区分:3



3地域の断熱材部位	断熱材の熱抵抗値の基準値 [m ² ·K/W]	断熱材の例	
		種類	厚さ
屋根または天井	①屋根	XPS _{3b}	130mm
	②天井	RW _(MA)	155mm
壁	③壁	RW _(MA)	92mm
床	④外気に接する部分※1	XPS _{3b}	150mm
	⑤その他の部分	XPS _{3b}	95mm
土間床等の※2 外周部の基礎	⑥外気に接する部分	XPS _{3b}	100mm
	⑦その他の部分	XPS _{3b}	35mm

※1 外気に接する床で、床面積の合計に0.05を乗じた面積以下の部分については、「その他の部分」と見なすことができます。

※2 玄関部の土間立ち上がり部のみは、一般的には不要です。詳しくは評価機関にご確認ください。

開口部比率の区分	開口部の熱貫流率の基準値[W/(m ² ·K)]
	3地域
(い) 0.07未満	2.91
(ろ) 0.07以上~0.09未満	2.33
(は) 0.09以上~0.11未満	1.90
(に) 0.11以上(新規設定)※3	1.60

※3 開口部比率計算をしない場合も適用。 *床面積の2%以下の小窓は対象外。

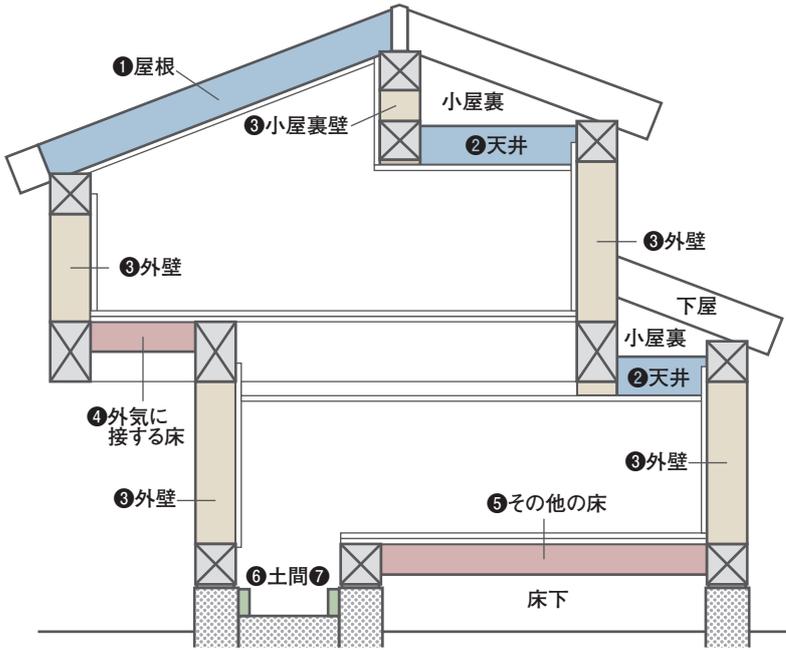
住宅仕様基準の概要

（住宅部分の外壁、窓等を通しての熱の損失の防止に関する基準及び一次消費エネルギー量に関する基準）

仕様基準の断熱材仕様例（4～7地域）

木造の単位住戸・充填断熱工法

地域区分：4～7



4～7地域の断熱材部位	断熱材の熱抵抗値の基準値 [m ² ·K/W]	断熱材の例	
		種類	厚さ
屋根または天井	4.6	①屋根	XPS _{3b} 130mm
		②天井	RW _(MA) 155mm
壁	2.2	③壁	RW _(MA) 92mm
床	3.3	④外気に接する部分 ※1	XPS _{3b} 95mm
		⑤その他の部分	RW _(HA) 80mm
土間床等の ※2 外周部の基礎	1.7	⑥外気に接する部分	XPS _{3b} 50mm
		⑦その他の部分	XPS _{3b} 15mm

※1 外気に接する床で、床面積の合計に0.05を乗じた面積以下の部分については、「その他の部分」と見なすことができます。
 ※2 玄関部の土間立ち上がり部のみは、一般的には不要です。詳しくは評価機関にご確認ください。

開口部比率の区分	開口部の熱貫流率の基準値 [W/(m ² ·K)]	
	4地域	5～7地域
(い) 0.08未満	4.07	6.51
(ろ) 0.08以上～0.11未満	3.49	4.65
(は) 0.11以上～0.13未満	2.91	4.07
(に) 0.13以上(新規設定) ※3	2.33	3.49

※3 開口部比率計算をしない場合も適用。 *床面積の2%以下の小窓は対象外。

AMMATの例 [アムマット製品一覧]

	品番	JIS認証種類 密度 (kg/m ³)	標準寸法			入り数 (枚/梱)	相当施工面積 (坪/梱)	熱伝導率 (W/m·K) 平均温度23℃	熱抵抗値 (m ² ·K/W) 平均温度23℃	設計価格 (円/坪)
			厚さ (mm)	幅 (mm)	長さ (mm)					
プレミアムアムマット	BHP390AL	MA (30以上) 防湿層付※4	92	390	2880	5	約2.0	0.038	2.4	4,600
	BHP390L			425						4,600
	BHP390WL			470						5,100
アムマット	BHM3155※5	MA(30以上)	155	425	1360	6	約1.2	0.038	4.1	6,800
	BHM390AL	MA (30以上)	92	390	2880	6	約2.4	0.038	2.4	3,500
	BHM390AS			1180	13	約2.1	3,500			
	BHM390L			2880	5	約2.0	3,500			
	BHM390			425	1360	11	約2.1			3,500
	BHM390S			1180	13	3,500				
	BHM390W			470	1360	10				4,000
ネダレスアムマット	BH0680RSB※6			HA (60以上)	80	805	910			4
	BH0680RSC※6	820	20,900							
	BH0680RMC※6	880	22,000							
	BH0680RMD※6	895	1000			22,700				

【品番凡例】 BHM 3□□□□□ (幅)A:390/無印:425/W:470 (長さ)S:1,180/無印:1,360/L:2,880

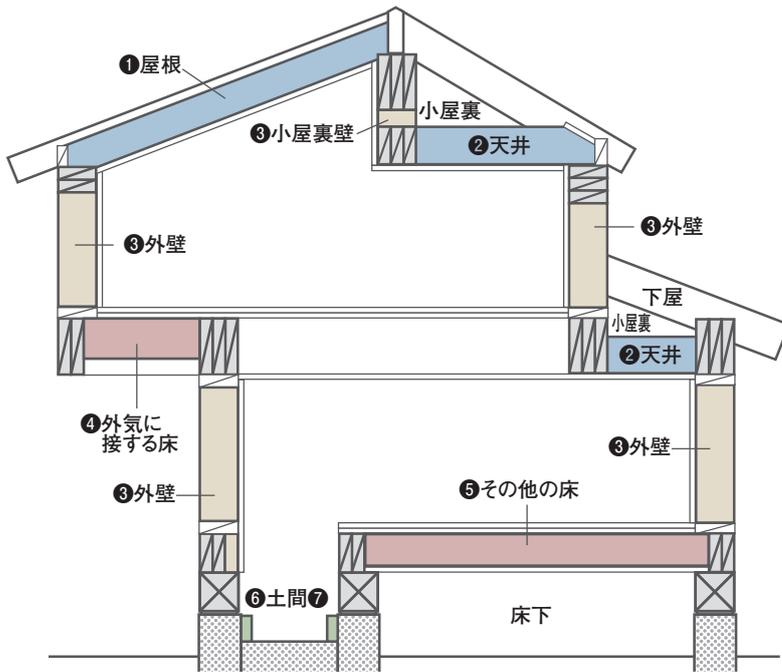
● フラット35の熱伝導率による断熱材区分はCです。

※4 JIS A 6930 相当 ※5 主として天井用 ※6 ネダレス工法用 受注生産品

仕様基準の断熱材仕様例(4~7地域)

枠組壁工法の単位住戸・充填断熱工法

地域区分:4~7



4~7地域の断熱材部位		断熱材の熱抵抗値の基準値 [m ² ·K/W]	断熱材の例	
			種類	厚さ
屋根または天井	①屋根	4.6	XPS _{3b}	130mm
	②天井	4.0	RW _(MA)	155mm
壁	③壁	2.3	RW _(MA)	92mm
床	④外気に接する部分※1	3.1	XPS _{3b}	90mm
	⑤その他の部分	2.0	RW _(HA)	42mm (2枚)
土間床等の※2 外周部の基礎	⑥外気に接する部分	1.7	XPS _{3b}	50mm
	⑦その他の部分	0.5	XPS _{3b}	15mm

※1 外気に接する床で、床面積の合計に0.05を乗じた面積以下の部分については、「その他の部分」と見なすことができます。

※2 玄関部の土間立ち上がり部のみは、一般的には不要です。詳しくは評価機関にご確認ください。

開口部比率の区分	開口部の熱貫流率の基準値 [W/(m ² ·K)]	
	4地域	5~7地域
(い) 0.08未満	4.07	6.51
(ろ) 0.08以上~0.11未満	3.49	4.65
(は) 0.11以上~0.13未満	2.91	4.07
(に) 0.13以上(新規設定)※3	2.33	3.49

※3 開口部比率計算をしない場合も適用。 *床面積の2%以下の小窓は対象外。

AMMATの例 [アムマット製品一覧]

	品番	JIS認証種類 密度 (kg/m ³)	標準寸法			入り数 (枚/梱)	相当施工面積 (坪/梱)	熱伝導率 (W/m·K) 平均温度23℃	熱抵抗値 (m ² ·K/W) 平均温度23℃	設計価格 (円/坪)
			厚さ (mm)	幅 (mm)	長さ (mm)					
プレミアム アムマット	BHP390AL	MA (30以上) 防湿層付※4	92	390	2880	5	約2.0	0.038	2.4	4,600
	BHP390L			425						4,600
	BHP390WL			470						5,100
アムマット	BHM3155※5	MA (30以上)	155	425	1360	6	約1.2	0.038	4.1	6,800
	BHM385※6	MA (30以上)	85	425	1360	11	約2.1	0.038	2.2	3,300
	BHM385S※6			1180	13	3,300				
床 ボード ※8	BH0642S	HA (60以上)	42	257	1820	12	約2.0	0.036	1.1	4,500
	BH0642L			1910	4,800					
	BH0642W※7			415	1820	8				6,300

【品番凡例】 BHM 3□□△□ (幅)A:390/無印:425/W:470 (長さ)S:1,180/無印:1,360/L:2,880

● フラット35の熱伝導率による断熱材区分はCです。

※4 JIS A 6930 相当 ※5 主として天井用 ※6 受注生産品

※7 BH0642Wには専用金具(48個入り)が同梱されておりますが、BH0642S、BH0642Lには付属しておりませんのでBH084040(500個入り)をお求めください。

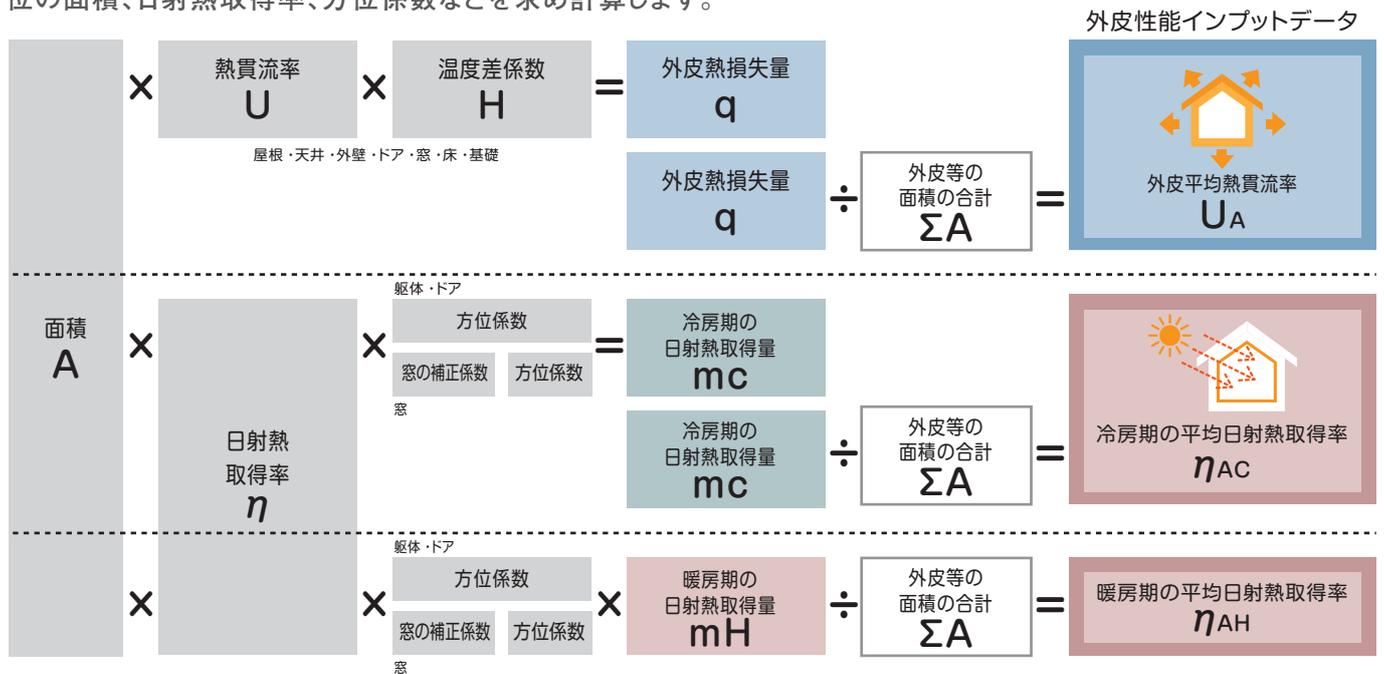
※8 床の熱抵抗値が2.0[m²·K/W]以上ですので、床ボードは2枚重ねてください。計算方法等はP.84をご参照ください。

「住宅計算方法」の具体的な内容と算出方法

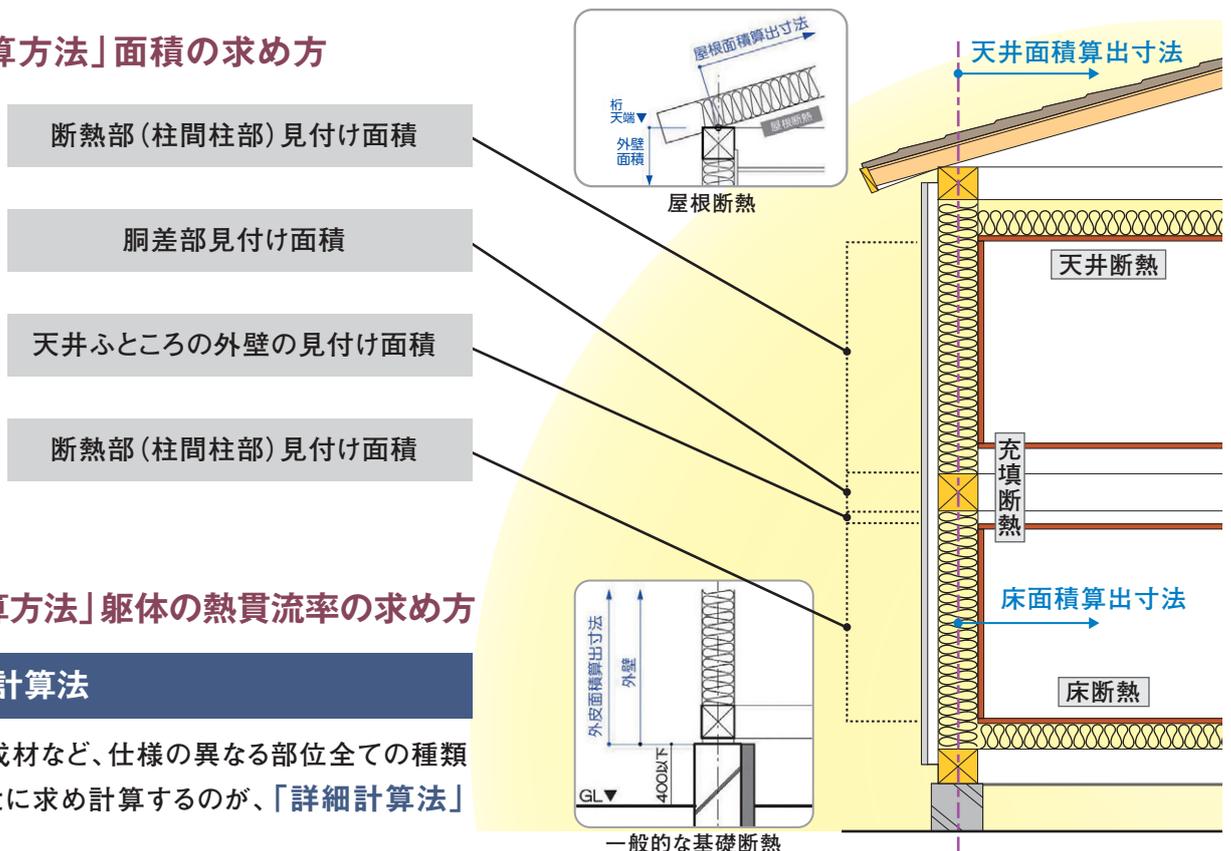
（建築物エネルギー消費性能基準等を定める省令における算出方法に係る事項）

「住宅計算方法」の評価フロー

外皮平均熱貫流率は、各部位の面積、熱貫流率、温度差係数などを求め計算し、また、平均日射熱取得率は、各部位の面積、日射熱取得率、方位係数などを求め計算します。



「住宅計算方法」面積の求め方



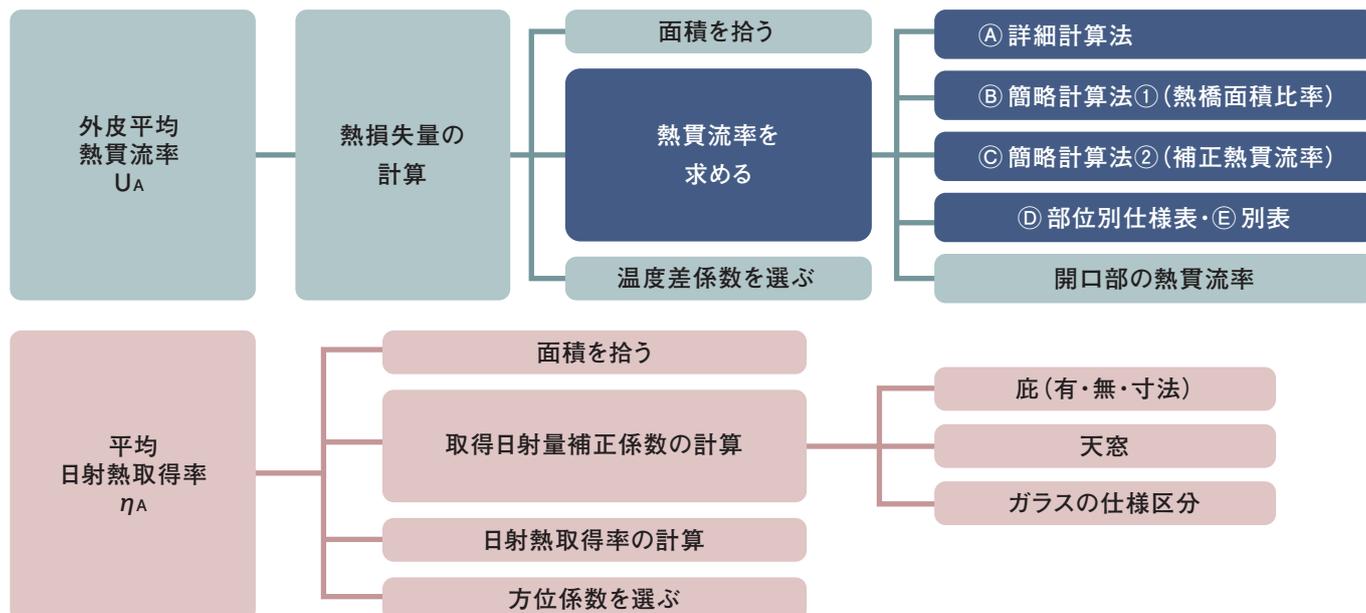
「住宅計算方法」躯体の熱貫流率の求め方

① 詳細計算法

熱橋部・構成材など、仕様の異なる部位全ての種類を、面積ごとに求め計算するのが、「詳細計算法」です。

「住宅計算方法」の評価フロー（続き）

床・壁・天井等は断熱材以外にも色々な材料で構成されていますので、各材料の熱伝導率と厚さで熱抵抗値を求め、それを合算して各部位の熱貫流率を求めます。



注意

この納まりの場合、せっこうボードを横架材まで張り上げているので、外壁の熱貫流率の計算にせっこうボードを算入出来ます。

② 簡略計算法① (熱橋面積比率)

あらかじめ熱橋の構成比を工法ごとに定めて熱貫流率の計算をするのが「簡略計算法①」です。

③ 簡略計算法② (補正熱貫流率)

全て補正值で調整して熱貫流率を求めるのが「簡略計算法②」です。

④ 部位別仕様書

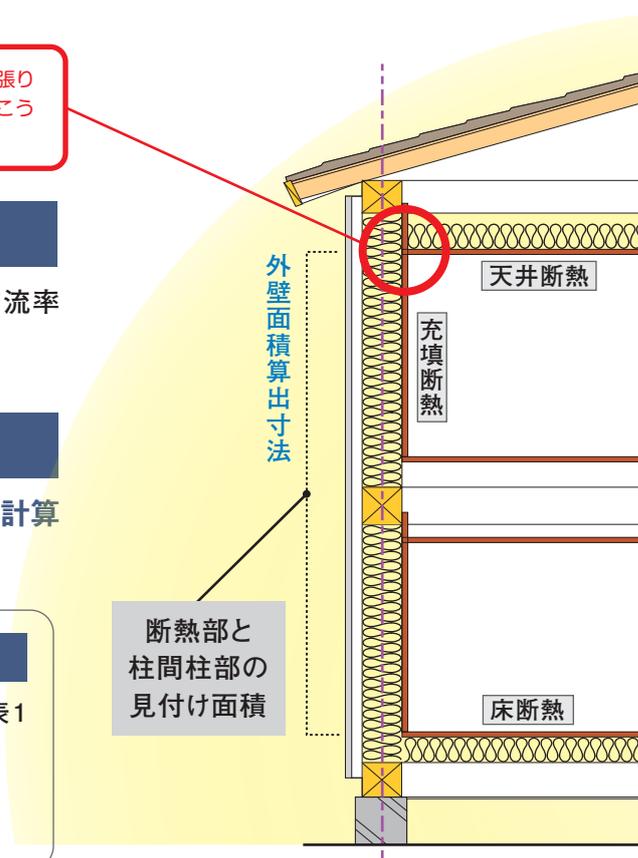
一般社団法人 住宅性能評価・表示協会にあらかじめ登録された納まりの熱貫流率。

⑤ 別表

設計施工指針の別表1の納まりの熱貫流率。

断熱部と柱間柱部の見付け面積

外壁面積算出寸法



「住宅計算方法」の具体的な内容と算出方法

(建築物エネルギー消費性能基準等を定める省令における算出方法に係る事項)

住宅計算方法

躯体の熱貫流率の求め方

① 詳細計算法

詳細計算方法は、当該住宅の断熱部と熱橋部など断面構成が異なる部分ごとに熱貫流率と面積を求め、それらを面積加重平均により平均熱貫流率として求める方法。

$$\text{部位の熱貫流率 } U \left[\text{W}/(\text{m}^2 \cdot \text{K}) \right] = \frac{(\text{熱橋部 } U \times \text{熱橋部面積 } A) + (\text{断熱部 } U \times \text{断熱部面積 } A)}{\text{面積 } A \text{ の合計}}$$

② 簡略計算法②

熱貫流率(U)は、当該部位の一般部(断熱部)の熱抵抗(R)を用いて下式により求めることができる。なお、これにより求めた熱貫流率は、断熱仕様が同じ場合に限り、胴差部、天井ふところの外壁、土台部も同じ値を用いてもよい。

$$\text{部位の熱貫流率 } U \left[\text{W}/(\text{m}^2 \cdot \text{K}) \right] = \frac{1}{\text{断熱部の熱抵抗の合計 } \Sigma R \left[\text{m}^2 \cdot \text{K}/\text{W} \right]} + \text{補正熱貫流率 } U_r$$

● 木造部位の断熱工法などに応じた補正熱貫流率(U_r)

部位	断熱工法等	補正熱貫流率U _r	
		軸組構法等	枠組工法等
床	—	0.13	0.08
外壁	充填断熱、充填断熱+外張断熱	0.09	0.13
	外張断熱	0.04	
天井	充填断熱	0	
	桁間断熱	0.05	
屋根	充填断熱、充填断熱+外張断熱	0.11	
	外張断熱	0.02	

③ 部位別仕様書

一般社団法人 住宅性能評価・表示協会にあらかじめ登録し「部位別仕様書」を使用する方法。簡略計算法①に近い納まりですので、「別表」より優位です。



<https://www.2hyoukakyoukai.or.jp/gaiheikaisan/calc/listing/shiyoukensaku/>

④ 別表

設計施工指針の「別表」に掲載された納まりの場合はその値を使用することができます。一般的な納まりのみで、安全側の数値になっていますので、あまりおすすめしません。

木造住宅 充填断熱工法の使用例			
部位	熱貫流率[W/m ² ·K]	仕様の詳細	断面構成図
外壁	0.53	軸組の間にRが2.2以上の断熱材(厚さ85ミリメートル以上)を充填した断熱構造とする場合	

※P.87～88に木造住宅の全部位の仕様を掲載しています。

② 簡略計算法①

簡略計算法①は、部位別、工法別に定められた断熱部と熱橋部の面積比率を用いて熱貫流率を求める方法。外壁では、断熱仕様が同じ場合、胴差部、天井ふところの外壁、土台部も同じ値を用いてもよい。

$$\text{部位の熱貫流率 } U \text{ [W/(m}^2\cdot\text{K)]} = (\text{熱橋部 } U \times \text{熱橋部面積比率 } a) + (\text{断熱部 } U \times \text{断熱部面積比率 } a)$$

● 木造軸組工法の各部位の面積比率a

部位	工法の種類等		面積比率a				
			断熱部	断熱部+熱橋部		熱橋部	
床	床梁工法	根太間に断熱する場合	0.80			0.20	
		根太間に断熱する場合	0.80			0.20	
	束立大引工法	大引間に断熱する場合	0.85			0.15	
		根太間断熱+大引間断熱の場合	根太間断熱材+大引間断熱材		根太間断熱材+大引材等	根太材+大引間断熱材	根太材+大引材等
			0.72	0.12	0.13	0.03	
剛床工法		0.85			0.15		
外壁	床梁土台同面工法	根太間に断熱する場合	0.70			0.30	
		柱・間柱間に断熱する場合	0.83			0.17	
	柱・間柱間断熱+付加断熱		充填断熱材+付加断熱材	充填断熱材+付加断熱層内熱橋部	構造部材等 ^{※1} +付加断熱材	構造部材等 ^{※1} +付加断熱層内熱橋部	
		横下地の場合	0.75	0.08	0.12	0.05	
		縦下地の場合	0.79	0.04	0.04	0.13	
天井	桁・梁間に断熱する場合		0.87			0.13	
	天井に断熱材を敷込む又は吹込む場合		1			0	
	たる木間に断熱する場合		0.86			0.14	
屋根	たる木間断熱+付加断熱 横下地の場合		たる木間断熱材+付加断熱材	たる木間断熱材+付加断熱層内熱橋部(下地たる木)	たる木+付加断熱材	たる木+付加断熱層内熱橋部(下地たる木)	
		0.79	0.08	0.12	0.01		

※1 構造部材等とは、柱、間柱、筋かい等のことをいいます。

● 枠組壁工法の各部位の面積比率a

部位	工法の種類等		面積比率a				
			断熱部	断熱部+熱橋部			熱橋部
床		根太間に断熱する場合	0.87				0.13
		たて枠間に断熱する場合	0.77				0.23
外壁	たて枠間断熱+付加断熱		充填断熱材+付加断熱材	充填断熱材+付加断熱層内熱橋部	構造部材等 ^{※2} +付加断熱材	まぐさ+付加断熱材	構造部材等 ^{※2} +付加断熱層内熱橋部+まぐさ+付加断熱材熱橋部
		横下地の場合	0.69	0.08	0.14	0.02	0.06
		縦下地の場合	0.76	0.01	—	0.02	0.20
屋根	たる木間に断熱する場合		0.86				0.14
		たる木間断熱+付加断熱 横下地の場合		たる木間断熱材+付加断熱材	たる木間断熱材+付加断熱層内熱橋部(下地たる木)	たる木+付加断熱材	たる木+付加断熱層内熱橋部(下地たる木)
			0.79	0.08	0.12	0.01	

※2 構造部材等とは、たて枠等のことをいいます。

● 表面熱抵抗値(戸建て)

部位	室内側表面 [mK/W]	外気側表面 [mK/W]	
		外気の場合	外気以外の場合
屋根	0.09	0.04	0.09(通気層)
天井	0.09		0.09(小屋裏)
外壁	0.11	0.04	0.11(通気層)
床	0.15	0.04	0.15(床下)

● 密閉空気層の熱抵抗

空気層の種類	空気層の厚さ [cm]	空気層の熱抵抗値 [mK/W]
工場生産で気密なもの	2未満	0.09×da
	2以上	0.18
上記以外	1未満	0.09×da
	1以上	0.09

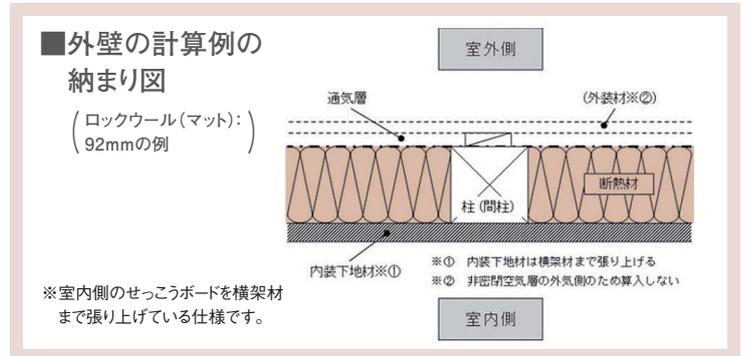
「住宅計算方法」の具体的な内容と算出方法

(建築物エネルギー消費性能基準等を定める省令における算出方法に係る事項)

躯体の熱貫流率の求め方

／外壁の計算例

※室内側のせっこうボードを横架材まで張り上げている仕様です。



⑧ 簡略計算法①

材料	厚さ(mm)	λ [W/mK]	断面1	断面2
			熱橋比率 0.83	熱橋比率 0.17
R_0 (外気側熱抵抗 通気層)			0.110	0.110
ロックウール(マット)	92.0	0.038	2.421	—
木材	92.0	0.120	—	0.767
せっこうボード	12.5	0.22	0.057	0.057
R_i (室内側の表面抵抗)			0.110	0.110
ΣR_t [mK/W]			2.698	1.044
U [W/(mK)]			0.371	0.958
平均U値 [W/(mK)]			0.47	

*木造軸組・充填断熱

⑨ 簡略計算法②

材料	厚さ(mm)	λ (W/mK)	R (mK/W)
ロックウール(マット)	92.0	0.038	2.421
せっこうボード	12.5	0.22	0.057
R_t (R _g) [mK/W]			2.478
U [W/(mK)]			0.404
補正值U _r			0.09
部位のU値 [W/(mK)]			0.49

*軸組・充填断熱

⑩ 部位別仕様書

外気側熱抵抗	適用	材料	製品番号等	JIS番号等(準拠規格)	厚さ(m)	λ (W/mK)	一般部	熱橋部
							0.83	0.17
							R (mK/W)	
							室内側表面熱伝達抵抗 R (mK/W) 0.11	
省エネ基準解説書	せっこうボード				0.0125	0.22	0.05682	0.05682
その他	ロックウール断熱材 密度30kg/m ³ 以上	アムマット、アムマ ットプレミアム		TC 06 08 077 JIS A 9521	0.092	0.038	2.42105	-
省エネ基準解説書	木質系・天然木材				0.092	0.12	-	0.76667
							外気側表面熱伝達抵抗 R (mK/W) 0.11(外気以外の場合)	
							2.69787	1.04349
							0.37066	0.95832
							平均熱貫流率 U _{1/Σ} = (Σ a · U _{ij} W) ⁻¹ 0.47056	
備考	・内装下地材は、せっこうボード 厚み 12.5mm以上 15mm以下とする。 【文書番号：JFE-OS-000525】							
納まり図								

<https://www.2hyoukakyukai.or.jp/gaihihiksan/calc/listing/shiyoukensaku/>

⑪ 別表

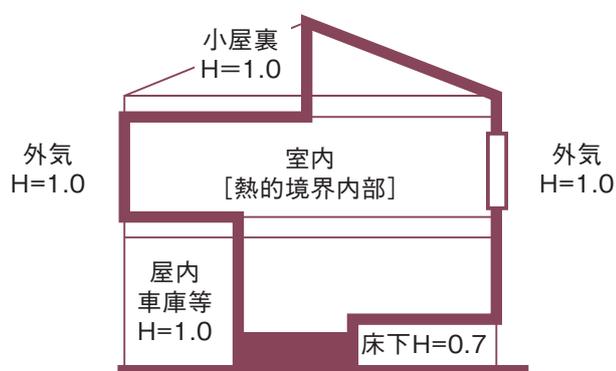
木造住宅 充填断熱工法の使用例			
部位	熱貫流率[W/m ² ·K]	仕様の詳細	断面構成図
外壁	0.53	軸組の間にRが2.2以上の断熱材(厚さ85ミリメートル以上)を充填した断熱構造とする場合	

※別表には「せっこうボード」有りの仕様がありませんので、安全側の仕様で計算します。

躯体の熱貫流率以下の項目

- 基礎の熱貫流率 ※計算ソフトの補助ツールの活用をおすすめします。
- 開口部の熱貫流率 ※計算ソフトの活用をおすすめします。
- 温度差係数

部位の隣接する空間との温度差を想定して、貫流熱損失を補正する係数。外気または外気に通じる空間は「1.0」だが外気に通じる床下などは「0.7」に軽減される。共同住宅の中間住戸などは更に低い値になる。



H:温度差係数

(出典:JSBC 住宅の省エネルギー基準の建築主の判断基準と設計・施工指針の解説テキスト1)

外皮平均熱貫流率・平均日射熱取得率の計算ソフト

外皮平均熱貫流率(U_A)や冷房期の平均日射熱取得率(η_{AC})は、計算ソフトが各団体からWebで公開されています。一次エネルギー消費量の計算に使用する、外皮熱損失量や冷房期・暖房期の日射熱取得量も同時に計算出来ます。

外皮計算支援プログラム及び補助ツール

- 一般社団法人 日本サステナブル建築協会 (JSBC)
<http://lowenergy.jsbc.or.jp/top/house/program/envelope.html>
- 住宅省エネルギー 技術講習会
(一般社団法人 木を活かす建築推進協議会内)
<http://www.shoene.org/>
- 一般社団法人 住宅性能評価・表示協会
<http://www.hyoukakyukai.or.jp/teitanso/gaihi.html>

● 平均日射熱取得率(η_A)

日射熱取得量→平均日射熱取得率に関しては、各団体の計算ソフト(右上等)の活用をおすすめします。

開口部の寸法・仕様、庇の有り無し・その位置、方位等を入力すれば計算結果が出てきます。

■ 日射熱取得率の拾い出し

壁・天井(屋根)・ドアの日射熱取得率は熱貫流率に0.034を掛けます。床は対象外です。

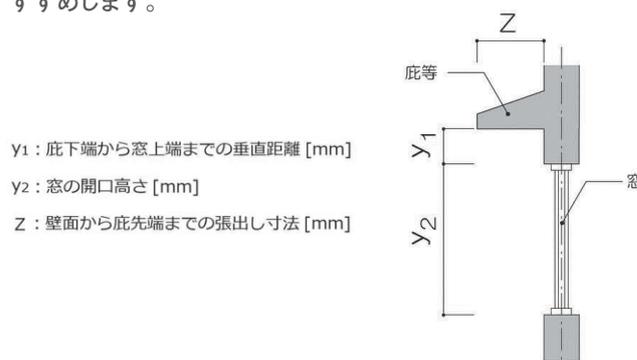
窓は、設計施工指針の別表に定められた値を使用します。開口部のフレーム(枠)素材とガラスの組み合わせで決まります。ガラスは日射取得型か遮熱型で値が異なります。付属部材は紙障子・外付けブラインドのみ。内付けブラインドは不可です。

■ 方位係数

地域区分及び方位別に決められています。冷房期と暖房期により異なります。天窗は方位・勾配にかかわらず「1」です。

■ 窓の補正係数

窓は庇の有無にかかわらず、日射熱取得率を補正します。冷房期と暖房期の補正係数があります。庇が有る場合、定数・簡略法・詳細法の3種類。庇が無い場合、定数と地域区分と方位、及びガラスの種別に応じた係数の2種類。天窗も地域区分とガラス種別に応じた係数。と、非常に複雑な計算方式になりますので、各種団体の外皮計算支援プログラムをおすすめします。



Y1: 庇下端から窓上端までの垂直距離 [mm]

Y2: 窓の開口高さ [mm]

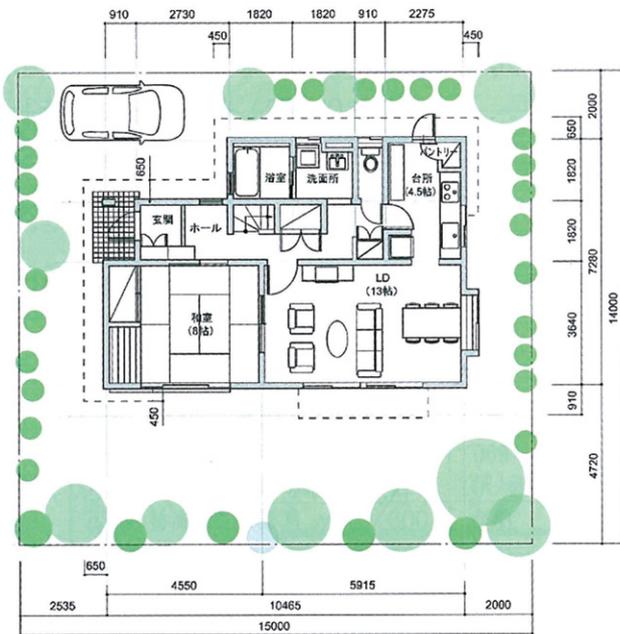
Z: 壁面から庇先端までの張出し寸法 [mm]

「住宅計算方法」の具体的な内容と算出方法

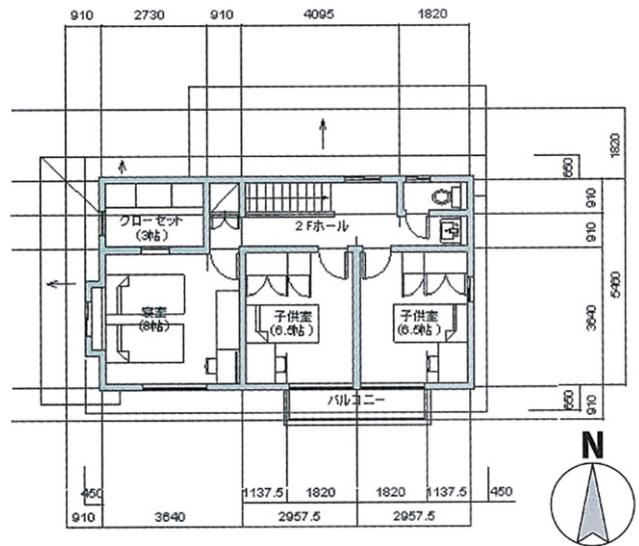
(建築物エネルギー消費基準等を定める省令における算出方法に係る事項)

建築物省エネ法「住宅計算方法」の計算例

「建築物省エネ法」の計算方法で「平成25年省エネルギー基準」の解説書のモデルプランで計算してみました。このプランは開口部比率が「0.11」ですので「住宅仕様基準」では熱貫流率が4.07[W/(m²・K)]の開口部が必要ですが、「計算方法」では4.65[W/(m²・K)]でも合格します。しかし、U_A値が0.86で基準値ギリギリですので、設計者の立場としては予算が許されるのであればワンランク上の開口部をおすすめします。



■1階平面図



■2階平面図

(出典:一般社団法人 日本サステナブル建築協会(JSBC) 住宅の改正省エネルギー基準の建築主の判断基準と設計・施工指針の解説テキスト1)

モデルプランの性能基準(計算ルート)によるU_A値(外皮平均熱貫流率)計算の例

(建築地:岡山県)

部位	面積A [m ²]	土間周長 [m]	温度差係数H [-]	断熱材		部位の熱貫流率 [W/(m ² K)]	貫流熱損失 [W/K]	部位の熱貫流率 の出典	
				種類	厚さ[mm]				
天井	67.92	—	1.0	RWMA	155	0.232	15.76	JSBC計算書	
外壁	139.50	—	1.0	RWMA	92	0.456	63.61	部位別仕様書	
開口部	ドア	3.51	—	—	—	4.65	16.32		
	窓	28.69	—	—	—	4.65	133.41		
床	床下	62.10	—	0.7	RWHA	80	0.452	19.65	JSBC計算書
基礎	5.80	—	—	—	—	—	—		
玄関	外気側	—	3.19	1.0	—	無断熱	1.80	5.73	別表1
	床下側	—	3.19	0.7	—	無断熱	1.80	4.01	別表1
浴室	外気側	—	3.64	1.0	XPS3bA	50	0.53	1.93	別表1
	床下側	—	3.64	0.7	XPS3bA	15	0.76	1.94	別表1
外皮総面積 ΣA		307.51					外皮 熱損失量 q	262.36 (四捨五入) 262.4	
						U _A 値 q/ΣA		(切上げ↑) 0.86	

【部位】天井

【工法の種類】天井に断熱材を敷込む

分類	材料	厚さ [mm]	熱伝導率λ [W/(m·K)]	面積比率→		断熱部(一般部)	
				熱抵抗R [m ² ·K/W]	熱抵抗R [m ² ·K/W]		
外気側の表面熱抵抗	Ro(小屋裏:0.09)			○		0.09	
ロックウール断熱材	住宅用ロックウール(マット)MA	155.0	0.038	○		4.079	
非木質系壁材・下地材	せっこうボード	9.5	0.220	○		0.043	
室内側の表面熱抵抗	Ri			○		0.09	
断面の厚さ[mm]						164.5	
熱抵抗の合計ΣR[m ² ·K/W]						4.302	
各断面の熱貫流率U[W/(m ² ·K)]						0.232	
熱貫流率U[W/(m ² ·K)]						0.2324	

※(一社)日本サステナブル建築協会ツールに入力

【部位】外壁

部位別仕様表(木造軸組工法)

適用	材料	製品番号等	JIS番号等(準拠規格)	長さ[mm]	λ[W/mK]	室内側表面熱伝達抵抗 R(m ² K/W)→	
						一般部	熱橋部
省エネ基準解説書	せっこうボード-GB-R、 GB-D、GB-L、GB-NC			0.0125	0.22	0.05682	0.05682
その他	ロックウール断熱材 RWMA 密度30kg/m ³ 以上	アムマットプレミアム	TC 06 08 077 JIS A 9521	0.092	0.038	2.42105	—
	[文書番号:JFE-ST-001605]JIS適合性認証書 20150622.pdf						
省エネ基準解説書	木質系-天然木材			0.092	0.12	—	0.76667
省エネ基準解説書	木質系-合板			0.009	0.16	0.05625	0.05625
外気側表面熱伝達抵抗 R(m ² K/W)						0.11(外気以外の場合)	
熱貫流抵抗 ΣR=Σ(di/λi)						2.75412	2.75412
熱貫流率 Un=1/ΣR						0.36309	0.90931
平均熱貫流率 Ui=Σ(a·Ui)W/(m ² K)						0.45595	

※(一社)住宅性能評価・表示協会に登録した「部位別仕様書」

<https://www.2hyoukakyokai.or.jp/gaihiikeisan/calc/listing/shiyoukensaku/>

【部位】床

【工法の種類】剛床工法

分類	材料	厚さ [mm]	熱伝導率λ [W/(m·K)]	面積比率→		断熱部(一般部)		熱橋部	
				熱抵抗R [m ² ·K/W]	熱抵抗R [m ² ·K/W]	熱抵抗R [m ² ·K/W]	熱抵抗R [m ² ·K/W]		
外気側の表面熱抵抗	Ro(床下:0.15)			○		0.15		○	
木質系壁材・下地材	合板	24.0	0.160	○		0.150		○	
ロックウール断熱材	住宅用ロックウール(ボード)HA	80.0	0.036	○		2.222		×	
木質系壁材・下地材	天然木材	80.0	0.120	×		0.000		○	
室内側の表面熱抵抗	Ri			○		0.15		○	
断面の厚さ[mm]						104.0		104.0	
熱抵抗の合計ΣR[m ² ·K/W]						2.672		1.117	
各断面の熱貫流率U[W/(m ² ·K)]						0.374		0.896	
熱貫流率U[W/(m ² ·K)]						0.4524			

※(一社)日本サステナブル建築協会ツールに入力

【部位】基礎

別表1

熱貫流率	仕様の詳細	断面構成図
0.53 [W/(m ² K)]	鉄筋コンクリート造の基礎の外側又は内側に Rが1.7以上の断熱材を張り付けた断熱構造の場合	
0.76 [W/(m ² K)]	鉄筋コンクリート造の基礎の外側又は内側に Rが0.5以上の断熱材を張り付けた断熱構造の場合	
1.80 [W/(m ² K)]	無断熱の鉄筋コンクリート構造の場合	

*平成25年国土交通省告示第907号 詳しくはP.87をご参照ください。

「住宅計算方法」の一次エネルギー消費量の計算実例

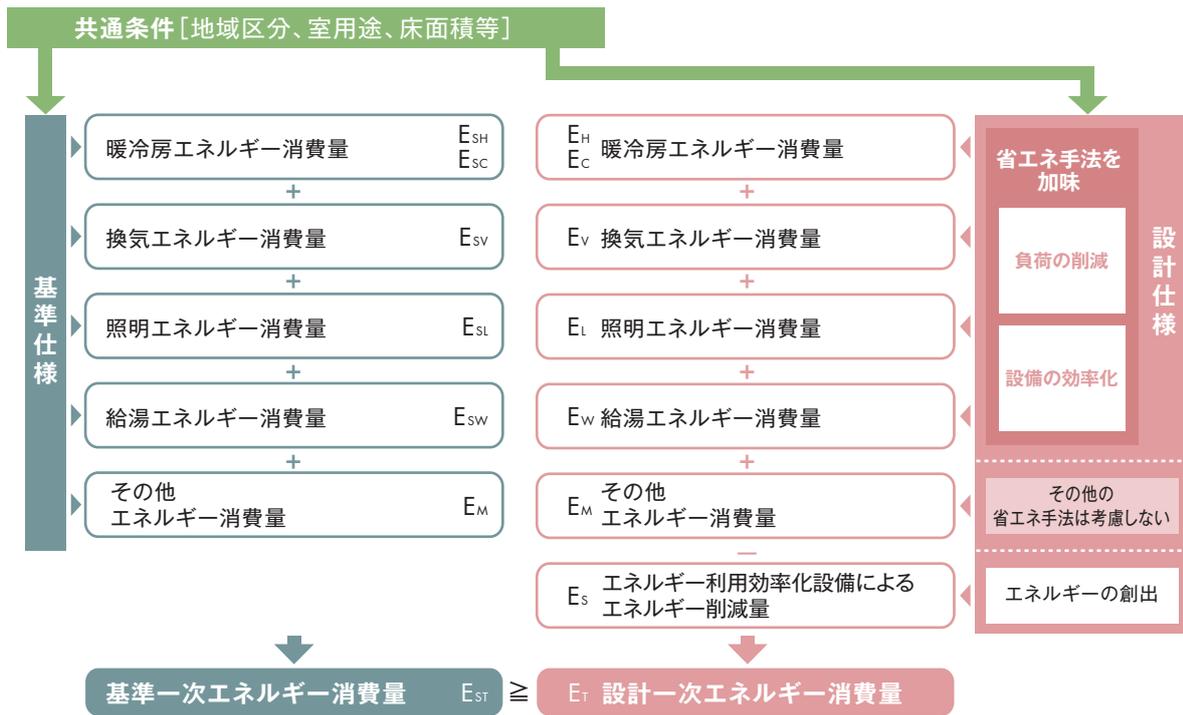
（建築物エネルギー消費基準等を定める省令における算出方法に係る事項）

一次エネルギーの消費量計算は全て「建築研究所」のプログラムで行います。

▶ http://www.kenken.go.jp/becc/index.html#Program&Manual_House

建築物省エネ法の施行に伴いプログラムがver2.1になりました。前出（P.33）の平成25年省エネルギー基準の解説本≒自立循環型住宅のモデルプランで具体的にインプットしてみましょう。

※設備機器の熱効率の入力には「住宅省エネルギー技術講習会」のホームページに掲載の「チェックリスト」が便利です。



一般的には「断熱等性能等級：4」の外皮の場合、潜熱回収型給湯機以上の効率の給湯器と、先止式2バルブ以外の水栓を使用、程度の仕様変更で「一次エネルギー消費量等級：4」に合格します。

■ 出力帳票（新築の基準に対する計算結果）

1. 住宅/住宅タイプの設計一次エネルギー消費量			
項目	単位	標準値	設計値
暖房エネルギー消費量	kWh/㎡・年	13.4	6.7
冷房エネルギー消費量	kWh/㎡・年	5.6	14.2
換気エネルギー消費量	kWh/㎡・年	4.5	4.6
給湯エネルギー消費量	kWh/㎡・年	25.1	22.0
照明エネルギー消費量	kWh/㎡・年	10.8	10.9
その他エネルギー消費量	kWh/㎡・年	21.2	21.2
合計	kWh/㎡・年	80.7	79.8

■ 設計値の計算と基準値（検討後の値）

エネルギー消費性能			
エネルギー消費量	一次エネルギー換算した値(単位:GJ)		基準値
	設計一次	基準一次	
暖房設備	6.7	13.4	
冷房設備	14.2	5.6	
換気設備	4.6	4.5	
給湯設備	22	25.1	
照明設備	10.9	10.8	
その他設備	21.2	21.2	
削減量	-	-	
合計	79.8	80.7	

基準値			
基準値	一次エネルギー換算した値(単位:GJ)		誘導基準値
	基準値	誘導基準値	
H28年4月以降	80.7	74.8	
H28年4月現存	86.6	80.7	

■ 画面構成

- 必須項目
 - ① 基本事項
 - ② 外皮性能
- 必要度が高いもの
 - ③ 暖房
 - ④ 冷房
 - ⑤ 換気
 - ⑥ 給湯
 - ⑦ 照明
- 必要に応じて
 - ⑧ 熱交換
 - ⑨ 太陽熱
 - ⑩ 太陽光
 - ⑪ コージェネ

■ 設計値の計算と基準値(初期の値)

エネルギー消費量	設計一次	基準一次
暖房設備	13.9	13.4
冷房設備	6.0	5.6
換気設備	4.6	4.5
給湯設備	27.6	25.1
照明設備	10.9	10.8
その他設備	21.2	21.2
削減量	-	-
合計	84.3	80.7

基準値	基準値	誘導基準値
H28年4月以降	80.7	74.8
H28年4月現存	86.6	80.7

- 計算ボタンを押すと設計値を計算します。
- 詳細ボタンを押すと上記の設計値と基準値の表が出てきます。

■ 帳票出力

- 各帳票の内容は以下の通りです。
- 建築物エネルギー消費性能基準
 - 建築物のエネルギー消費性能、誘導すべき基準
 - 建築主等の判断の基準
 - 建築物に係るエネルギー使用の合理化、誘導すべき基準

「住宅計算方法」の一次エネルギー消費量の計算実例

（建築物エネルギー消費基準等を定める省令における算出方法に係る事項）

① 基本事項

① 基本事項

① 基本事項

① 基本事項

① 基本事項

② 外皮性能

② 外皮性能

② 外皮性能

② 外皮性能

② 外皮性能

③ 暖房

暖房設備機器		暖房設備機器	
1	電気蓄熱暖房器	5	温水床暖房
2	電気ヒーター床暖房	6	FF暖房機
3	ファンコンベクター	7	パネルラジエーター
4	ルームエアコンディショナー付温水床暖房器	8	ルームエアコンディショナー

③ 暖房



5 換気

換気方法を選択します。

※入居後、24時間換気を止めるケースが多いようです。
DCモーターで大口径ダクトで設計をされることをおすすめください。

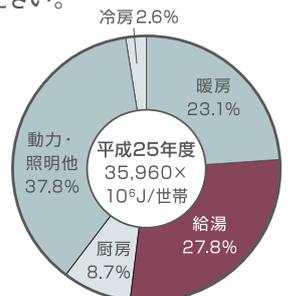
省エネルギー対策をする場合は
各種の問い合わせがあります。
②を押すとヒントが出てきます。



6 給湯

給湯方法を選択します。一次エネルギー消費量で
最大のアイテムです。必ず、検討ください。
下表の5～8がおすすめです。

熱源を選択します。
複数の熱源を使用の場合は、
下記の注意書きを参照ください。



〈出典：経済産業省 パンフレット〉

複数の給湯器を設置する場合、
コージェネレーション設備を設置する場合は、
コージェネレーション設備を選択します。
その他の場合で給湯温水暖房機を
設置する場合は、下表の上位の順から選択します。

給湯温水暖房機	
1	電気ヒーター給湯温水暖房機
2	石油従来型給湯温水暖房機
3	ガス従来型給湯温水暖房機
4	電気ヒートポンプ・ガス瞬間式併用型給湯温水暖房機 (給湯熱源:ガス、暖房熱源:ヒートポンプ・ガス併用)
5	石油潜熱回収型給湯温水暖房機
6	ガス潜熱回収型給湯温水暖房機
7	電気ヒートポンプ・ガス瞬間式併用型給湯温水暖房機 (給湯熱源:ヒートポンプ・ガス併用、暖房熱源:ガス)
8	電気ヒートポンプ・ガス瞬間式併用型給湯温水暖房機 (給湯熱源:ヒートポンプ・ガス併用、暖房熱源:ヒートポンプ・ガス併用)

浴槽・水栓や配管等の選択も必要です。



7 照明

主たる居室・その他の居室で
照明器具・方式をを入力します。
Ver.2からはLEDの項目が出来ました。

建築物省エネ法と今後の省エネルギー政策

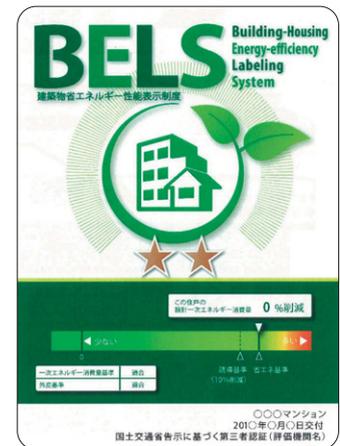
「建築物省エネ法」の2016年(平成28年)4月1日の施行内容

2016年(平成28年)4月1日の主な施行内容は以下の通りです。この中で、住宅に一番影響が大きいのは「④表示制度」が開始されることです。表示制度は、法第7条に基づく建築物の省エネ性能の表示と法第36条に基づく省エネ基準適合認定・表示制度があります。特に、前者BELSは国が定める基準以上の省エネ性能をアピールすることができ、国交省・補助事業等の要件の場合もあります。

詳しくは、ホームページをご参照ください。▶ <http://www.hyoukakyukai.or.jp/>

この他にも、HEAT20(2020年を見据えた住宅の高断熱化技術開発委員会)のように、自己認証の評価制度もあります。

詳しくは、ホームページをご参照ください。▶ <http://www.heat20.jp/index.html>



住宅版BELSの表示(例)

法律の公布後1年以内(平成28年4月1日): 誘導措置等

- ① 基本方針の公表
- ② 建築主・所有者等、建築物の販売・賃貸事業者の努力義務
- ③ 性能向上計画認定制度(容積率特例)
- ④ 表示制度
- ⑤ 登録省エネ判定機関及び登録省エネ性能評価機関の準備行為(登録申請等)

2017年4月1日の施行予定内容

2017年4月1日の主な施行予定内容は以下の通りです。この中で、一番影響が大きいのは「②適合義務」が開始されることです。2,000㎡以上の非住宅では、「建築物省エネ法」の基準に適合していなければ、建築確認がおりず着工ができません。また300㎡以上で適合しない場合は計画変更等の指示・命令が出ます。さらに2020年までに、住宅を含む全ての建築物が適合義務化となります。

		省エネ法 エネルギーの使用の合理化等に関する法律	建築物省エネ法 建築物のエネルギー消費性能の向上に関する法律
大規模建築物 (2,000㎡以上)	非住宅	届出義務 著しく不十分な場合、指示・命令等	特定建築物 適合義務 建築確認手続きに連動
	住宅	届出義務 著しく不十分な場合、指示・命令等	届出義務 基準に適合せず、必要と認める場合、指示・命令等
中規模建築物 (300㎡以上2,000㎡未満)	非住宅	届出義務 著しく不十分な場合、勧告	届出義務 基準に適合せず、必要と認める場合、指示・命令等
	住宅	届出義務 著しく不十分な場合、勧告	届出義務 基準に適合せず、必要と認める場合、指示・命令等
小規模建築物 (300㎡未満)	住宅事業建築主 (住宅トップランナー)	努力義務 必要と認める場合、勧告・命令等	努力義務 必要と認める場合、勧告・命令等

法律の公布後2年以内(平成29年4月予定): 規制措置

- ① 建築主等、設計・施工者、建材メーカーへの指導助言
- ② 適合義務・適合性判定、登録省エネ判定機関の登録等
- ③ 届出制度、所管行政庁による指示・命令等
- ④ 特殊な構造・設備の大臣認定制度、登録省エネ性能評価機関の登録等
- ⑤ 住宅トップランナー制度

※省エネ法に基づく修繕模様替・設備設置改修届出、定期報告制度の廃止

今後の省エネルギー政策

2015年(平成27年)末にパリで開催された、COP21(国連気候変動枠組条約第21回締約国会議)で採択された「2020年以降の温暖化対策の国際枠組み『パリ協定』」の具体的な方策が今、わが国では論議されています。最新情報では以下の方向のようです。

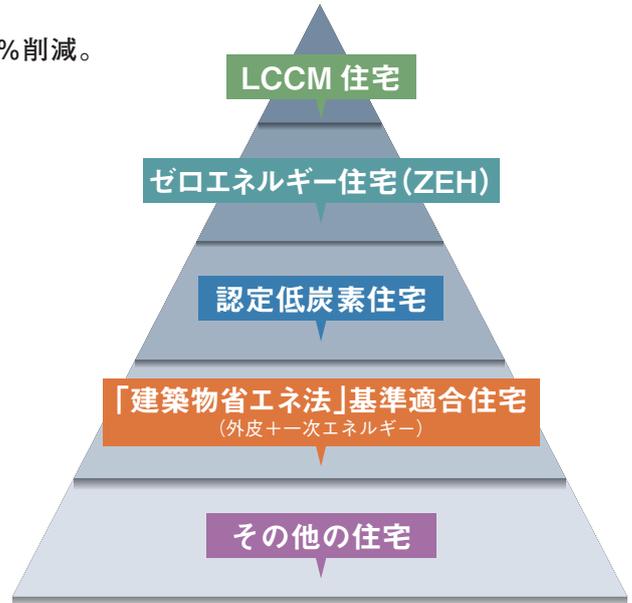
中期目標 2030年度までに26%削減→家庭部門は40%削減。

長期目標 2050年度までに80%削減

右の図は、断熱レベルを示すものですが、住宅政策でも以下が議論されています。

- ① 新築住宅の省エネ基準2020年義務化
- ② 既存住宅の断熱改修の推進、2020年までに倍増
- ③ 新築住宅の2020年ZEH標準化
- ④ 認定低炭素住宅の普及
- ⑤ BELSの普及

また2012年(平成24年)に発表され、2015年(平成27年)1月に見直された下記の社会資本整備審議会の新しい工程表でも同じような目標が示されており、着々と準備が始まっています。



設計資料

(参考) 住宅・建築物の省エネルギー対策に関する工程表 (第一次答申別添資料)

(年度)	現在	2020	2030	2050	
エネルギー基本計画等における目標	新築公共建築物等でZEB実現 標準的な新築住宅でZEH実現 新築住宅・建築物の省エネ基準適合義務化	新築建築物の平均でZEB実現 新築住宅の平均でZEH実現			
新築	省エネ基準適合義務化	大規模: 適合義務化(非住宅) 中規模: 規制的手法の強化 小規模: 審査合理化案、伝統的構法の扱い等の検討	適合義務化(住宅) 適合義務化	技術開発・コストダウン等の進展に応じた基準の強化	新築建築物の省エネ性能の確保
	供給側及び審査側の体制整備	民間機関の育成・活用による執行体制の強化 設計、施工、評価の実務を担う技術者・技能者の育成・技術水準向上 設計者、中小工務店等の負担軽減(プログラム等の使い勝手改善)			
	高度な省エネ対応の推進	高度な対応の認定・支援 ZEB、ZEH、LCCM住宅等の普及・定着に向けた支援、災害時のエネルギー自立性の向上など付随する効果に係る情報提供・周知			
	住宅トップランナーによる省エネ性能向上	基準のあり方検討	技術開発・コストダウン等の進展に応じた基準の強化		省エネ性能の高度化の促進
	評価・表示制度の推進	環境性能の評価・表示制度の充実・普及・活用促進 用途別設計一次エネルギー消費原単位平均データの公表 長期優良住宅・低炭素建築物等の整備支援・推進 断熱性能等の確保された賃貸住宅の整備支援	省エネ性能に応じた適正な資産価値評価や市場における選択行動を通じた省エネ性能の優れた建物の整備を誘導 賃貸住宅の性能向上を誘導		
既存建築物	増改築時の適切な対応の確保 定期報告等の合理化	大幅な増改築に係る規制的手法の強化 ・届出対象改修工事の範囲の合理化 ・定期報告制度の廃止	技術開発・コストダウン等の進展に応じた基準の強化 ・建物所有者・管理者の手続き負担軽減 ・行政における義務化対応等の円滑化 適切な点検・維持保全の推進	既存建築物の省エネ性能の確保	
	マネジメントの適正化	各種設定・制御の適正化等適切なマネジメントの推進に向けた情報提供等の支援の充実			
	改修による省エネ性能の向上	規制合理化による改修円滑化 段階的・計画的な改修の認定・支援 省エネ性能を引き上げる先導的な取組みへの支援	効果・効率的な省エネ改修の推進 省エネ性能の優れた既存建築物が適正に評価、選好される市場環境の整備	既存建築物の省エネ性能向上の促進	
その他	スマートウェルネス住宅の推進	住宅の断熱化に伴う健康維持・増進効果の検証結果の情報発信	健康維持・増進効果等も考慮した省エネ改修の推進	健康長寿社会・低炭素社会の実現に資するまちづくり、住まいづくり、住まい方等の推進	
	省エネ行動等の促進	エネルギー使用状況等に係る情報提供 省エネ行動に応じた経済的インセンティブの導入 環境教育・社会見学等との連携	ライフスタイル、ワークスタイルの改善によるエネルギー使用の合理化の推進		
	低炭素まちづくり等の推進	集約型都市構造への転換推進、都市内の建築物の低炭素化推進 街区間・建物間で連携した省エネ対応の推進			

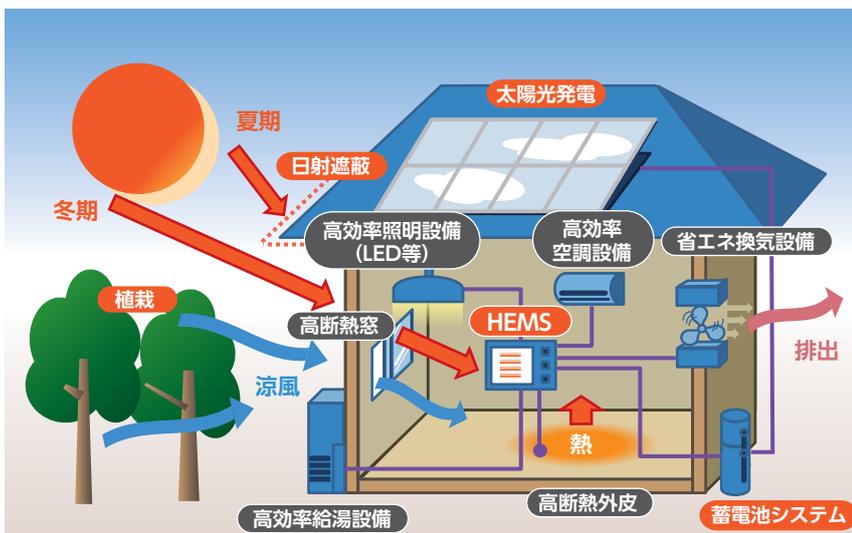
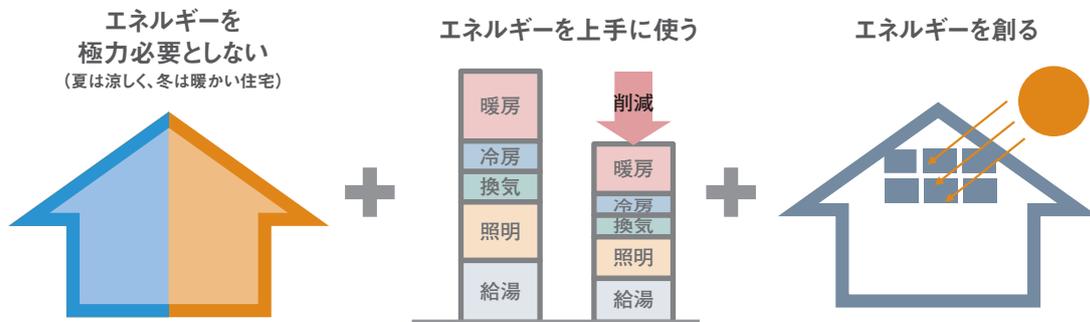
〈出典:国土交通省・他「社会資本整備審議会」 <http://www.mlit.go.jp/common/001119867.pdf>

今後の省エネルギー政策(ZEH)

ゼロエネルギー住宅(ZEH)

今後の住宅の省エネルギー政策は、徐々に義務化からZEH(ゼロエネルギー住宅)化に移ってきています。2015年経済産業省を中心として、「ZEHロードマップとりまとめ」が発表されました。その中で、ZEHの定義も下記のように、定められました。

ZEHとは、「外皮の断熱性能等を大幅に向上させるとともに、高効率な設備システムの導入により、室内環境の質を維持しつつ大幅な省エネルギーを実現した上で、再生可能エネルギーを導入することにより、年間の一次エネルギー消費量の収支がゼロとすることを目指した住宅」としました。そして、2020年には一般的な住宅で、「ZEH住宅」になることを目指して、P.42の「*Nearly ZEH*」を新たに定義し、段階的なZEHの普及に動きだしました。



〈出典:平成26年度補正 住宅・ビルの革新的省エネルギー技術導入促進事業費補助金(ネット・ゼロ・エネルギー・ハウス支援事業)〉

現在、国土交通省と経済産業省が両翼から政策を展開してきており、経済産業所のネット・ゼロ・エネルギー・ハウス支援事業では、「外皮性能の基準値」が明示されています。国土交通省の地域型住宅グリーン化事業では「外皮性能の基準値」はありませんが、最終的な評価そのものは、同様です。

外皮平均熱貫流率 (U_A値) の基準

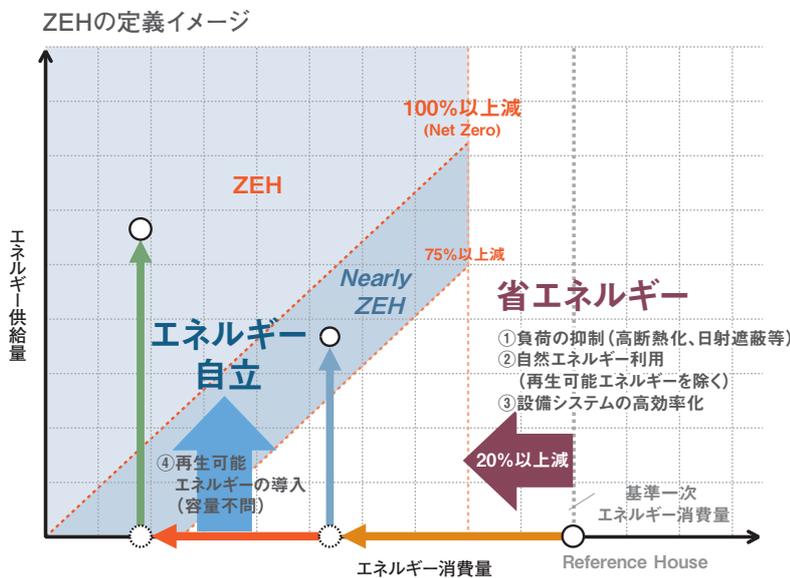
地域区分	1地域 (旭川等)	2地域 (札幌等)	3地域 (盛岡等)	4地域 (仙台等)	5地域 (つくば等)	6地域 (東京等)	7地域 (鹿児島等)	8地域 (那覇等)
ZEH基準	0.4	0.4	0.5	0.6	0.6	0.6	0.6	—
省エネ基準	0.46	0.46	0.56	0.75	0.87	0.87	0.87	—

■ Nearly ZEH(ニアリー・ネット・ゼロ・エネルギー・ハウス)の定義と評価方法

ZEHの普及に向けて、ZEHを見据えた先進住宅として、外皮の高断熱化及び高効率な省エネルギー設備を備え、再生可能エネルギーにより年間の一次エネルギー消費量をゼロに近づけた住宅として、新たに設定しました。

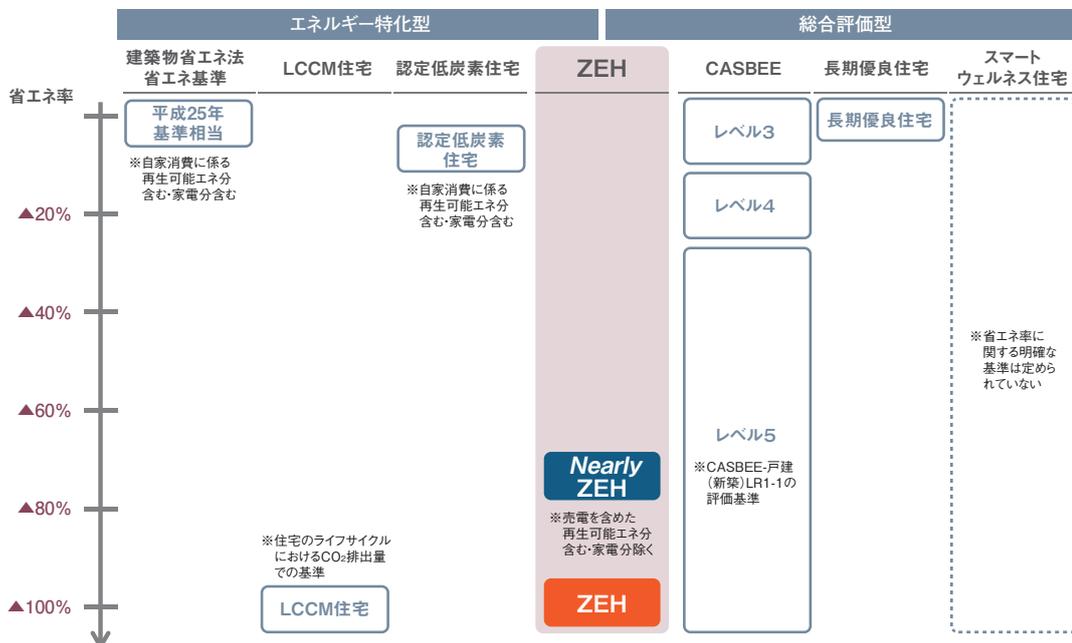
④を除き、ZEHと同じ要件です。

- ① 強化外皮基準
- ② 再生可能エネルギーを除き、基準一次エネルギー消費量から 20%以上の一次エネルギー消費量削減
- ③ 再生可能エネルギーを導入(容量不問)
- ④ 再生可能エネルギーを加えて、基準一次エネルギー消費量から **75%以上 100%未満**の一次エネルギー消費量削減



設計資料

■ ZEHと他の指標との比較



〈出典:経済産業省 ZEHロードマップ〉 http://www.enecho.meti.go.jp/category/saving_and_new/saving/zeh_report/

今後の省エネルギー政策(ZEH計算例)

前出(P.33)の平成25年省エネルギー基準の解説本≒自立循環型住宅のモデルプランで具体的なインプットを試してみましょう。外皮は天井に155mm、外壁に105mmのアムマットを使用しました。

■ 外皮平均熱貫流率(UA値)の算出

(建築地:岡山県)

部位	面積A [㎡]	土間周長 [m]	温度差係数H [-]	断熱材		部位の熱貫流率 [W/(㎡K)]	貫流熱損失 [W/K]	部位の熱貫流率の出典
				種類	厚さ[mm]			
天井	67.92	—	1.0	RWMA	155	0.232	15.76	JSBC計算書
外壁	139.50	—	1.0	RWMA	105	0.409	57.06	JSBC計算書
開口部	ドア	3.51	—	—	—	2.33	8.18	
	窓	28.69	—	1.0	—	2.33	66.85	
床	62.10	—	0.7	XPS3bA	80	0.391	17.00	JSBC計算書
基礎	5.80	—	—	—	—	—	—	
玄関	外気側	—	3.19	1.0	XPS3bA	50	0.53	別表1
	床下側	—	3.19	0.7	XPS3bA	15	0.76	別表1
浴室	外気側	—	3.64	1.0	XPS3bA	50	0.53	別表1
	床下側	—	3.64	0.7	XPS3bA	15	0.76	別表1
外皮総面積 ΣA		307.51				外皮熱損失量 q	172.08 (四捨五入) 172.1	
						UA値 q/ΣA	(切上げ↑) 0.56	

■ 一次エネルギー消費量の算出 (平成25年省エネルギー基準の出力例)

主な設備仕様

- [ルームエアコン] (い)主たる居室・その他の居室
- [換気] 第三種、DCモーター、径の太いダクト、0.5回/h
- [白熱灯] 使用無、非居室:人感センサー使用
- [給湯機] 電気ヒートポンプ給湯機(JIS効率:3.0) ふろ給湯(追焚あり) 高断熱浴槽
- [配管] ヘッダー方式(全て13A以下) 水栓:2バルブ以外、手元止水
- [太陽光発電] 1面パネル、4kW 種類:結晶シリコン系 設置方法:屋根置き形 パネル傾斜:30度 パネル方位:真南から東および西へ15度未満

省エネルギー性能等の詳細	基準一次エネルギー消費量		設計一次エネルギー		MJ/年
	省エネ基準	低炭素基準	消費量	発電量	
暖房設備	15399	13859	8117	-	
冷房設備	4331	3898	4943	-	
換気設備	4542	4087	2469	-	
給湯設備	給湯機体	25091	22582	17372	-
	暖房・給湯一体型	-	-	-	-
照明設備	10763	9696	6634	-	
太陽光発電	評価値	-	-	13782	
	参考:総発電量	-	-	(43474)	
その他設備	21211	21211	21211	-	
合計	81336	75323	60747	13782	

■ 一次エネルギー消費量の評価書(国土交通省の平成27年度「地域型住宅グリーン化事業」の提出資料の例)

1. 省エネ基準一次エネルギー消費量算定方法による計算結果

タイプ名称	外皮 q:172.1W/k mC:6.49 mH:12.37			
床面積	主たる居室	その他の居室	非居室	合計
	29.81㎡	51.34㎡	38.93㎡	120.08㎡
省エネ地域区分/年間日射地域区分	6 地域 / A 4 区分			
住宅の一次エネルギー消費量(1戸当り)	基準一次エネルギー消費量		設計一次エネルギー消費量	
暖房設備一次エネルギー消費量	15,399 MJ/(戸・年)		8,117 MJ/(戸・年)	
冷房設備一次エネルギー消費量	4,331 MJ/(戸・年)		4,493 MJ/(戸・年)	
換気設備一次エネルギー消費量	4,542 MJ/(戸・年)		2,469 MJ/(戸・年)	
照明設備一次エネルギー消費量	10,763 MJ/(戸・年)		6,634 MJ/(戸・年)	
給湯設備一次エネルギー消費量	25,091 MJ/(戸・年)		17,372 MJ/(戸・年)	
合計	60,126 MJ/(戸・年) ①		39,085 MJ/(戸・年) ②	
太陽光発電等による発電量 総発電量			43,474 MJ/(戸・年) ③	

2. エネルギー削減量、エネルギー削減率の計算結果(ゼロ・エネルギーの評価)

※ピンク色の欄の数値を様式3-①の(4)に転記してください。

基準エネルギー消費量		60,126 MJ/(戸・年)	④:①
省エネ量	A(基本仕様)	21,041 MJ/(戸・年)	⑤:④-②
	B(空気集熱式太陽熱利用)	0 MJ/(戸・年)	⑥:添付資料4-1の計算結果を転記
	C(太陽光発電)	43,474 MJ/(戸・年)	⑦:③
	小計	64,515 MJ/(戸・年)	⑧:⑤+⑥+⑦
一次エネルギー消費量等の評価結果	全体としての評価結果	エネルギー消費量	⑨:⑧-⑥
		エネルギー消費削減量	⑩:⑧
		エネルギー削減率(R)	⑪:⑩÷⑧×100
	太陽光発電を除く評価結果	エネルギー消費削減量	⑫:⑤+⑥
	エネルギー削減率(Ro)	⑬:⑫÷④×100	

注1) 1. 省エネ基準一次エネルギー消費量算定方法による計算結果には、別途計算した結果を転記してください。なお、「住宅・住戸の省エネルギー性能の判定プログラム(独)建築研究所ホームページで公開」を使用した結果は、添付資料1として必ず提出してください。
注2) グレー及びピンクの欄は自動で計算されますので、入力は不要です。

■ 各部位の熱貫流率

【部位】天井

【工法の種類】天井に断熱材を敷込む

分類	材料	厚さ [mm]	熱伝導率λ [W/(m·K)]	面積比率→		断熱部(一般部)	
				熱抵抗R [m ² ·K/W]	熱抵抗R [m ² ·K/W]		
外気側の表面熱抵抗	Ro(小屋裏:0.09)			○	0.09	○	0.09
ロックウール断熱材	住宅用ロックウール(マット)MA	155.0	0.038	○	4.079	○	4.079
非木質系壁材・下地材	せっこうボード	9.5	0.220	○	0.043	○	0.043
室内側の表面熱抵抗	Ri			○	0.09	○	0.09
				断面の厚さ[mm]		164.5	
				熱抵抗の合計ΣR[m ² ·K/W]		4.302	
				各断面の熱貫流率U[W/(m ² ·K)]		0.232	
				熱貫流率U[W/(m ² ·K)]		0.2324	

※(一社)日本サステナブル建築協会ツールに入力

【部位】外壁

【工法の種類】柱・間柱間に断熱

分類	材料	厚さ [mm]	熱伝導率λ [W/(m·K)]	面積比率→		断熱部(一般部)		熱橋部	
				熱抵抗R [m ² ·K/W]	熱抵抗R [m ² ·K/W]	熱抵抗R [m ² ·K/W]	熱抵抗R [m ² ·K/W]		
外気側の表面熱抵抗	Ro(通気層:0.11)			○	0.11	○	0.11	○	0.11
非木質系壁材・下地材	せっこうボード	12.5	0.220	○	0.057	○	0.057	○	0.057
ロックウール断熱材	住宅用ロックウール(マット)MA	105.0	0.038	○	2.763	×	0.000	○	0.000
木質系壁材・下地材	天然木材	105.0	0.120	×	0.000	○	0.875	○	0.875
木質系壁材・下地材	合板	9.0	0.160	○	0.056	○	0.056	○	0.056
室内側の表面熱抵抗	Ri			○	0.11	○	0.11	○	0.11
				断面の厚さ[mm]		126.5		126.5	
				熱抵抗の合計ΣR[m ² ·K/W]		3.096		1.208	
				各断面の熱貫流率U[W/(m ² ·K)]		0.323		0.828	
				熱貫流率U[W/(m ² ·K)]		0.4088			

※(一社)日本サステナブル建築協会ツールに入力

【部位】床

【工法の種類】剛床工法

分類	材料	厚さ [mm]	熱伝導率λ [W/(m·K)]	面積比率→		断熱部(一般部)		熱橋部	
				熱抵抗R [m ² ·K/W]	熱抵抗R [m ² ·K/W]	熱抵抗R [m ² ·K/W]	熱抵抗R [m ² ·K/W]		
外気側の表面熱抵抗	Ro(床下:0.15)			○	0.15	○	0.15	○	0.15
木質系壁材・下地材	合板	24.0	0.160	○	0.150	○	0.150	○	0.150
ポリスチレンフォーム断熱材	押出法ポリスチレンフォーム保温板 A種 3種b	80.0	0.028	○	2.857	×	0.000	○	0.000
木質系壁材・下地材	天然木材	80.0	0.120	×	0.000	○	0.667	○	0.667
室内側の表面熱抵抗	Ri			○	0.15	○	0.15	○	0.15
				断面の厚さ[mm]		104.0		104.0	
				熱抵抗の合計ΣR[m ² ·K/W]		3.307		1.117	
				各断面の熱貫流率U[W/(m ² ·K)]		0.302		0.896	
				熱貫流率U[W/(m ² ·K)]		0.3913			

※(一社)日本サステナブル建築協会ツールに入力

【部位】基礎

別表1

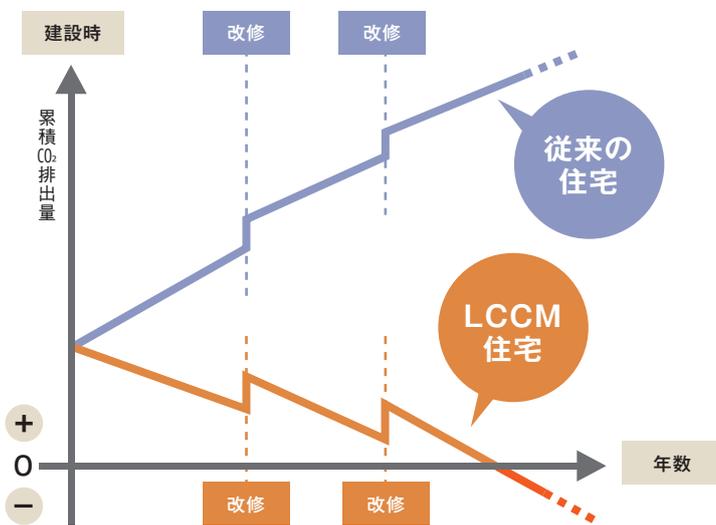
熱貫流率	仕様の詳細	断面構成図
0.53[W/(m ² ·K)]	鉄筋コンクリート造の基礎の外側又は内側にRが1.7以上の断熱材を張り付けた断熱構造の場合	
0.76[W/(m ² ·K)]	鉄筋コンクリート造の基礎の外側又は内側にRが0.5以上の断熱材を張り付けた断熱構造の場合	

今後の省エネルギー政策(LCCM・低炭素住宅)

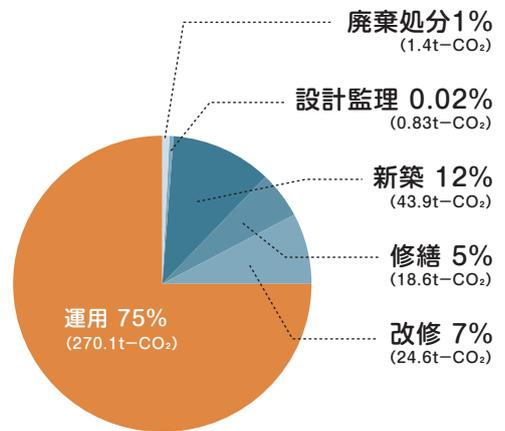
LCCM住宅

運用段階に着目したゼロエネルギー住宅(ZEH)に対し、建設段階も含めたゼロエネがLCCM(ライフ・サイクル・カーボン・マイナス)住宅です。LCCM住宅になると、建設に使用する材料の一次消費エネルギーが加算されますので、他の断熱材より生産時の一次消費エネルギーが少ない高炉スラグを原材料にしたロックウールはより優位になります。

ライフサイクルにわたるCO₂収支のイメージ

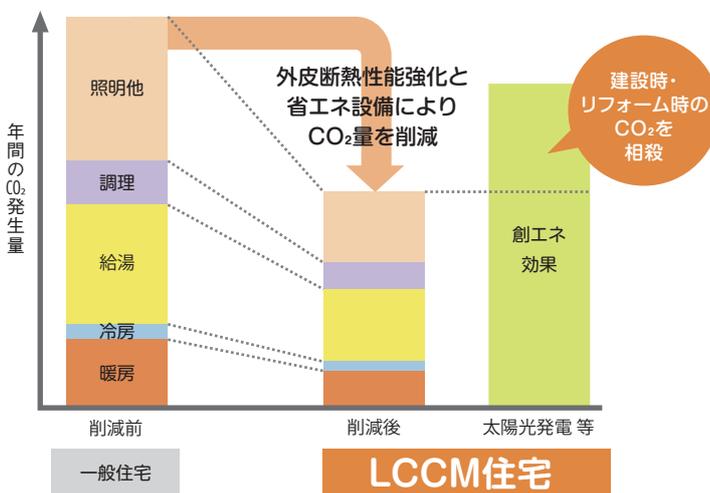


各段階ごとのLCCO₂の割合(LCAツールによる評価)

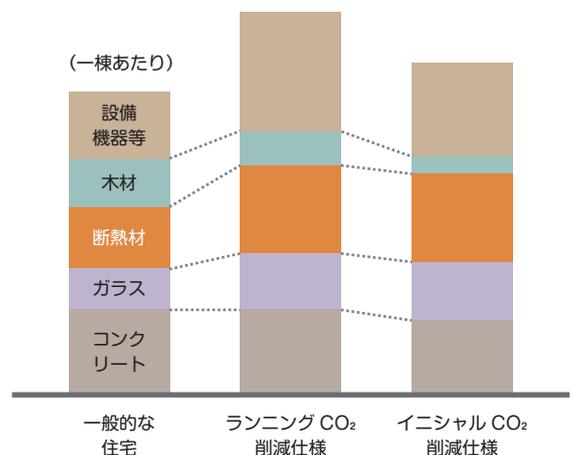


* 運用は標準的な値、運用以外はLCCM住宅による値
* 延床面積145.68㎡、供用期間60年での試算

LCCM住宅におけるLCCO₂削減のアプローチ



建物仕様によるイニシャルCO₂削減効果検討(イメージ)



(出典:環境省・LCCM住宅 構法部会エグゼクティブサマリー)



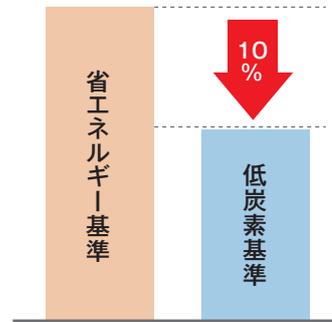
認定低炭素住宅

認定低炭素住宅は、省エネルギー基準の一次エネルギー消費量を10%以上良好化した住宅です。

一次エネルギー消費量以外に選択項目として下図のような低炭素に資する措置を2項目以上講じることも必要です。但し、認定低炭素住宅の税制優遇や容積率の緩和等のメリットを受けることができるのは市街化区域内です。

国土交通省では平成27年度(2015年度)から地域型住宅グリーン化事業で高度省エネ型(認定低炭素住宅)・優良建築物型(認定低炭素建築物等一定の良質な建築物)タイプを設け普及・推進活動に拍車がかかりました。

省エネルギー性に関する基準



*省エネルギー法の省エネ基準に比べ、一次エネルギー消費量(家電等のエネルギー消費量を除く)が▲10%以上となること



その他の低炭素化に資する措置に関する基準【下記の①~⑧項目の2つ以上に該当】

節水対策

① 節水に資する機器を設置している。

【以下のいずれかの措置を講じていること】

- ・設置する便器の半数以上に節水に資する便器を採用している。
- ・設置する水栓の半数以上に節水に資する水栓を採用している。
- ・食器洗浄機を設置している。



② 雨水、井戸水又は雑排水の利用のための設備を設置している。

エネルギー管理

③ HEMS(ホームエネルギーマネジメントシステム)

又はBEMS(ビルエネルギーマネジメントシステム)を設置している。

④ 太陽光等の再生可能エネルギーを利用した発電設備及びそれと連係した定置型の蓄電池を設置している。

ヒートアイランド対策

⑤ 一定のヒートアイランド対策を講じている。

【以下のいずれかの措置を講じていること】

- ・緑地又は水面の面積が敷地面積の10%以上
- ・日射反射率の高い舗装の面積が敷地面積の10%以上
- ・緑化を行う又は日射反射率等の高い屋根材を使用する面積が屋根面積の20%以上
- ・壁面緑化を行う面積が外壁面積の10%以上



建築物(躯体)の低炭素化

⑥ 住宅の劣化の軽減に資する措置を講じている。

⑦ 木造住宅若しくは木造建築物である

⑧ 高炉セメント又はフライアッシュセメントを構造耐力上主要な部分に使用している。

または

標準的な建築物と比べて、低炭素化に資する建築物として所管行政庁が認めるもの。

例:CASBEE

その他の省エネルギー政策(品確法・長期優良住宅)

住宅品質の確保を目指して

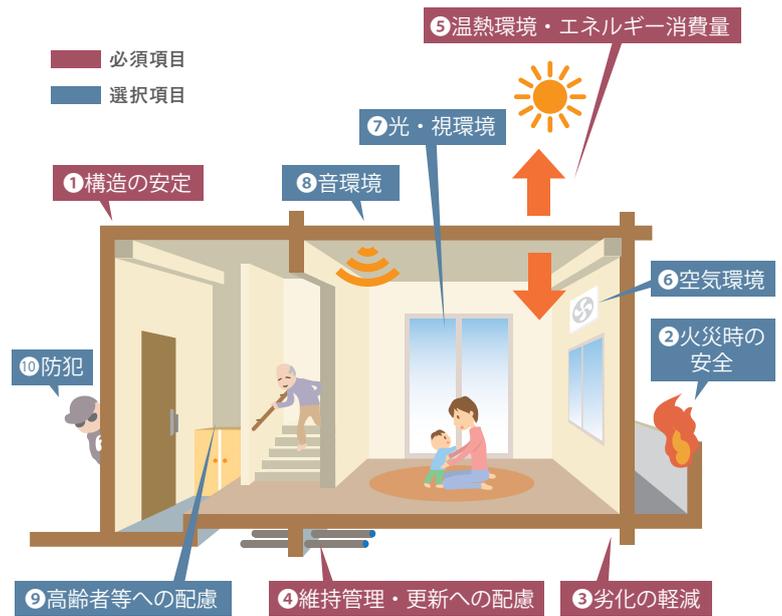
1999年(平成11年)、住宅建設・売買に係る、様々な問題を解決する法として「住宅の品質確保の促進等に関する法律(通称:品確法)」が交付されました。これを契機に諸制度の整備が開始されました。

住宅性能表示制度

住宅の基本的な性能について、2000年(平成12年)度から運用が実施された任意の評価制度です。住宅の性能が共通のルールで評価されるようになりました。設計図書の段階でのチェックを「設計住宅性能評価」、そして、設計住宅性能評価で評価を受けた設計図書に従ってしっかりとされた施工がされているか工事中に現場でチェックを受ける「建設住宅性能評価」の2段階があります。評価内容に応じて「等級」が評価され、「評価書」が発行されます。評価項目は次ページの9項目です。

⑤の温熱環境については、2015年(平成27年)4月に、等級表示が完全施行になり、断熱のみと、一次エネルギーを含んだ2種類の等級になりました。一次エネルギー消費量「等級5」は「等級4」をさらに10%削減した値です。

2016年(平成28年)4月に、⑤温熱環境・エネルギー消費量と③・⑧の改正があり、又、既存住宅に対する改正と拡大が図られました。



住宅性能表示基準/品確法(通称)における等級

	断熱等性能等級	一次エネルギー消費量等級
等級5		低炭素基準相当
等級4	建築物省エネ法・平成25年(平成11年)基準相当	建築物省エネ法・平成25年基準相当
等級3	平成4年基準相当	
等級2	昭和55年基準相当	
等級1	その他	その他

各種制度と「建築物省エネ法」の評価方法の関係

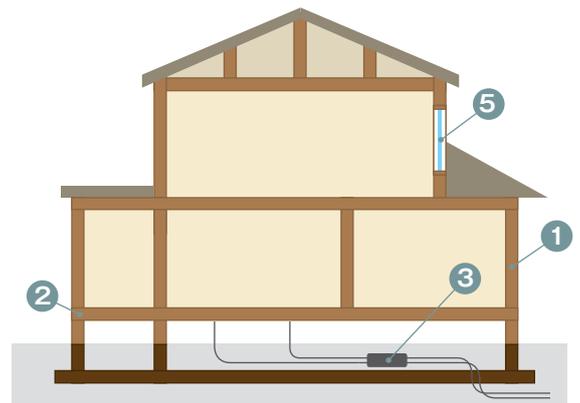
	建築物省エネ法(戸建住宅のみ)			2017年4月1日 改正予定部分
	住宅仕様基準	住宅計算法		建築事業主基準ツール (IBEC)
		外皮性能	一次エネルギー消費量	
長期優良住宅	○	○	—	—
性能表示制度	○ ※断熱等級のみ	○	○	—
認定低炭素住宅	—	○	○	—
【フラット35】S(金利Aプラン)	—	○	○	○ ※2017年3月末迄
【フラット35】S(金利Bプラン・省エネ)	○	○	—	—
住宅事業主基準	—	○	○	○ ※2017年3月末迄

長期優良住宅

住宅性能表示制度をベースに2009年(平成21年)に「長期優良住宅の普及の促進に関する法律」が施行されました。一般的に100年住宅と言われた制度です。一定の基準を満たした認定長期優良住宅は、税制面での優遇などを受けられます。長期優良住宅と認定されるためには、各性能項目の基準を満たすように住宅の建築計画及び一定の維持保全計画を策定して、所管行政庁の認定を受ける必要があります。2016年(平成28年)4月に増改築の認定制度が充実しました。

■ 長期優良住宅(新築)の認定基準 *可変性(共同住宅・長屋のみ)

- | | |
|--|-------------------------------------|
| 1.劣化対策
劣化対策 等級3+α を確保する | 5.省エネルギー性
断熱等性能 等級4 を確保する |
| 2.耐震性
耐震 等級2 を確保する | 6.基礎的なバリアフリー性能(共同住宅のみ) |
| 3.維持管理・更新の容易性
維持管理対策 等級3 を確保する | 7.維持保全計画の提出
定期的な点検や補修計画を確定 |
| 4.可変性(共同住宅のみ) | 8.住環境への配慮
地域における居住環境の維持・向上 |
| | 9.住戸面積
良好な居住水準を確保できる規模 |



【フラット35】と【フラット35】S

【フラット35】は、民間金融機関と住宅金融支援機構が提携して顧客に提供している長期固定金利住宅ローンです。特徴として以下のメリットがあげられています。

- ずっと固定金利の安心
- 機構の技術基準で、住まいづくりを応援
- 保証料0円、繰上返済手数料0円
- ご返済中も安心サポート

【フラット35】Sとは、【フラット35】をお申し込みのお客様が、省エネルギー性・耐震性などに優れた住宅を取得される場合に【フラット35】のお借入金利を一定期間引き下げる制度です。

対象となる住宅

耐久性、省エネルギー性、バリアフリー性及び耐久性・可変性のうちいずれかの性能が優れた住宅。

省エネルギー性又はバリアフリー性について一定機能を備えた既存住宅。

諸制度基準の一覧

住宅性能表示制度、長期優良住宅、フラット35Sの基準をまとめました。

住宅性能表示制度評価基準	必須	選択
①構造の安定	●	
②火災時の安全		●
③劣化の軽減	●	
④維持管理・更新への配慮	●	
⑤温熱環境・エネルギー消費量	●	
⑥空気環境		●
⑦光・視環境		●
⑧音環境		●
⑨高齢者等への配慮		●
⑩防犯		●

長期優良住宅認定基準 *可変性・基礎的なバリアフリー性能(共同住宅のみ)		
①劣化対策	④可変性	⑦維持保全計画の提出
②耐震性	⑤省エネルギー性	⑧住環境への配慮
③維持管理・更新の容易性	⑥基礎的なバリアフリー性能	⑨住戸面積

温熱環境に関しては、通常のレベルが住宅性能表示制度の断熱のみの「等級4」です。今後、補助金や税制優遇の支援政策は、一次エネルギーを含めた「等級5」以上が必須になり、「認定低炭素住宅」のように、「等級4」の10%レス＝「等級5」がベースになるでしょう。

【フラット35】S	
①耐震性	③バリアフリー性
②耐久性・可変性	④省エネルギー(戸建てのみ)

*【フラット35】Sは上記4点のうちいずれか1つ以上の基準を満たすことが条件です。

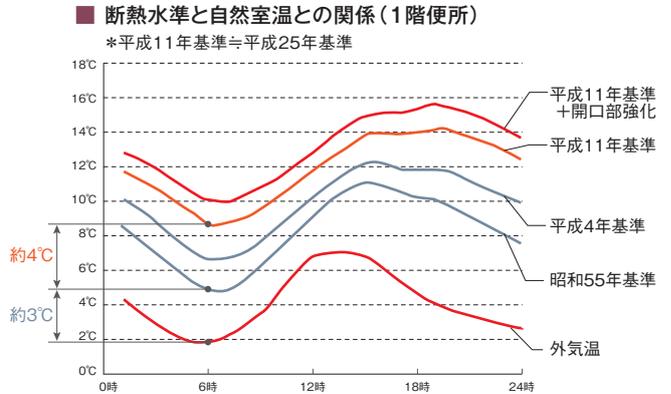
断熱の目的

断熱の目的は自然室温※の維持

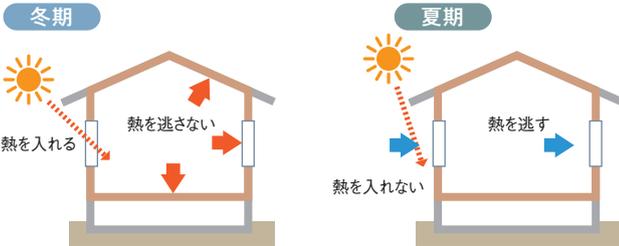
右のグラフは断熱レベルに応じた自然室温の変化を表したものです。断熱レベルを上げることで、より高い室温を維持する事が出来ます。また、自然室温の変化には断熱以外にも、以下の要因があり、これらを合わせて断熱計画をする必要があります。

- ・日射取得熱
- ・換気
- ・漏気(隙間から漏れる空気)
- ・内部発熱(家電機器・人体など)

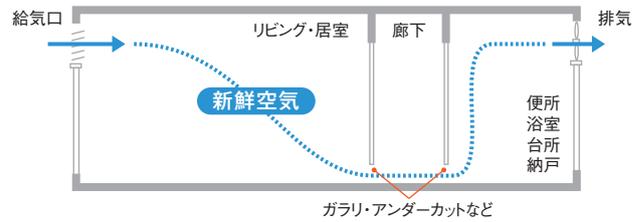
※自然室温:日射取得熱や内部発熱のみによる、暖冷房設備を使わない時の室温。



(出典:自立循環型住宅への設計ガイドライン)



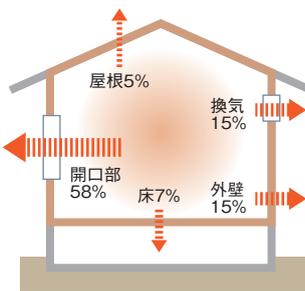
(出典:住宅省エネルギー技術者講習テキスト)



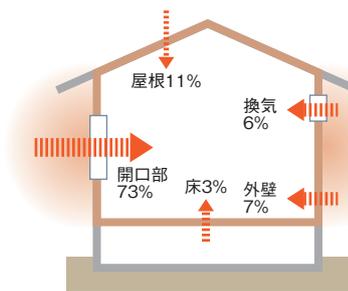
(出典:住宅省エネルギー技術者講習テキスト)

断熱境界を構成する断熱材部分(躯体)と開口部(窓サッシ+ガラス)から、熱が逃げますが、平成4年基準の家では一般的に開口部が半分です(下図)。最近は開口部も性能が向上してきました。ガラスも単板はほとんどなくなりました。窓サッシ(枠)の素材もアルミだけでなく、樹脂や木材製も登場してきました。

冬の暖房時に外に熱が逃げる割合の例

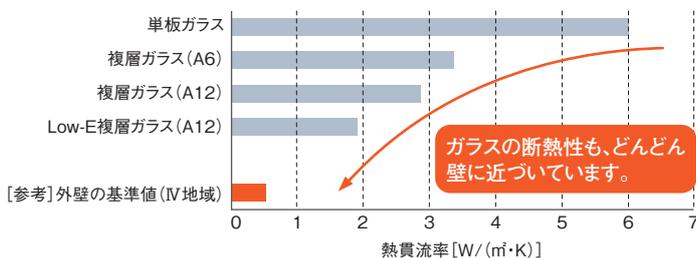


夏の冷房時に外から熱が入る割合の例

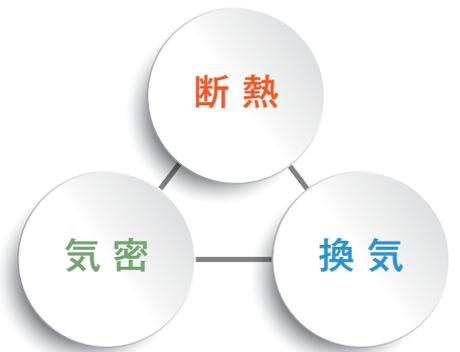


(出典:経済産業省「断熱リフォームで健康で快適な暮らしを」パンフレットより)

窓ガラスの種類別熱貫流率比較の例



(出典:住宅省エネルギー技術者講習テキスト)



断熱設計は、年間を通じて快適な暮らしを自然環境と最低限の電気的エネルギーで実現できるように、「断熱」・「気密」・「換気」をバランスよく配置する事です。

窓サッシの材料の熱伝導率比較の例

材種(窓サッシ)	λ熱伝導率[W/(m・K)]
アルミニウム合金	200.00
PVC(塩化ビニル)	0.17
天然木材	0.12

断熱の効果が高いと「体感温度」が下がります。

「体感温度」は室内温度と室内表面温度の平均値です。室温は低くないのだが、何となく寒く感じるのは、断熱レベルが低く、表面温度が外気温にひっぱられて低下している事が要因です。

「結露」は建築的には、「表面結露」と「内部結露」の二種類があります。空気には水蒸気が含まれており、温度が高いほど多くの水蒸気を含む事が出来ます。最大限に含んだ状態を「飽和状態」と言い、それを越えると「結露」が起こります。石油ストーブにヤカンを載せたりすると室内の水蒸気量が増え、外気で冷えた窓ガラスに表面結露が出来るのがこれです。一次エネルギー消費量の計算プログラムでは一般的な開放型ファンヒーターは商品選択メニューにありません。室内の酸素を消費するので本来は窓の開放が30分毎に必要ですが、それは実用的ではないので、プログラムにはありません。勿論、FF型は室外の空気を使用しますので、プログラムに掲載されています。

水分を含んだ冷気が壁体内に流れると建築躯体内部に結露が起こります。これを「壁体内結露」と言い、躯体を腐朽する原因になります。断熱層の不連続箇所や壁面貫通部などの漏気部分に多いようです。「断熱施工の基本(P.63～参照)」の気密施工が肝要です。

より良い断熱設計をするために、「自立循環型住宅」の手法が参考になります。

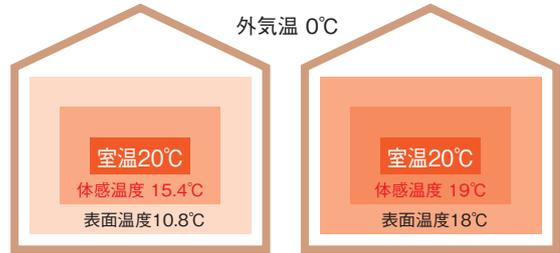
(独立行政法人)建築研究所・他が国土交通省の総合技術開発として、平成13年(2003年)に、はじめた研究です。一次エネルギー消費量の概念を始めて持ち込んだ研究で、2015年に温暖地版が改定され、「建築物省エネ法」との整合が図られました。

テキストは一般には販売されておらずに、講習会開催時に配布されます。現在も各地で講習会が開催されています。詳細はホームページを参照ください。

<http://www.jjj-design.org/index.html>

低い断熱レベルの住宅

高い断熱レベルの住宅

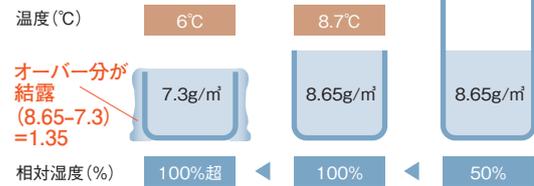


断熱材が入っていないが効果が発揮されない状態 (壁の熱貫流率 4.3W/m²K)

平成11年省エネルギー基準相当 (壁の熱貫流率 0.53W/m²K)

(出典:自立循環型住宅への設計ガイドライン)

■ 結露のメカニズム



(出典:住宅省エネルギー技術者講習テキスト)



内部結露により躯体が腐朽

(出典:住宅省エネルギー技術者講習テキスト)



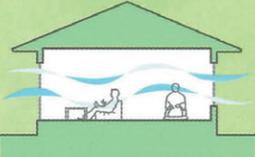
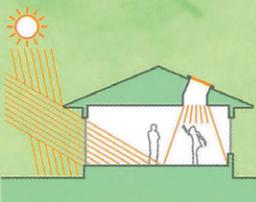
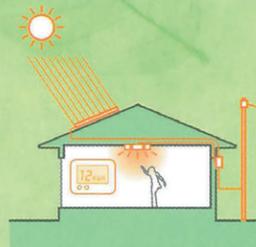
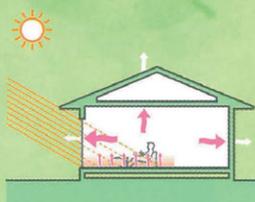
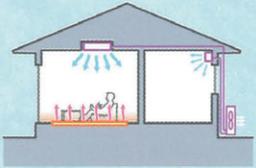
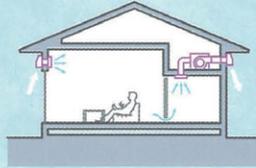
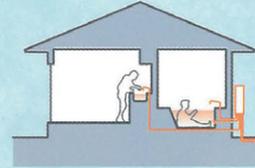
エネルギー用途	エネルギー標準値	要素技術	エネルギー消費率 (基準値を1.0とした場合)				
			レベル0	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4
暖房	24.1GJ	断熱外皮計画	1.0	0.8	0.7	0.55	0.35
		日射熱の利用	1.0	0.95	0.9	0.8	0.7
		暖冷房設備計画(暖房)	1.0	0.95	0.9		
		※エアコン標準の場合	1.0	0.95	0.9	0.85	
冷房	3.9GJ	自然風の利用	1.0	0.97	0.96	0.91	
		日射遮蔽手法	1.0	0.8	0.6		
		暖冷房設備計画(冷房)	1.0	0.95	0.9	0.85	
		※エアコン標準の場合	1.0	0.95	0.9	0.85	
換気	4.6GJ	換気設備計画 ※ダクト式(二種、三種)の場合	1.0	—	0.85	0.75	0.55/0.45
給湯	25.1GJ	太陽熱給湯	1.0	0.9	0.8	0.7	
		給湯設備計画	1.0	0.9	0.8	0.7	0.6
照明	10.9GJ	昼光利用	1.0	0.98	0.95	0.9	
		照明設備計画	1.0	0.65	0.6	0.55	
家電	17.1GJ	高効率家電機器の導入	1.0	0.8	0.6		
調理	3.9GJ	—	1.0				
合計	89.6GJ						
暖房・換気・給湯	46.6GJ*	屋根空気集熱式ソーラーシステム	1.0	0.9	0.85	0.8	0.75
全体		ユーティリティシステム	1.0	0.9	0.84	0.82	
電力		太陽光発電	削減なし	27.0GJ削減	36.0GJ削減		

*断熱水準をレベル2としたときの暖房・給湯・換気エネルギー消費量の換算値です。

(出典:パンフレット「活かしてください 自立循環型住宅」 (一財)建築環境・省エネルギー機構 (IBEC))

断熱設計の手法(自立循環型住宅の例)

自立循環型住宅の15要素技術の手法と省エネルギー効果

<p>01</p> <h3>自然風の利用・制御</h3> <p>夏期夜間や中間期に外気を取り入れ、室内を涼しく保ちます。</p>  <p>冷房エネルギー ↓ 3~9%</p> <p>①通風経路上の開口部面積の確保 ②卓越風向に応じた開口部配置 ③高窓の利用</p>	<p>02</p> <h3>昼光利用</h3> <p>昼間の明るさを室内に採り入れ、人工照明利用を減らします。</p>  <p>照明エネルギー ↓ 2~10%</p> <p>①昼光を直接採り入れ、室内の明るさを確保できる開口部を設置(採光) ②室内の奥に光を導く吹抜け・欄間・反射可能な軒裏などを設置(導光)</p>	<p>03</p> <h3>太陽光発電</h3> <p>日中に太陽光で発電を行い、消費する電力を自己生産します。</p>  <p>電力(年間一次エネルギー削減量) ↓ 27.0~36.0GJ (東京・太陽電池モジュールの容量3kW程度~4kW程度の場合)</p> <p>○南面主体に太陽電池モジュールを設置</p>	<p>04</p> <h3>日射熱の利用</h3> <p>冬期に開口部から日射熱を取得し、暖房に利用します。</p>  <p>暖房エネルギー ↓ 5~30%</p> <p>①日照のある時間帯に集熱する開口部の窓付属部材をなくす ②床・壁・天井などの材料の蓄熱容量を調整 ③開口部を大きくして南面に向け、日射取得に適したガラスを使用</p>
<p>A</p> <h3>自然エネルギー活用技術</h3>	<p>09</p> <h3>暖冷房設備計画</h3> <p>暖冷房設備機器を適切に選定、配置します。</p>  <p>暖房エネルギー ↓ 5~15(10)% (エアコン(温水暖房))</p> <p>冷房エネルギー ↓ 5~15% (エアコン)</p> <p>①高効率な機器を採用 ②エアコンの機器容量を適切に設定 ③温水暖房の放熱率や放熱面積を確保し、配管を断熱 ④冷房期に扇風機・天井扇を利用</p>	<p>10</p> <h3>換気設備計画</h3> <p>生活や計画に合う換気システムを選択し、効率を高める工夫をします。</p>  <p>換気エネルギー ↓ 5~55%</p> <p>①ダクト式換気の圧力損失低減のためのダクトの径・配置の適正化 ②高効率モーターやファンの導入 ③熱交換型換気システムの効率的運転 ④温度差利用型ハイブリッド換気</p>	<p>11</p> <h3>給湯設備計画</h3> <p>高効率な給湯機を選定し、各部の設計・工法を工夫します。</p>  <p>給湯エネルギー ↓ 10~40%</p> <p>①高効率給湯機の導入 →潜熱回収型ガス・石油給湯機、自然冷媒ヒートポンプ式電気給湯機等 ②配管の短縮化・管径の最小化や保温 ③節湯に有効な水栓や浴槽の採用</p>
<p>B</p> <h3>建物外皮の熱遮断技術</h3>			
<p>C</p> <h3>省エネルギー設備技術</h3>			

(出典:パンフレット「活かしてください 自立循環型住宅」(一財)建築環境・省エネルギー機構 (IBEC))

15種類の要素技術について、省エネルギー効果のある設計手法・配慮事項と一次エネルギー消費量の削減率(エネルギー削減率)を示します。エネルギー削減率は、立地条件や設計手法の採用のしかたにより異なるため、範囲で表しています。各エネルギー削減率は、右記の条件の住宅を対象として計算した結果に基づいています。

- 建設地域：比較的温暖な地域
(省エネルギー基準による地域区分の6地域)
- 住宅の建て方：一戸建ての住宅
- 住宅の工法：木造住宅
(伝統的工法による住宅も含む)

05 屋根空気集熱式ソーラーシステム

太陽熱で温められた暖気を暖房、給湯に利用します。

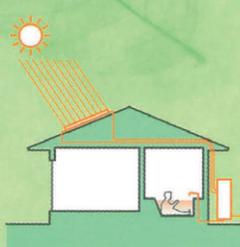


暖房・給湯・換気エネルギー計
↓ 10~25%

- ①集熱部・搬送部・蓄熱部を適正に計画
- ②取得熱(中間期・夏期)や暖房余熱(冬期)を給湯に利用
- ③24時間換気と連動する機能を付加
- ④太陽光発電を搬送動力源に利用

06 太陽熱給湯

太陽熱を利用した給湯システムを導入します。

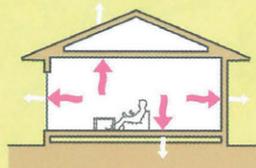


給湯エネルギー
↓ 10~30%

- ①ソーラーシステムを採用
- ②集熱部の面積を確保し、適正な方位・傾斜角で設置
- ③補助のガス・石油給湯機との適正な接続

07 断熱外皮計画

断熱化をはかり、自然室温を維持して適時適温を実現します。

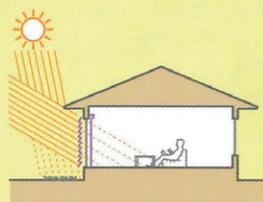


暖房エネルギー
↓ 20~65%
(居室間歇暖房の場合)
↓ 25~70%
(住戸連続暖房の場合)

- 断熱方法・断熱材の選定
- 断熱性能の検討(部位バランス型・躯体増強型・開口部増強型)
- 適切な防露措置・断熱材の施工・気流止め

08 日射遮蔽手法

夏期や中間期に室内に侵入する日射を遮り涼しく保ちます。



冷房エネルギー
↓ 20~40%
(居室間歇暖房の場合)
↓ 20%
(住戸連続暖房の場合)

- ①開口部の日射遮蔽に効果のあるガラスの選択、ブラインド・底などの設置
- ②小屋裏換気量の増加や屋根の通気措置
- ③外壁の日射反射率の向上や通気措置
- ④外部床の照り返し防止や庭木の利用

12 照明設備計画

適切な照明配置を行い、ランプ・器具を選択します。

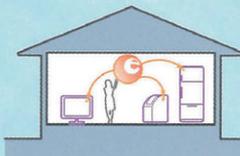


照明エネルギー
↓ 35~45%

- ①消費電力量の少ない高効率なランプや照明器具を採用
- ②調光や点灯の制御システムを導入
- ③部屋の用途や行為に応じて、一室一灯と多灯分散の照明方式を使い分け

13 高効率家電機器の導入

家電の買い換え時などに、省電力化された機器を選定します。

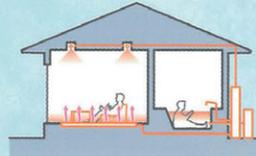


家電エネルギー
↓ 20~40%

- 消費電力量が大きい家電に省エネルギーな製品を選択(冷蔵庫、テレビ、温水暖房便座など)

14 コージェネレーションシステムの導入

システム発電時の排熱を給湯や床暖房に利用し効率を高めます。

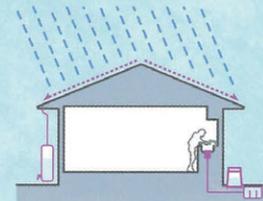


家庭全体のエネルギー
↓ 10~18%
(居室間歇暖房の場合など)

- ガスの供給網、家族構成や住まい方に適した機器を選択
→ガスエンジンシステム
燃料電池システム

15 水と生ゴミの処理と効率的利用

水の有効利用と排水・生ゴミの効果的な処理をはかります。



水
↓ 30% (洗濯機)
↓ 33% (大便器)
↓ 67% (食器洗浄機)
節水型機器による節水率を示す

- ①節水型の大便器や洗濯機などを採用
- ②雨水・排水再利用システムを採用
- ③雨水浸透枳や透水性舗装を採用
- ④コンポストやディスポーザなどを採用し、家庭から出る生ゴミを減量化

設計資料

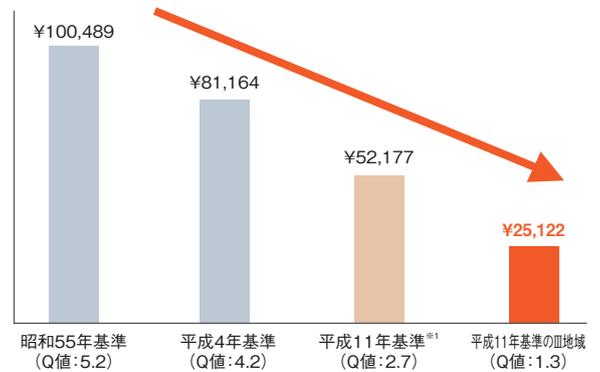
断熱の効果

断熱の効果(エネルギー料金)

断熱の効果はエネルギー使用量の低減に顕著に現れます。右のグラフは近畿大学の岩前研究室の試算ですが、昭和55年基準・平成4年基準・平成11年基準^{※1}・平成11年基準以上(推奨)の断熱レベルの建物の各々の電気代が比較されています。同様に下の表は国土交通省が公表している暖冷房費の比較です。東日本大震災以前のもので、金額差は今後増加すると予想されます。

■ Q値と年間暖冷房費の比較

(出典:近畿大学 岩前研究室)



■ 省エネルギー基準ごとの断熱仕様と年間暖冷房エネルギー消費量の比較

		昭和55年以前	昭和55年基準	平成4年基準	平成11年基準 ^{※1}	
仕様基準	性能基準	熱損失係数	5.2W/(㎡K)以下	4.2W/(㎡K)以下	2.7W/(㎡K)以下	
	断熱材(外壁)	断熱材(外壁)	なし	ロックウール30mm	ロックウール50mm	ロックウール92mm
		断熱材(天井)	なし	ロックウール40mm	ロックウール75mm	ロックウール155mm
開口部(窓)		アルミサッシ+単板	アルミサッシ+単板	アルミサッシ+単板	アルミ二重サッシ又はアルミサッシ+複層ガラス	
年間暖冷房費 ^{※2}		約133,000円/年	約92,000円/年	約75,000円/年	約52,000円/年	
年間暖冷房エネルギー消費量 ^{※2}		約56GJ	約39GJ	約32GJ	約22GJ	

※1 平成11年基準≒平成25年基準

※2 一定の仮定を置いて、国土交通省において試算。

(出典:国土交通省)

断熱の効果(税制上の支援措置)

*平成26年度 税制改正に基づく内容です。

	一般住宅	認定長期優良住宅	認定低炭素住宅																														
所得税 ^{※1} (住宅ローン減税)	<table border="1"> <tr><th>居住開始年</th><th>控除対象限度額</th><th>控除率</th><th>控除期間</th><th>最大控除額</th></tr> <tr><td>平成26.4~平成29.12</td><td>4000万円</td><td>1.0%</td><td>10年間</td><td>400万円</td></tr> </table>	居住開始年	控除対象限度額	控除率	控除期間	最大控除額	平成26.4~平成29.12	4000万円	1.0%	10年間	400万円	<table border="1"> <tr><th>居住開始年</th><th>控除対象限度額</th><th>控除率</th><th>控除期間</th><th>最大控除額</th></tr> <tr><td>平成26.4~平成29.12</td><td>5000万円</td><td>1.0%</td><td>10年間</td><td>500万円</td></tr> </table>	居住開始年	控除対象限度額	控除率	控除期間	最大控除額	平成26.4~平成29.12	5000万円	1.0%	10年間	500万円	<table border="1"> <tr><th>居住開始年</th><th>控除対象限度額</th><th>控除率</th><th>控除期間</th><th>最大控除額</th></tr> <tr><td>平成26.4~平成29.12</td><td>5000万円</td><td>1.0%</td><td>10年間</td><td>500万円</td></tr> </table>	居住開始年	控除対象限度額	控除率	控除期間	最大控除額	平成26.4~平成29.12	5000万円	1.0%	10年間	500万円
居住開始年	控除対象限度額	控除率	控除期間	最大控除額																													
平成26.4~平成29.12	4000万円	1.0%	10年間	400万円																													
居住開始年	控除対象限度額	控除率	控除期間	最大控除額																													
平成26.4~平成29.12	5000万円	1.0%	10年間	500万円																													
居住開始年	控除対象限度額	控除率	控除期間	最大控除額																													
平成26.4~平成29.12	5000万円	1.0%	10年間	500万円																													
所得税 ^{※2} (投資型減税)	—	標準的な性能強化費用相当額(H26.4からは上限650万円)の10%相当額を、その年の所得税から控除 ^{※3}	H26.4から適用 標準的な性能強化費用相当額(上限650万円)の10%相当額を、その年の所得税から控除																														
登録免許税	税率の軽減 ①保存登記 1.5/1000 ②移転登記 3.0/1000	税率の軽減 ①保存登記 1.0/1000 ②移転登記 戸建て 2.0/1000 マンション 1.0/1000	税率の軽減 ①保存登記 1.0/1000 ②移転登記 1.0/1000																														
不動産取得税	課税標準から1200万円控除	課税標準から1300万円控除	一般住宅と同じ																														
固定資産税	[一戸建て] 1~3年目 1/2軽減 [マンション] 1~5年目 1/2軽減	[一戸建て] 1~5年目 1/2軽減 [マンション] 1~7年目 1/2軽減	いずれも一般住宅と同じ																														

※1 控除額が所得税を上回る場合は翌年度の個人住民税額から控除(最高13.65万円)

※2 控除額がその年の所得税額を超える場合は、翌年分の所得税から控除

※3 H26.4からは減税額の算定基礎となる㎡単価(かかり増し費用)を引き上げ

(注) 認定長期優良住宅・認定低炭素住宅に係る所得税の特例は、※1と※2の選択制

断熱の効果(健康)

記載のグラフは近畿大学岩前研究室の調査資料です。

グラフ①は厚生労働省の人口動態統計等を基に岩前研究室でまとめたものですが、近年交通事故での死亡者より家庭内での事故の死亡者が多くなってきています。それもグラフ②の「月別死亡率の変遷」を見ると冬季に顕著に多く、入浴中心肺停止状態(CPA)発生の実態は年間17,000人(東京都健康長寿医療センター研究所調査)を超えるということです。

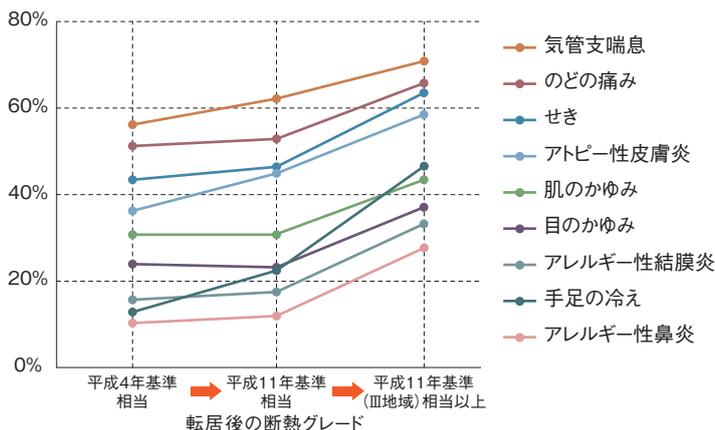
この結果から、住宅の断熱レベルのアップを建築家だけでなく医学会からも提言され、高齢になっても地域で元気に暮らせる社会を実現する「スマートウェルネス住宅」の奨励が各地で始まってきております。

グラフ③は冬季の寝室の平均気温を都市別にプロットしたものです。大半が12℃を下回っています。深夜から早朝にかけては相当低温になっていることが予測されます。

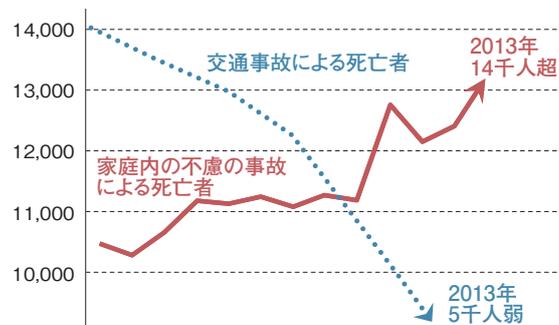
人体に深刻なリスクが現れるのが16℃、高齢者の低体温症が現れるのが10℃と言われており(グラフ④参照)、断熱レベルのアップは人体に関わる大きい問題になりつつあります。

グラフ⑤は断熱レベルの高い住宅へ転居された方へ、その後の疾病改善度合いを聞き取り調査したものです。断熱のレベルアップは疾患の改善にも効果があり、特に手足の冷えやアトピー性皮膚炎、アレルギー性結膜炎などに良化がみられます。

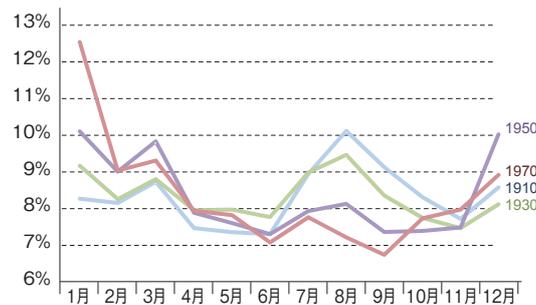
⑤ 住宅の断熱レベルと疾病の改善度合い



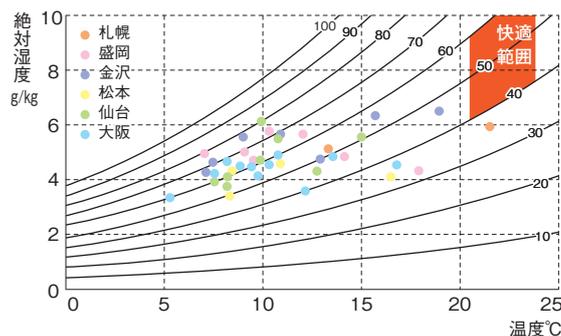
① 家庭内事故による年間死亡者数



② 月別死亡率の変遷



③ 冬季の寝室の平均温度(1・2月)



④ 「過度な寒さ」のリスク



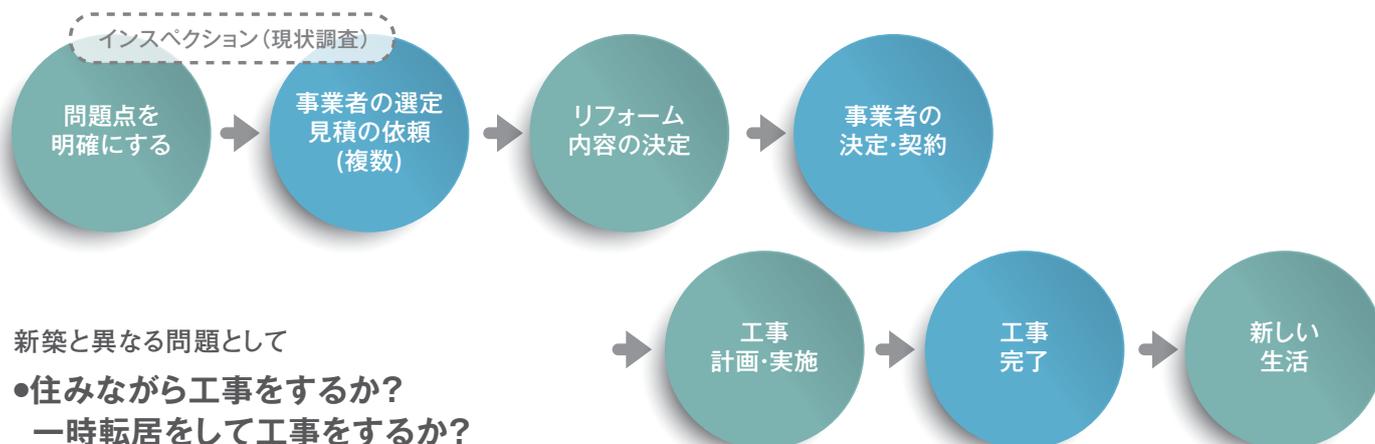
*室温が18℃より下がらないと一般には寒さを感じない。

(図①～⑤出典:近畿大学 岩前研究室)

断熱リフォームのポイント

一般的なリフォームの流れ

リフォームフェアやリフォーム相談会、インターネット等、リフォームに関する情報は数多く氾濫していますが、実際「リフォームをしたいが、何から始めればよいのか、わからない」と言われるお客様も多いでしょう。リフォームは、問題点(改善ポイント)を絞って進めることが重要です。下記のフローは一般的なリフォームの流れですが、今後の新しい流れとして「インスペクション」(後述)が加わってきました。改修ポイントを数値で明確につかんで工事に入るインスペクションは、これからの重要なリフォーム工事のポイントです。



新築と異なる問題として

- 住みながら工事をするか？
一時転居をして工事をするか？
- 取り壊す部分の廃材をどうするか？

などがリフォームの固有解決事項としてあります。

住まいの質を変える「断熱リフォーム」

2013年に現存するストック住宅は約6063万戸です。国土交通省の2012年調査では約95%が平成25年省エネルギー基準に満たない断熱性能です。

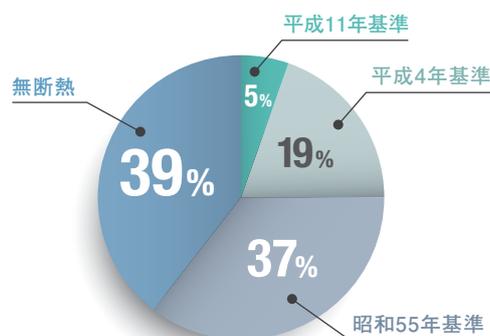
設備機器の交換と異なり目に見える効果は薄いのですが、「断熱リフォーム」は住まいの質を変えます。「健康」や「ヒートショック」への効果は顕著です。

耐震性向上リフォームと一緒に考えたい断熱リフォーム

少し古いデータですが、耐震性のないストック住宅が1050万戸あります。耐震性を考える時はスケルトンリフォームになりますので、断熱リフォームのチャンスです。

国土交通省の調査と異なり日本木造住宅耐震補強事業者協同組合(木耐協)の2015年発表の耐震診断調査2万889棟では震度6強クラスの地震が発生した場合、「倒壊しない」は266件で全体の1.27%、「倒壊する可能性がある」が3,482件(16.67%)だったようです。木造住宅は1981年の新耐震基準以降も建築金物等は大きく変化しており、耐震診断が重要です。

■ 住宅ストック約6,000万戸の断熱性能は？

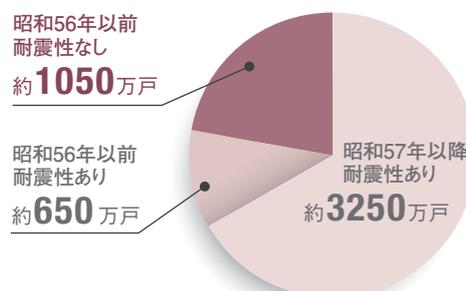


(出典:国土交通省)

●統計データ、事業者アンケート等により推計(2012年)
*平成11年基準は、平成25年基準と同等レベルです。

■ 住宅ストック約5,000万戸の耐震性は？

2008年(平成20年)の推計値



「断熱リフォーム」で改善される生活環境

「断熱リフォーム」は省エネ効果はもちろん、生活環境の改善による健康面への効果も期待できます。厚生労働省の統計によると、家庭内における不慮の事故死のうち、75%が65才以上の高齢者でその原因の多くは、ヒートショックだと言われています。ヒートショックとは急激な温度変化により身体が受ける影響のことで、寒い冬に暖かいリビングから冷たい浴室・脱衣室やトイレなど、温度差の大きいところへ移動すると、血圧の急激な上昇や下降をひき起し、脳卒中や心筋梗塞などの要因となります。このような住宅内の温度差を改善する対策として「断熱リフォーム」は有効です。また、夏の防暑対策としても「断熱リフォーム」は効果的で、夏の強い日射の影響による室内の温度上昇を緩和し、熱中症の予防にもつながります。



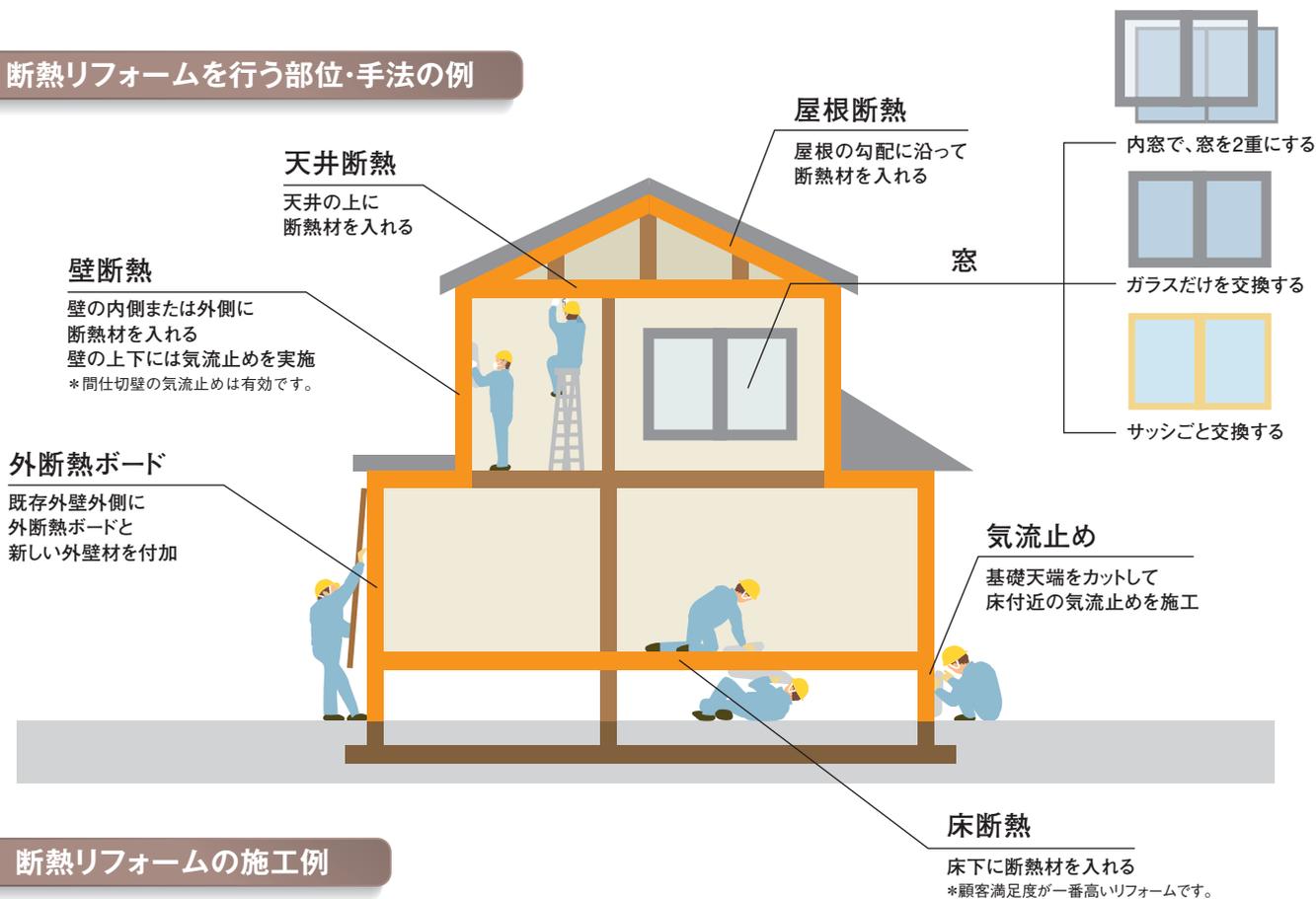
〈出典:一般社団法人 日本建材・住宅設備産業協会〉

断熱リフォームのポイント

断熱リフォームの種類

「断熱リフォーム」の種類としては、全面改修・部分改修があり、リノベーションを含めた「全面改修」は建築躯体(スケルトン)を残して全体改修するもので、新築に近い工事が可能です。地震に対する性能を強化する「耐震改修」をする場合は、「全面改修」に近いケースが多いので、同時に「断熱改修」をおすすめします。特に床への断熱は直接人体と接するので顧客満足度が高い部位です。「部分改修」としては現状の一部を取り除いて、交換する場合や、現状部分は取り除かず、新しいものを付加する工事方法などがあります。一般的には「リフォーム」は材料と工事費の比率で工事が大きくなります。浴室のリフォーム時には外壁部の断熱を。床下にも入れますので床の断熱を合わせておすすめします。

断熱リフォームを行う部位・手法の例



断熱リフォームの施工例

■ 天井に断熱材を施工



野縁を新しく施工します



ロックウールマットを敷き詰めます



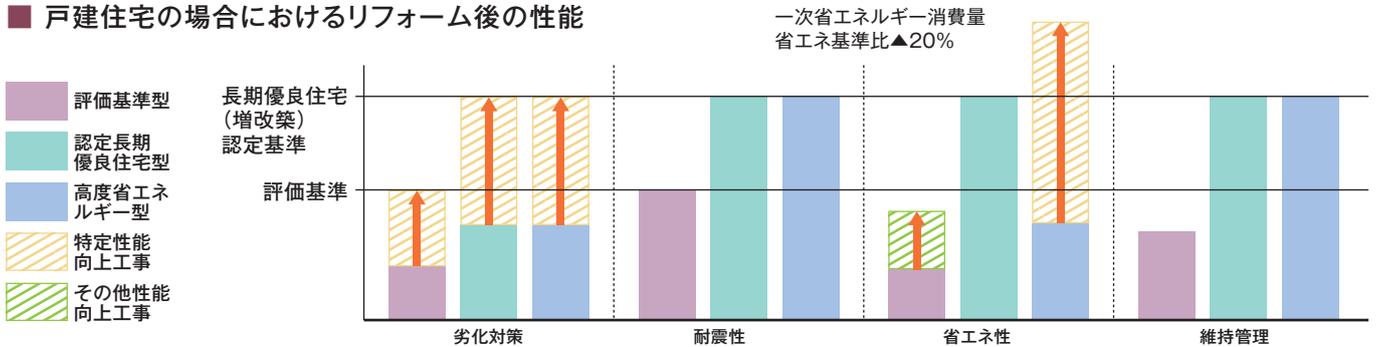
エコリフォームの完成

住宅のリフォーム(改修)

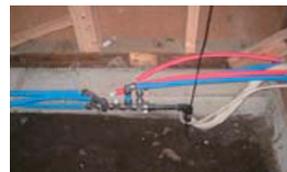
リフォーム(改修)から性能向上リフォームへ

「中古住宅の質の向上」に関しても、2009年(平成21年)に施行された「長期優良住宅の普及促進に係る認定制度」を既存住宅に適用する方法の検討がされ、基準等の整備が行われています。具体的な取り組みとして「長期優良住宅化リフォーム推進事業」が2013年度から開始されました。また、中古住宅の流通促進を含めた「中古住宅・リフォームトータルプラン」として、リフォームにより住宅ストックの品質・性能を高め、新築住宅中心の住宅市場を中古住宅の流通で循環利用されるストック型の住宅市場に転換する動きが促進されています。とくに、インスペクションによる客観的な中古住宅価値の把握によって、資産価値の維持・向上で、循環型住宅の実現が図られ始めています。

戸建住宅の場合におけるリフォーム後の性能



性能向上リフォーム工事例

耐震性 軸組等の補強  柱脚固定金物、筋交いプレートの追加	劣化対策 床下防湿・防蟻措置  防湿コンクリート下の防湿シート敷込	省エネルギー性 外壁の断熱  外壁の断熱材充填	維持管理・更新の容易性 維持管理・更新容易性の向上  さや管ヘッダー方式
--	--	---	---

(出典:国土交通省)

住宅リフォームの減税制度について

住宅リフォームを行うと、要件を満たす場合は税の優遇を受けることができます。優遇を受けることのできる税の種類は、次のとおりです。

所得税の控除

注)耐震、バリアフリー、省エネのそれぞれの税制によって、居住者、住宅や工事費等の要件が異なります。

リフォームの種類		①耐震 ②バリアフリー ③省エネ ④①～③以外の増改築工事			
リフォームローンの利用有無に関わらず利用可能	投資型減税(1年間の控除)	○	○	○	—
リフォームローンを借りる場合に利用可能	償還期間5年以上で利用可能	△ ②または③と併せて行う場合	○	○	△ ②または③と併せて行う場合
	償還期間10年以上で利用可能	住宅ローン減税(10年間の控除)	○	○	○

制度の併用例

併用例	居住年	最大控除額	
所得税(投資型) ①+②+③	平成26年4月～平成31年6月	70万円(80万円)※1	1年分
所得税(ローン型) ②+③	平成26年4月～平成31年6月	総額62.5万円	5年分
固定資産税 ②+③	平成25年1月～平成28年3月	減額割合2/3	1年度分

※1 カッコ内の金額は、太陽光発電を設置する場合。

その他の控除

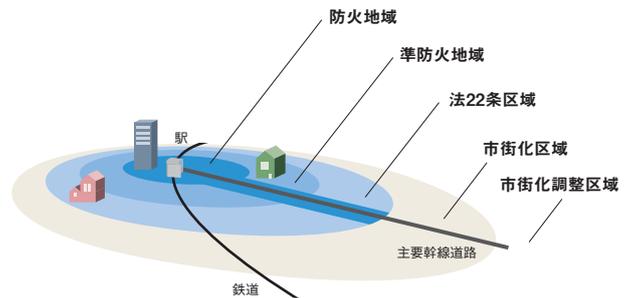
- ・固定資産税の減額
- ・贈与税の非課税措置
- ・登録免許税の軽減
- ・不動産取得税の特別措置

住宅の防耐火

「防火地域」と「準防火地域」における建物の種類

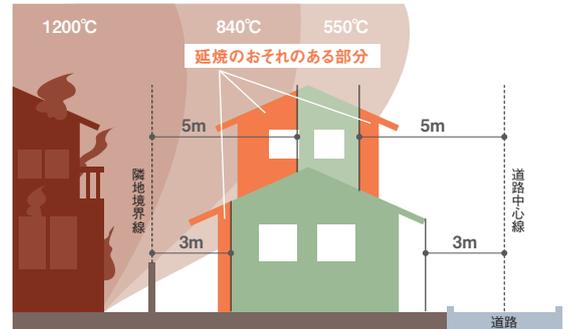
都市計画法では、街が無秩序に広がっていくことを防ぎながら計画的な街づくりを行うため、既に市街化している場所や、今後、計画的に市街化していくための「市街化区域」と、市街化を抑えるための「市街化調整区域」の二つに分け、建築・開発行為を制限しています。さらに、市街化区域の中で、建築物が密集し都市の中核となる都心部、あるいは人や物が集中する中心商業地域などを「防火地域」とし、火災時の安全性を確保しています。この地域では、原則として耐火建築物としなければなりません。平屋または2階建てで延べ床面積が100平方メートル以下であれば、準耐火建築物とすることができます。

上記の防火地域に準ずる地域として、防火地域の周辺に住宅地も含めて指定される地域が「準防火地域」です。この地域では、一般の木造住宅についても外壁と軒裏は防火構造以上にしなければなりません。また、自治体では防火地域・準防火地域以外の市街化区域について、建築基準法22条を適用するための区域を指定する場合があります。これを一般的に「法22条区域」と称しています。



延焼のおそれのある部分とは

建物の部分が、道路中心線・隣地境界線・同一敷地内の2棟以上の棟相互の外壁間距離の中心線より、1階は3m以下、2階以上は5m以下の距離にある建物の部分を「延焼のおそれのある部分」といいます。なお、防火上有効な、公園・広場・川等の空地、水面、および耐火構造の壁に面している部分には適用されません。



*日本火災学会火災便覧を参考に作図

建物の用途、規模、地域と要求される防火性能

建築しようとする建物に要求される防火性能は、その建物の用途、規模、地域によって下表のように規定されています。

地域	階数	規模(延べ床面積) m ²					
		~100	100~500	500~1000	1000~1500	1500~3000	
戸建住宅	防火	3	耐火構造(法61条)				
		1~2	45分準耐火構造(法61条)				
	準防火	3	準防火木3階仕様(法62条、令136条の2)		準耐火構造(法62条)		耐火構造(法61条)
	1~2	[外壁・軒裏]防火構造(法62条) [屋根]※1					
法22条区域	1~3	[外壁]準防火構造 [屋根]※2			[外壁・軒裏]防火構造 [屋根]※2(法25条)		
共同住宅	防火	3	耐火構造(法61条)				
		1~2	準耐火構造(法61条)				
	準防火	3	木造3階建共同住宅仕様(法27条、令115条の2の2)				耐火構造(法61条)
		1~2	[外壁・軒裏]防火構造(法62条) [屋根]※1		準耐火構造(法62条)		
法22条区域	3	木造3階建共同住宅仕様(法27条、令115条の2の2)					
	1~2	[外壁]準防火構造 [屋根]※2	[1階]200m ² 以上 [2階]300m ² 未満 [外壁・軒裏]防火構造(法24条)	300m ² 以上 準耐火構造(法27条、令115条の2の2)			

※1 国土交通大臣が定めたもの(法62、法63) ※2 国土交通大臣が定めたもの(法22、法23)

省令準耐火構造の住宅が建てられる地域

建築基準法では、通常の木造建築物よりも高い防火性能を有する建築物として、耐火建築物、準耐火建築物を規定しています。

■耐火建築物(建築基準法 第2条第9号の2)

耐火建築物とは、主要構造部が耐火構造であるもの又は耐火性能検証法等により火災が終了するまで耐えられることが確認されたもので、外壁の開口部で延焼のおそれのある部分に防火戸等を有する建築物のことをいいます。

■準耐火建築物(建築基準法 第2条第9号の3)

準耐火建築物とは、耐火建築物以外の建築物で、主要構造部が準耐火構造(法2条9号の3イ)又はそれと同等の準耐火性能を有するもので、外壁の開口部で延焼のおそれのある部分に防火戸等を有する建築物のことをいいます。

■耐火構造(建築基準法 第2条第7号)

壁、柱、床その他の建築物の部分の構造のうち、耐火性能(通常の火災が終了するまでの間当該火災による建築物の倒壊及び延焼を防止するために当該建築物の部分に必要とされる性能をいう)に関して政令で定める技術的基準に適合する鉄筋コンクリート造、れんが造その他の構造で、建設大臣が定めた構造方法を用いるもの又は建設大臣の認定を受けたものをいう。

■主要構造部(建築基準法 第2条第5号)

壁、柱、床、はり、屋根又は階段をいい、建築物の構造上重要でない間仕切壁、間柱、附け柱、揚げ床、最下階の床、廻り舞台の床、小ばり、ひさし、局所的な小階段、屋外階段その他これらに類する建築物の部分を除くものとする。

ロックウールを使用した準耐火・防火構造一覧表

告示／認定番号	認定区分	構造	部位	断熱構造	外装材			アムマットの厚さ (mm)	代表的な内装	
					窯業系サイディング		モルタル			
					釘留め	金具留				
平12建告1362	防火構造※	軸・枠組	外壁	充填	—	—	土塗り	75以上	合板4以上	
平12建告1359		軸・枠組	外壁	充填	—	—	○	75以上	合板4以上	
PC030BE-0579	防火構造 (30分)	軸組	外壁	外張	○	○	○	60以上	普通合板4以上 構造用合板5以上 OSB9以上 シーリングボード9以上 せっこうボード9.5以上	
充填				○	○	○	55以上			
PC030BE-0580		枠組		外張	○	○	○	60以上		
				充填	○	○	○	55以上		
平12建告1358	準耐火構造 (45分)	軸・枠組	外壁	外張	金属板			25以上 (保温板)	せっこうボード15以上 せっこうボード12以上+9以上	
QF045BE-0380 ~QF045BE0383		軸組		外張	—	○	—	25以上	強化せっこうボード12.5以上 せっこうボード15以上	
QF045BE-0239				充填	○	○	○	55以上		
QF045BE-0477 ~QF045BE0481		枠組		充填	—	○	—	55以上		
平12建告1358	準耐火構造 (45分)	軸・枠組	間仕切壁	充填	—			—	せっこうボード15以上 せっこうボード12以上+9以上	
QF045FL-0005		軸・枠組	床	充填	—			55以上	床:合板12以上+せっこうボード9以上 直下:せっこうボード12以上	
平12建告1358		軸・枠組	床	屋根	充填	—			50以上	床:合板12以上+せっこうボード9以上 直下:強化せっこうボード12以上
			階段			不燃材料 (平12建告1400)				
平12建告1380	準耐火構造 (1時間)	軸・枠組	床	充填	—			50以上	床:合板12以上+せっこうボード9以上 直下:せっこうボード12以上+12以上	
QF060FL-0011		軸・枠組	床	充填	—			50以上	床:合板12以上+せっこうボード9以上 直下:せっこうボード12以上+12以上	

※延焼のおそれのある部分のみ対象となります。注)認定内容は、別途お問い合わせください。

住宅の防耐火(省令準耐火木造住宅)

省令準耐火木造住宅とは

省令準耐火木造住宅とは、住宅金融支援機構が建築基準法で定める準耐火構造に準ずる防火性能を持つ構造として、一定の基準に適合する住宅をいいます。具体的には次の①～③のいずれかの住宅または工法です。

- ① 機構の定める省令準耐火構造の仕様に基づき建設された、枠組壁工法(2×4)住宅又は木造軸組工法住宅
- ② 省令準耐火構造として機構が承認したプレハブ住宅
- ③ 省令準耐火構造として機構が承認した住宅または工法

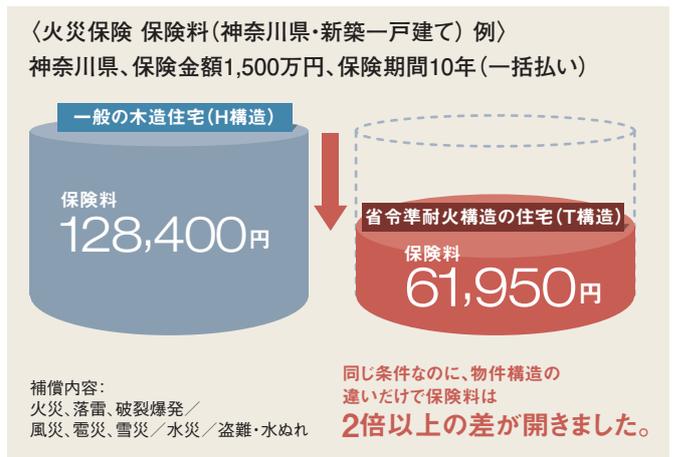
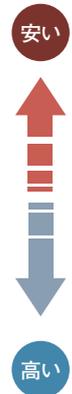
また、特徴としては下記項目があり、火災保険の料率が軽減優遇されます。

- 特徴1.** 隣家などから火をもらわない。(外部からの延焼防止)
- 特徴2.** 火災が発生しても一定時間部屋から火を出さない。(各室防火)
- 特徴3.** 万が一部屋から火が出ても延焼を遅らせる。(各室への延焼遅延)



構造区分	該当する主な建築物の種類
耐火性:高 M構造	●耐火建築物の「共同住宅」 ●コンクリート建築物の「共同住宅」など
T構造	●耐火建築物 ●準耐火建築物 ●省令準耐火建築物など
H構造 耐火性:低	●M構造およびT構造に該当しない建物 ●木造建物など

保険料



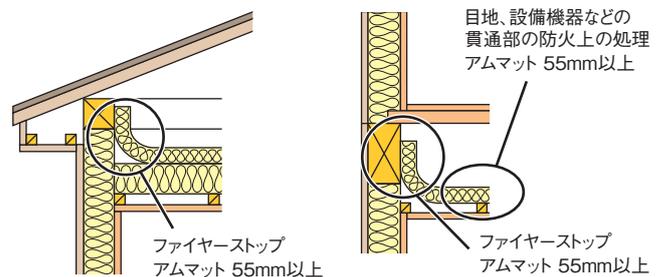
省令準耐火構造におけるロックウールの役割

ロックウールは省令準耐火木造住宅によく使用される断熱材です。

- 防火被覆材と取り合い部、目地、設備機器の貫通部における防火上の処理
取り合い部・目地部は、防火上の弱点となりやすいのでアムマットを敷きこみます。

●ファイヤーストップの設置

防火被覆材が万が一突破されたことを想定し、壁や天井など当該部位の内部を経由する火災拡大を最小限に抑えるために部材内部や部材間を区画するための部材としてアムマットは非常に有効です。



【2階天井のファイヤーストップ設置例】

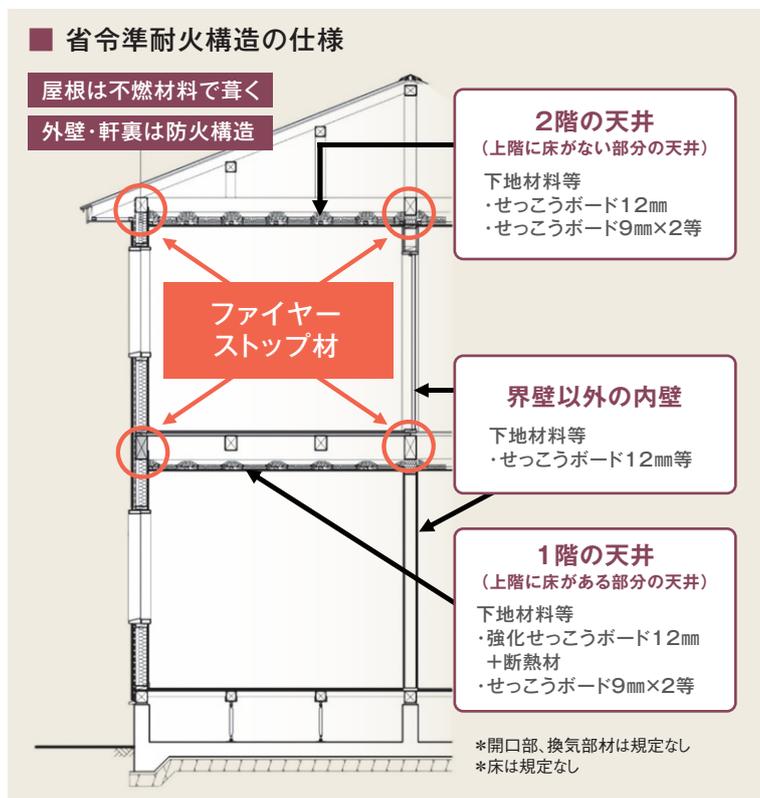
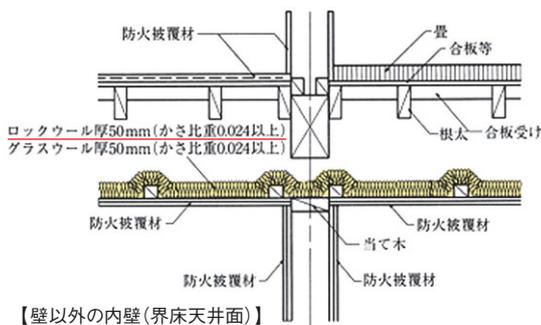
【1階天井の目地処理とファイヤーストップ設置例】

* 各部位及び詳細な仕様については、(独)住宅金融支援機構「木造住宅工事仕様書」又は「木造軸組工法における省令準耐火構造の仕様の解説」をご参照ください。

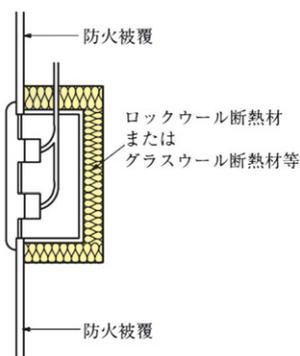
一般社団法人日本木造住宅産業協会や一般社団法人JBN(全国工務店協会)は会員向けに個別に住宅金融支援機構の承認を受けています。特筆すべきは真壁構造でも認定されている仕様がある事です。
ロックウール断熱材に関連する項目は、基本的には住宅金融支援機構の仕様書と同一です。

下記に住宅金融支援機構の納まり詳細図を示します。

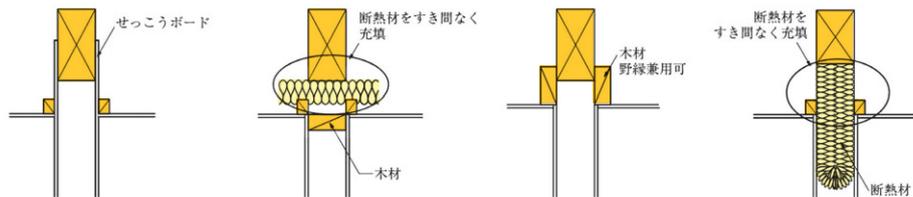
■ 住宅金融支援機構 フラット35仕様書 納まり図



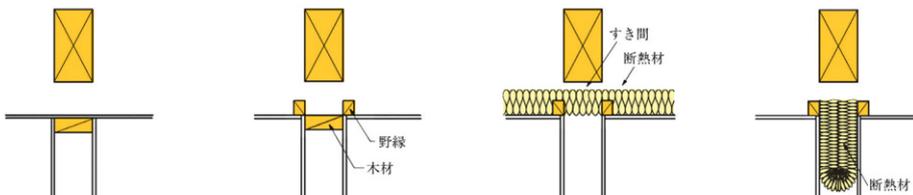
コンセントボックスの例



上階に床がある部分の天井のファイヤーストップ

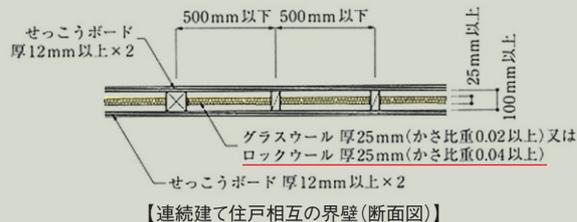


上階に床がない部分の天井のファイヤーストップ



住宅金融支援機構のフラット35仕様書ではロックウールの密度に関して規定されています。一般的に、ロックウールで密度に関する表記が出てくるのは、この仕様書と下記の告示です。

- 建設省告示1827号(界壁遮音)かさ比重0.04
→P.15のロクセラムマットをご使用ください。
- 建設省告示1358号及び1380号(準耐火構造)かさ比重0.024
→通常のアムマットもご使用いただけます。



(出典:住宅金融支援機構)

断熱施工の基本

断熱施工3つのポイント

省エネ基準の解説書に施工の基本が掲載されています。

ポイントは以下の3点です。

イ) 断熱の連続性

ロ・ハ) 気流止め

ニ) 防湿層(室内側)の設置

※「防湿」については79ページを参照



断熱材等の施工に関する基準

断熱材の施工に当たっては、次に掲げる事項に配慮すること。

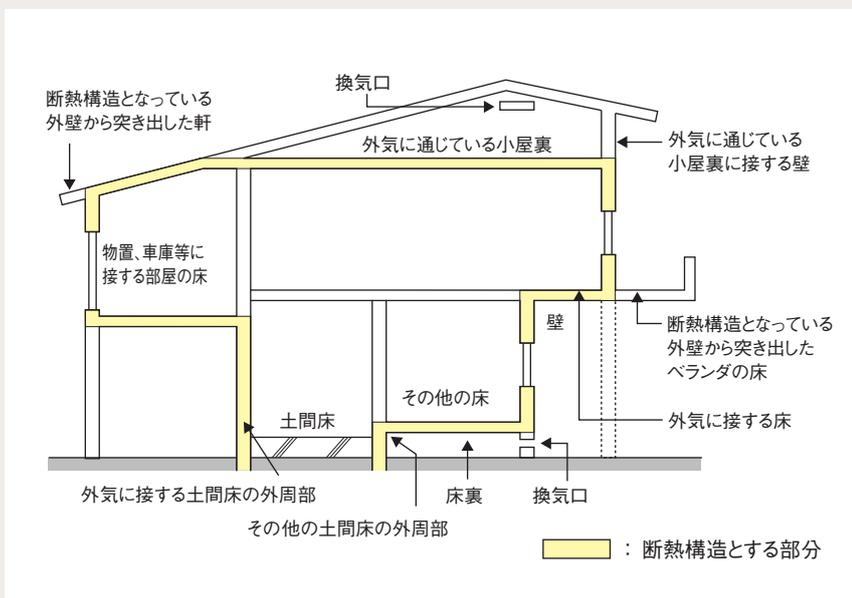
- イ 断熱材は、必要な部分に隙間なく施工すること。
- ロ 外壁の内部の空間が天井裏又は床裏に対し開放されている住宅の当該外壁に充填断熱工法により断熱施工する場合にあっては、当該外壁の上下端部と床、天井又は屋根との取合部に気流止めを設けること。
- ハ 間仕切壁と天井又は床との取合部において、間仕切壁の内部の空間が天井裏又は床裏に対し開放されている場合にあっては、当該取合部に気流止めを設けること。なお、屋根を断熱及び日射遮蔽のための措置を講じた構造（以下「断熱構造」という）とする天井裏又は基礎を断熱構造とする床裏にある当該取合部については、この限りでない。
- ニ グラスウール、ロックウール、セルローズファイバー等の繊維系断熱材、プラスチック系断熱材（工業標準化法（昭和24年法律第185号）に基づく日本工業規格（以下「日本工業規格」という。）A9511（発泡プラスチック保温材）に規定するもの（A種フェノールフォーム3種2号を除く。）、日本工業規格A9526（建築物断熱用吹付け硬質ウレタンフォーム）に規定する吹付け硬質ウレタンフォームA種1又はA種2に適合するもの及びこれらと同等以上の透湿抵抗を有するものを除く。）その他これらに類する透湿抵抗の小さい断熱材を使用する場合にあっては、防湿層（断熱層（断熱材で構成される層をいう。以下同じ。）の室内側に設けられ、防湿性が高い材料で構成される層であって、断熱層への漏気や水蒸気の侵入を防止するものをいう。）を設けること。ただし、結露の発生の防止に有効な措置が講じられていることが確かめられた場合にあっては、この限りでない。

〈出典：平成25年省エネルギー基準に準拠した算定・判断の方法及び解説（Ⅲ 住宅の設計施工指針）〉
 〈監修：国土交通省 国土技術政策総合研究所・独立行政法人 建築研究所〉

断熱構造とする部分

断熱構造とする部分は、外気と室内を区分する境界部分となります。この境界部分に断熱材を施工します。

■ 天井断熱の場合



ただし、以下に該当する部分は、断熱を省略できます。

1. 居室に面する部位が断熱構造となっている物置、車庫、またはこれらと同様の空間の居室に面する部位以外の部位
2. 外気に通じる床裏、小屋裏または天井裏に接する外壁
3. 断熱構造となっている外壁から突き出した軒、袖壁、ベランダ、その他これらに類するもの
4. 玄関・勝手口および、これに類する部分における土間床部分
5. 断熱構造となっている浴室下部における土間床部分

*平成11年基準（緩和規定）との大きな違いは、概ね4㎡程度の土間は免除されていましたが、この項目がなくなったので、土間の立上がり部は全て省エネ計算に入ることです。

イ・二) 断熱ライン・防湿層の連続性 ※「防露」については79ページを参照

断熱施工で一番大切なのは「断熱ラインの連続性」です。

断熱する空間を決め、その境界にキッチリと切れ目無く断熱ラインを作る事が重要です。断熱ライン(境界)は「断熱材」と「気密層」及び「開口部」で構成されます。室内側に「気密層≒防湿層(防湿気密シート)」を配備し、室内からの水蒸気の侵入を低減します。屋外側は「防風層(透湿防水シート)」で外気からの雨水を防止します。防風層外側の「通気層」は室内外から侵入して来た湿気を通気層に出して断熱材などの壁体内結露を防止します。木材中の水分も一緒に排出し、断熱材と木材の乾燥状態を維持する重要な役割を果たします。通気層には外壁サイディングの裏面を乾燥状態にして、割れを低下する効果もあります。

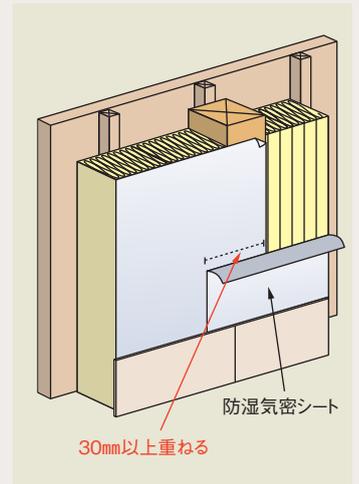
断熱材を隙間なく施工する

ロックウールを適正サイズにカットし、施工します。



防湿層を連続させる

別張りで、防湿気密シートを使用する場合、木下地の部分でフィルム相互を30mm以上重ね、ボードまたは乾燥木材等で押さえます。

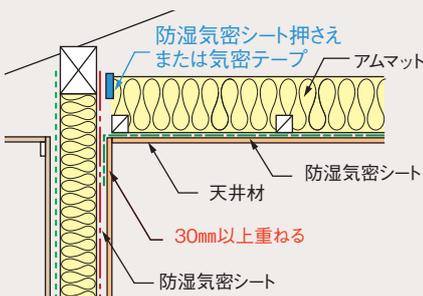


ロ・ハ) 気流止めを設置する

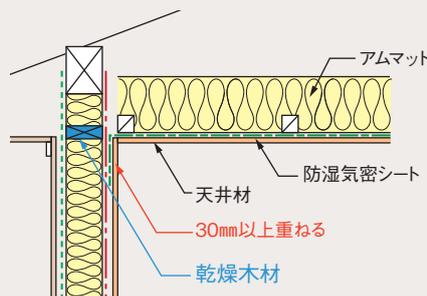
気流止めとは、躯体内気流を防止し、断熱効果を維持するものです。*詳細はP.72以降をご参照ください。

小屋裏(天井部)との取合い【代表的な3例】

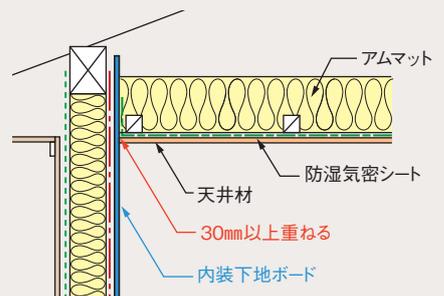
1 防湿気密シートと押さえ材等による方法



2 乾燥木材による方法



3 内装下地ボード等の面材による方法

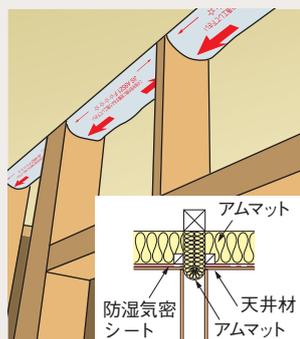


間仕切り壁(天井・床) アムマットによる方法

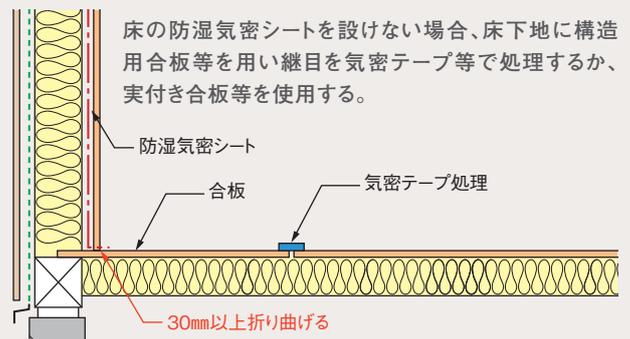


床

天井

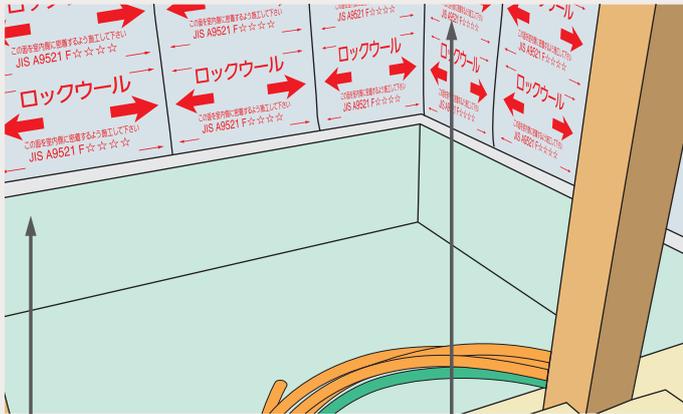


床との取合い部



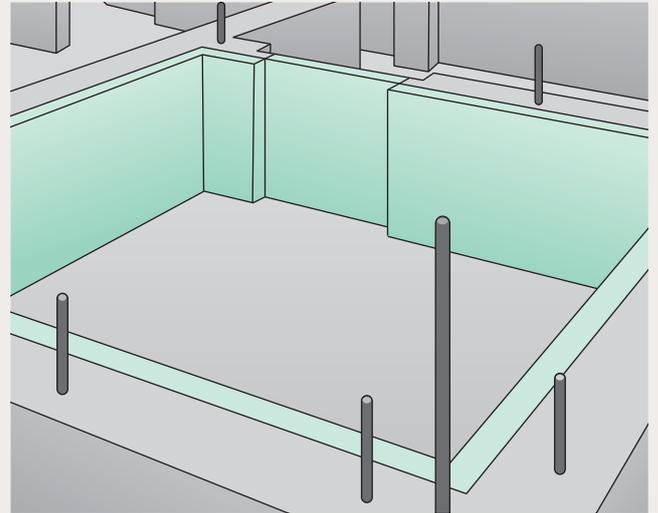
代表的な施工方法 / 充填断熱工法

床の施工 (ユニットバスルーム・システムバスルームの土間周り)

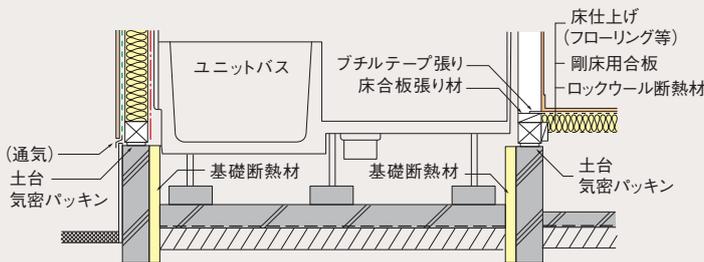


ユニットバス土間周りの基礎立上りに発泡系断熱材の施工が必要です。(土間基礎部分の施工は不要です。)

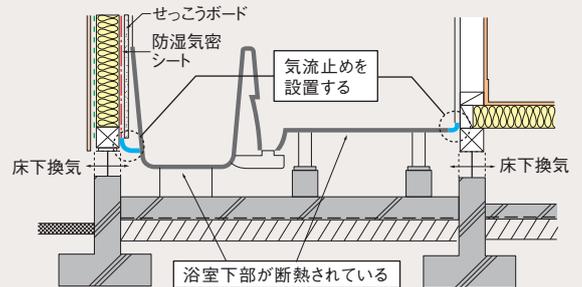
ユニットバス壁のアムマット施工後にせっこうボードで押さえます。



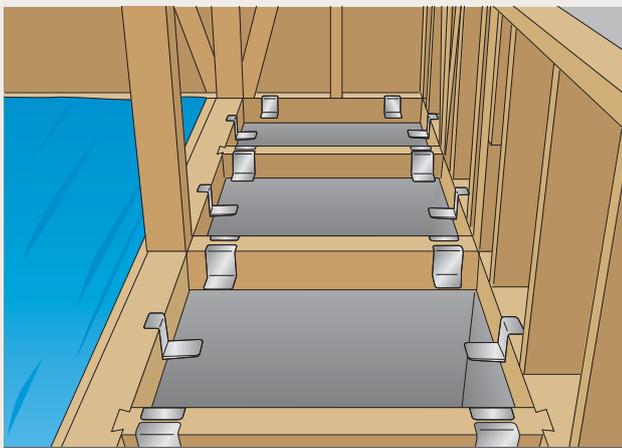
■ 基礎断熱の納まり



■ ユニットバスルーム (高断熱浴槽) の納まり

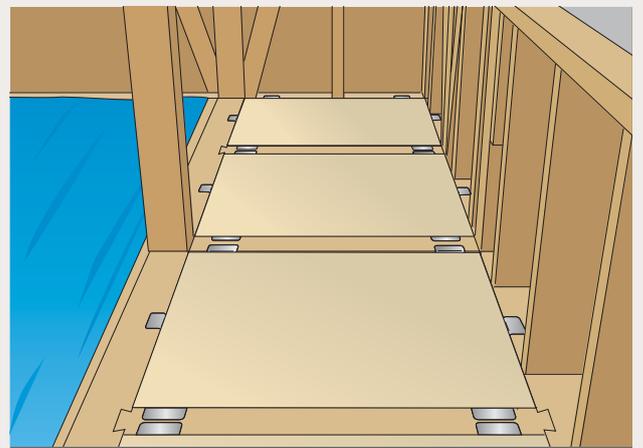


1階の床 床ボードIIネダレスの施工例



「かかる〜の」を施工

土台、大引きに受金具「かかる〜の」(別売)を施工します。



施工後

床ボードIIネダレスを「かかる〜の」に乗せます。

壁（一般部分）

柱、間柱の狭くなる部分のアママット施工は幅方向を切り取り充填施工します。
カット部分と柱、間柱の固定は、気密テープで補修処理をします。



筋かい部



シングル筋かい

ダブル筋かい

POINT

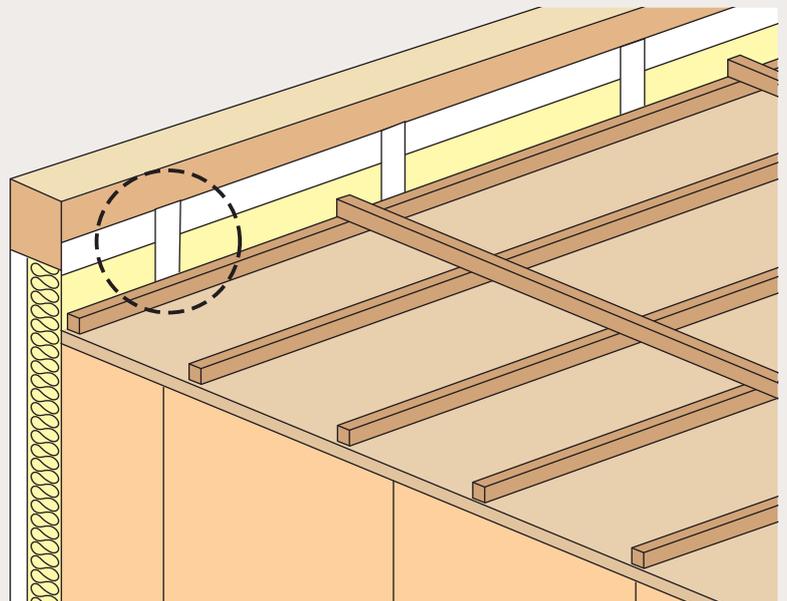
アママットを筋かいの実寸法より大きめにカットし、壁に充填施工します。
カット部分と筋かい部分の固定は、気密テープで補修処理をします。

アママット プレミアム施工時の注意点

アママット プレミアムは JIS A 6930 A種相当 (50ミクロン) の付属防湿フィルムを使用しております。
高い防露性能を確保する為「重ねしろ30mm以上確保する」ことが施工のポイントです。
30mm以上重ねしろを確保できない場合は乾燥木材で押さえつけるか、気密テープで処理して下さい。

天井周りの納まり

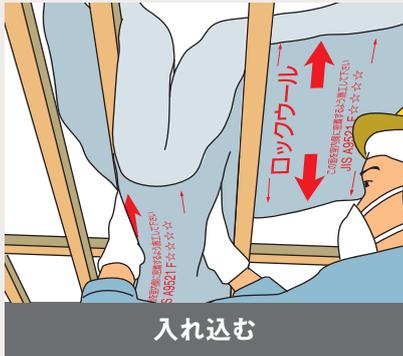
天井周りの壁で、せっこうボードを桁まで張り上げず、内装材（せっこうボードなど）による押さえがない場合は、フィルム耳の留付け部を気密テープで処理します。
防湿気密シートを桁、胴差まで張り上げる場合は、必要ありません。



代表的な施工方法 / 充填断熱工法

天井

■ 施工手順



入れ込む

① 付属防湿フィルムを室内側に向けて、二つに折って入れ込みます。



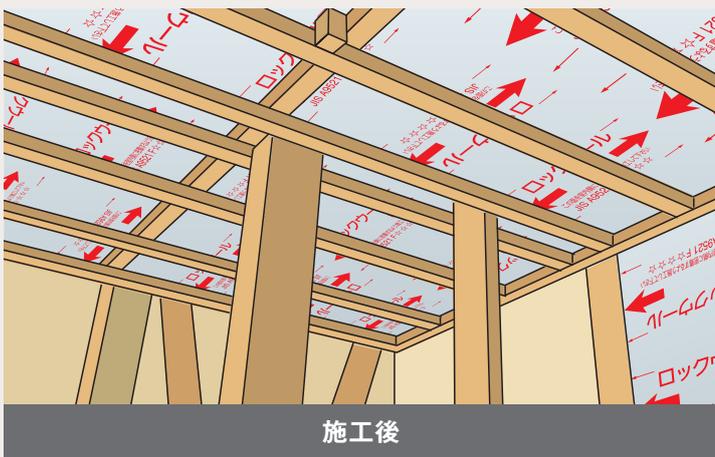
敷く

② マットを押し広げながら敷き込んでいきます。



隙間を詰める

③ 隙間が生じないようにマットを奥に敷き詰めます。

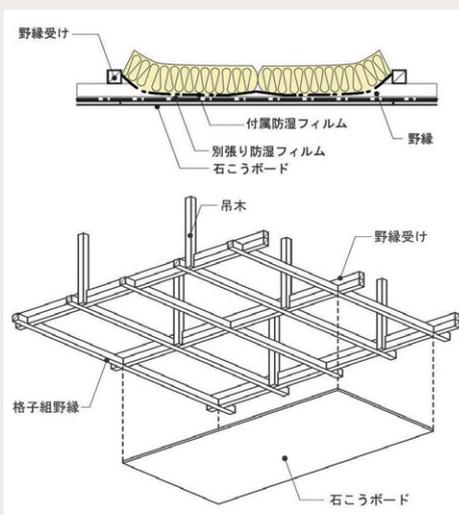


施工後

POINT

マットの付属防湿フィルム面を室内側に向けて、野縁の上でマットとマットを突き付けて断熱層・防湿層が連続するように敷き詰めます。上向き作業になる為、足場の安定を確保して下さい。

別張り防湿フィルムの施工



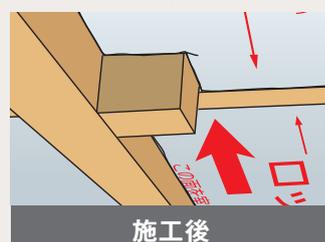
外壁の場合は、防湿フィルムを30mm以上重ねてその上から石こうボード等や乾燥木材で押さえ、防湿層の連続を確保しますが、天井の断熱材は、野縁の上に断熱材を敷き込んだだけでは防湿層が連続しません。そのため、別張りの防湿フィルムが必要です。ただし、4～7地域では、石こうボード等の内装下地材の四周端部に木下地が来るように野縁を組んだ場合(格子組野縁)は、別張り防湿フィルムを省略することができます。

〔出展：住宅省エネルギー技術講習会 施工技術者講習テキスト〕

吊木周りの納め方



① 吊木と干渉する部分は、マットを切り欠きます。



② 吊木周りに隙間を生じさせないようにマットを突き付けます。

下屋の納まり

■ 施工手順



施工前

① 外壁を先行して充填施工し、その後下がり壁と野縁の施工をします。



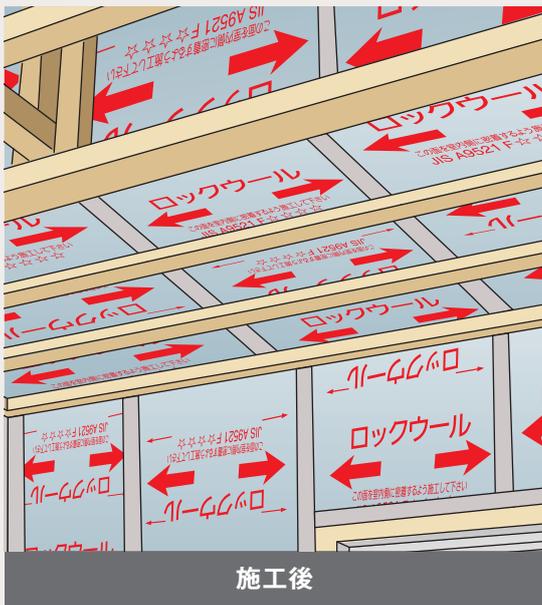
野縁上にアムマット施工中

② 外壁と野縁の取合部から野縁の上にアムマットを敷き込んでいきます。



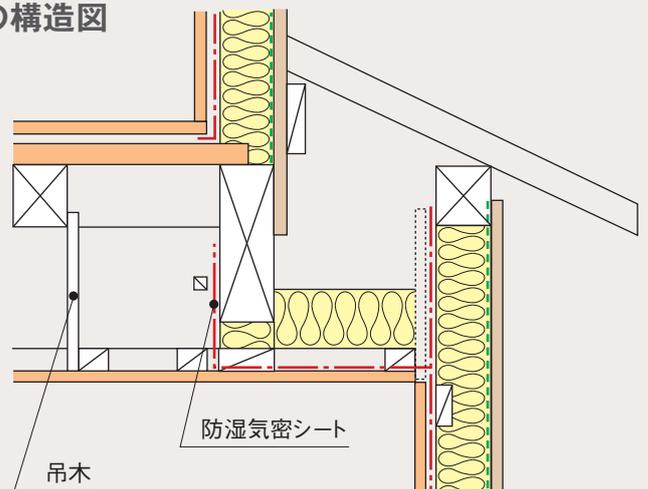
下がり壁施工中

③ 下がり壁部分に、寸法に合わせてカットしたアムマットを充填施工します。



施工後

■ 下屋の構造図



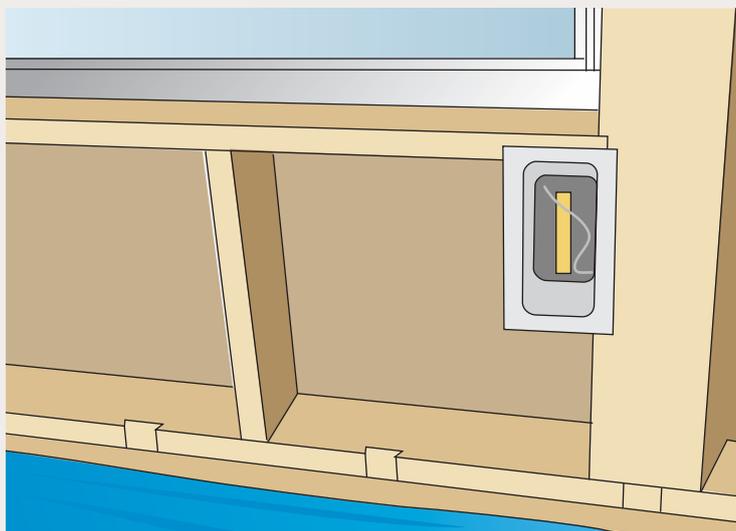
POINT

天井野縁の下端に防湿気密シートを施工します。室内・室外の区切りはアムマットによる気流止めを行います。



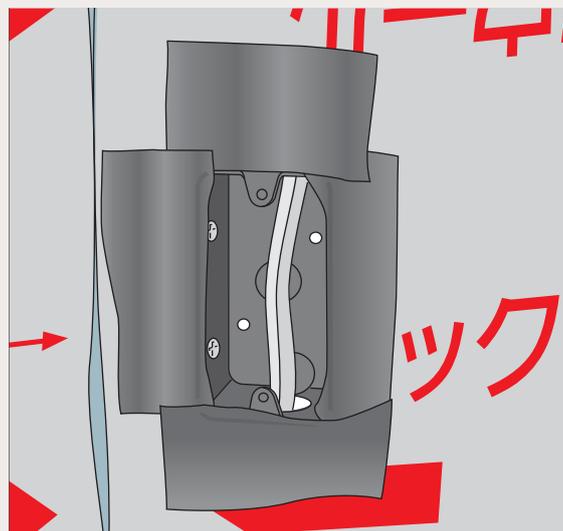
代表的な施工方法 / 充填断熱工法

コンセント周り



専用部材を用いた場合

- ①コンセント周りの付属防湿フィルムをはがし、アムマットに切り込みを入れボックスの裏に入れ込みます。
- ②コンセントボックスのアムマットの耳をタッカーで留付けて、施工完了です。



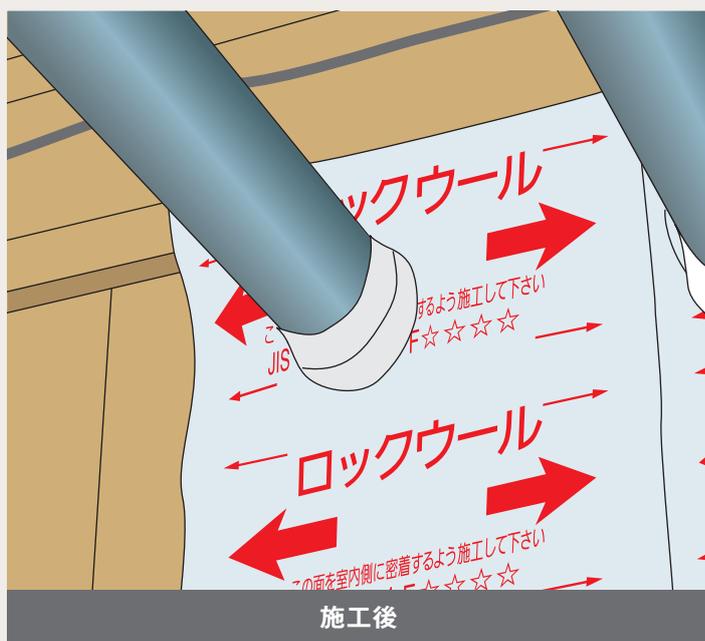
気密テープを用いた場合

- ①コンセント周りのアムマットを切取ります。
(コンセントボックスより小さめに切取って下さい。)
- ②コンセントボックスに合わせてアムマットを施工し、気密テープを周りに施工し完成です。

配管周りの納め方(壁貫通部)



施工前



施工後

- ①貫通する配管の位置・サイズにアムマットを開口します。(実際のサイズより小さく開口する)
- ②配管周りにアムマットを据付け、側部(柱、間柱に接する部分)は、柱見付面にシート耳をタッカーで留付けます。(約200mmピッチ)
- ③配管周りに気密テープで付属防湿フィルムを貼付け完成です。

配管周りの納め方(壁内配管周り)

■ 施工手順



カット中

① 配管位置に合わせてアムマットをスライスします。



充填中

② 配管の裏側にスライスしたアムマットを入れます。



タッカー留め

③ 残りのアムマットをあてがいタッカーで留付けます。
(約200mmピッチ)



施工前



施工後

代表的な施工方法 / 充填断熱工法

防湿気密シート

省エネルギー基準では、防湿気密シートを室内側に施工することが基本条件です(P.63参照)。4地域以南では、条件により防湿気密シートを省略することが可能ですが、防湿気密シートを張ることで、室内の気密環境と、構造材を結露から守る防露性能が大幅にアップします。

- ・ 防湿気密シートは、JIS A 6930に規定される性能のものをご使用下さい。
- ・ 高い防露性能を確保するため「重ねしろを30mm以上確保する」ことが施工のポイントです。

POINT

防湿気密シートの継ぎ目は、下地材がある部分で30mm以上重ね合わせます。継ぎ目に下地材がない場合は、気密テープで処理して下さい。



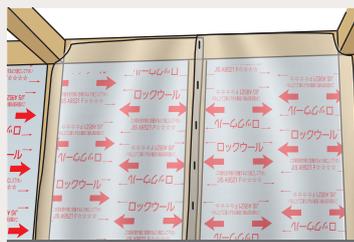
壁 / 別張り防湿気密シートの施工例

■ 施工手順

- ① 防湿気密シートは、隙間なく連続して張ります。
- ② 上端部は梁にタッカーで留め、気密テープで止めます。
- ③ 下端部は床に30mm以上の重ねしろをとって、タッカー留めします(気密テープ処理は不要)。その上に床仕上げ材を施工します。
- ④ その他の部分でも、防湿気密シートの重ねしろは下地材(柱・間柱)のあるところで30mm以上確保します。



防湿気密シートの継ぎ目処理

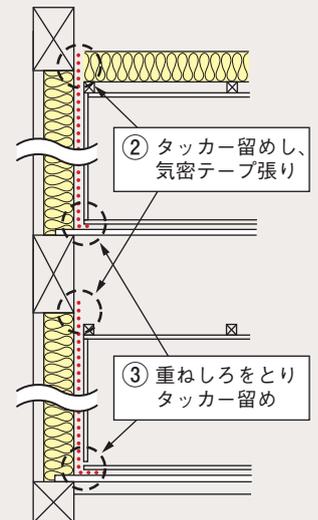


防湿気密シートの継ぎ目部分をタッカーで留付けます。(約200mmピッチ)



防湿気密シートの継ぎ目部分に気密テープを張り付けます。

■ 壁の構造図



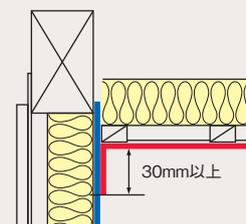
天井 / 防湿気密シートの施工例

■ 施工手順

野縁の室内側に防湿気密シートを施工します。



■ 天井と壁の構造図



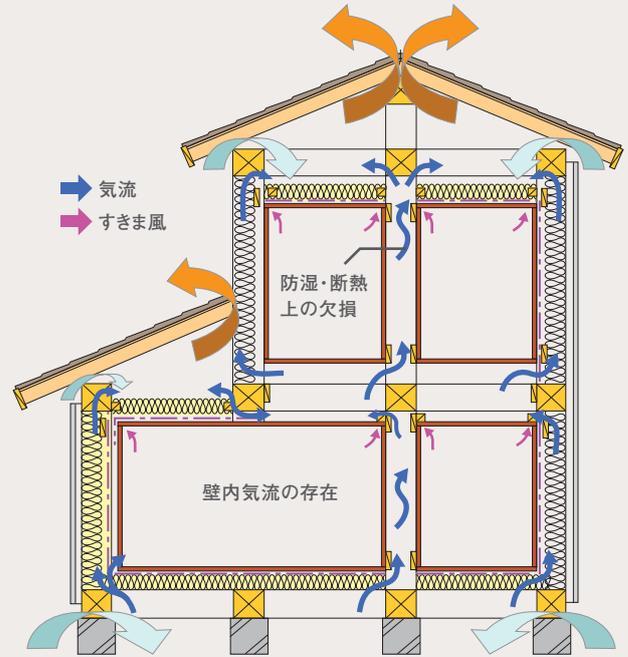
防湿気密シートの取合い

天井の防湿気密シートは、壁の防湿気密シートと30mm以上重ね、気密テープで押さえます。

気流止めの必要性について

■ 気流止めとは

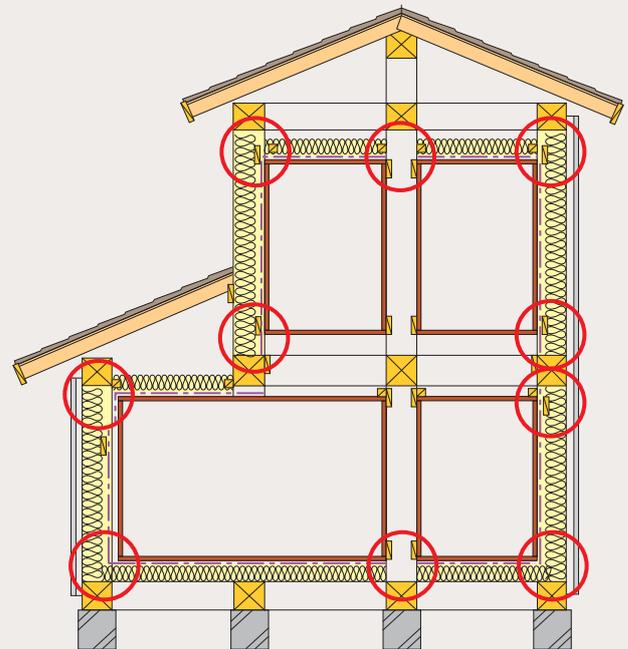
従来の木造住宅（軸組工法）は、床下・壁内・小屋裏などの構造空間が連続しており、そこに生じる躯体内部気流によって柱・梁などの構造木材の乾燥維持がはかられてきました。しかし、構造用木材も含水率の管理がされ、棟上げ当初から乾燥状態が保たれるようになりました。さらに現在の断熱住宅で多く用いられている充填断熱では、そうした構造体内部に断熱材を充填するので、躯体内部気流が生じると断熱性が十分得られなくなることがあります。したがって、断熱効果を十分に発揮させるためには、床下から壁（外壁・間仕切り壁）への気流と、壁から小屋裏への気流を止めることが必要です。気流止めは、充填断熱の場合に必要なりますが、外壁を外張断熱として屋根断熱や基礎断熱を用いる場合などでは不要となります。



気流止めの主な方法

以下に表すように、主に4種類があります。

- ① 床下地合板や内装下地ボード等の面材による方法
床下地合板や壁・天井下地のせっこうボード等の面材によって気流止めをする方法です。
- ② アムマットによる方法
アムマットを適当な長さにカットし、付属防湿フィルムが室内側になるようにU字に折り曲げたものを充填する方法です。
- ③ 乾燥木材による方法
気流の経路を塞ぐことのできる所要の大きさの乾燥木材によって気流止めをする方法です。
- ④ 防湿気密シートと押さえ材等による方法
防湿気密シートを取り付けて気流止めをする方法です。シートの端部はタッカー留めするだけでなく、下地（桁など）や受け木と防湿気密シートを挟んで押さえ材で取り付けるか気密テープで留め付ける必要があります。



部位ごとの気流止めの方法

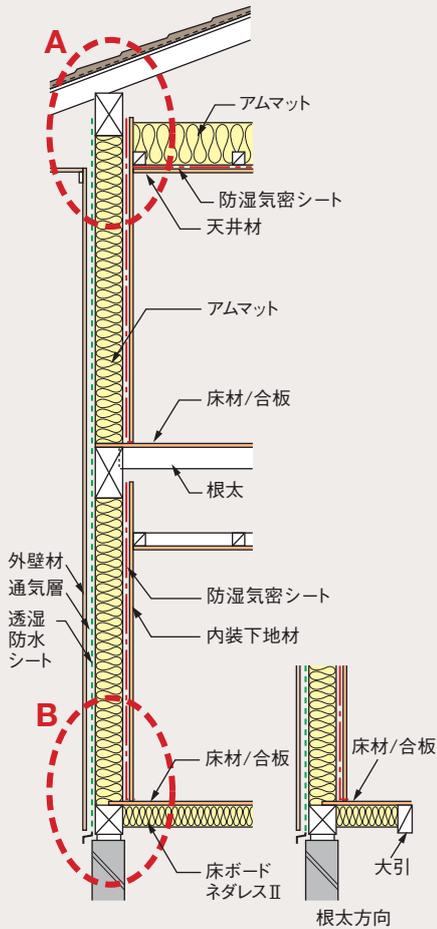
		気流止め位置	気流止めの方法			
外壁	小屋裏(天井)との取合い部		①	②	③	④
	床との取合い部		①	②	③	④
間仕切り壁	小屋裏(天井)との取合い部		①	②	③	
	床との取合い部		①	②	③	

代表的な施工方法 / 充填断熱工法

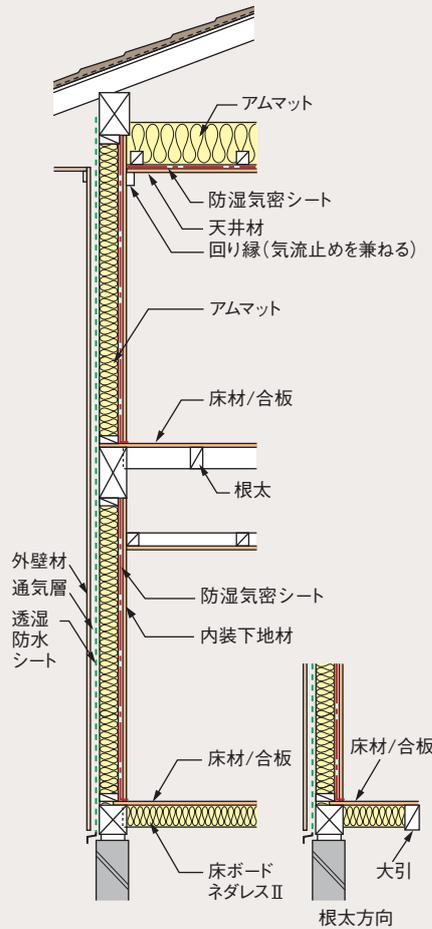
① 床下地合板や内装下地ボード等の面材による方法

- 小屋裏(天井)との取合い部: **防湿気密シート+内装下地ボードによる気流止め**
- 床との取合い部: **床下地合板による気流止め**

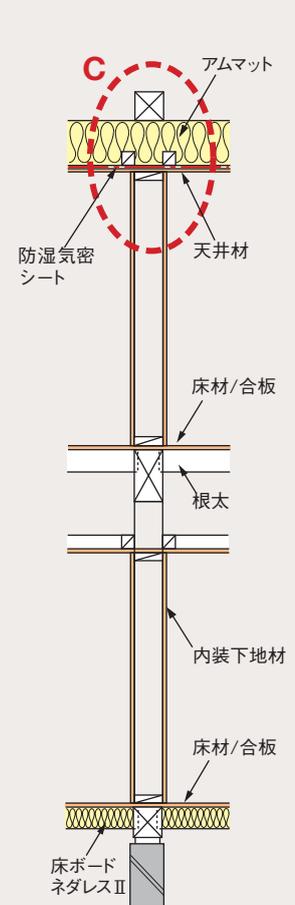
外壁(大壁)の場合



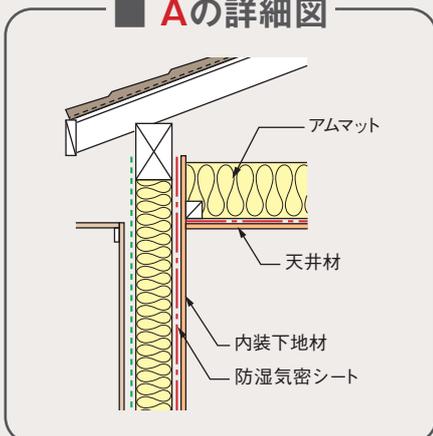
外壁(真壁)の場合



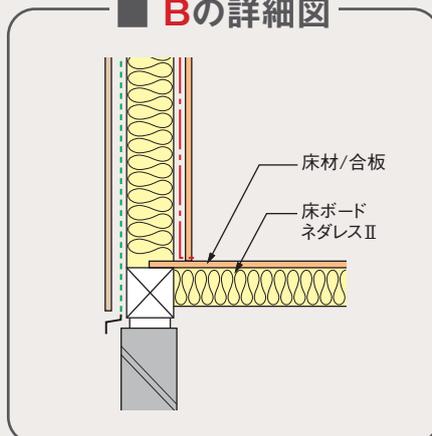
間仕切り壁(非耐力壁)



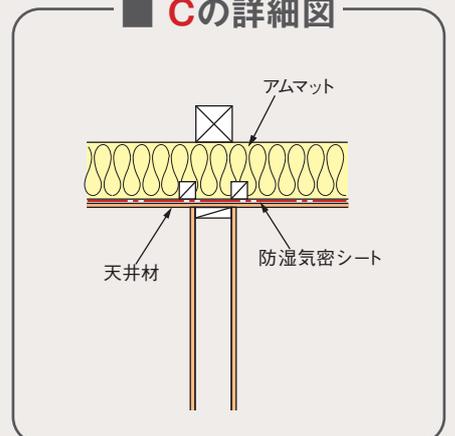
■ Aの詳細図



■ Bの詳細図



■ Cの詳細図

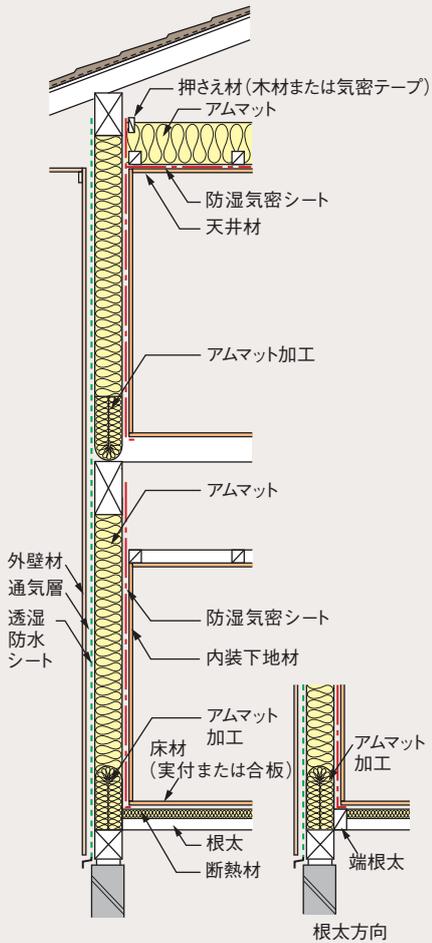


* 床ボードネダレスIIは受注生産品です。

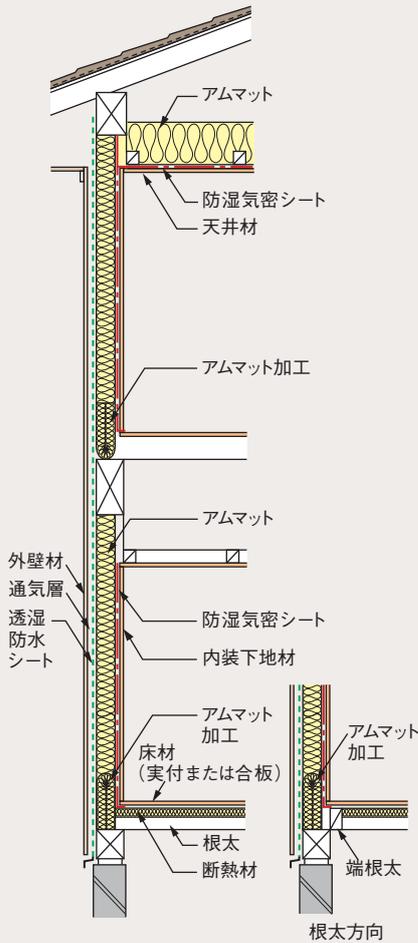
② アムマットによる気流止め

- 小屋裏(天井)との取合い部: **アムマット付属防湿フィルムのみによる気流止め** (せっこうボードで押さえられない部分はジョイント部に気密テープ処理)
- 床との取合い部: **加工マット材による気流止め**

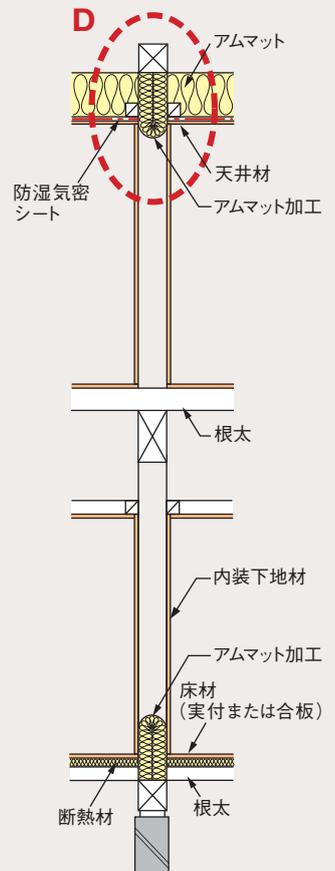
外壁(大壁)の場合



外壁(真壁)の場合



間仕切り壁(非耐力壁)

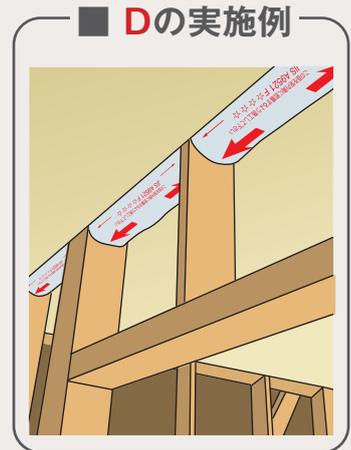


■ 間仕切り壁(天井)の施工



付属防湿フィルムが室内側になるようにU字に折り曲げたものを充填します。

■ 間仕切り壁(床)の施工

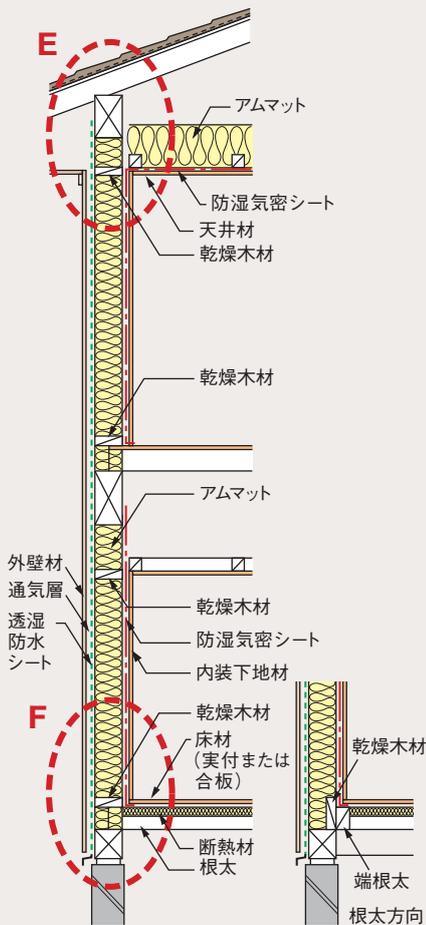


代表的な施工方法 / 充填断熱工法

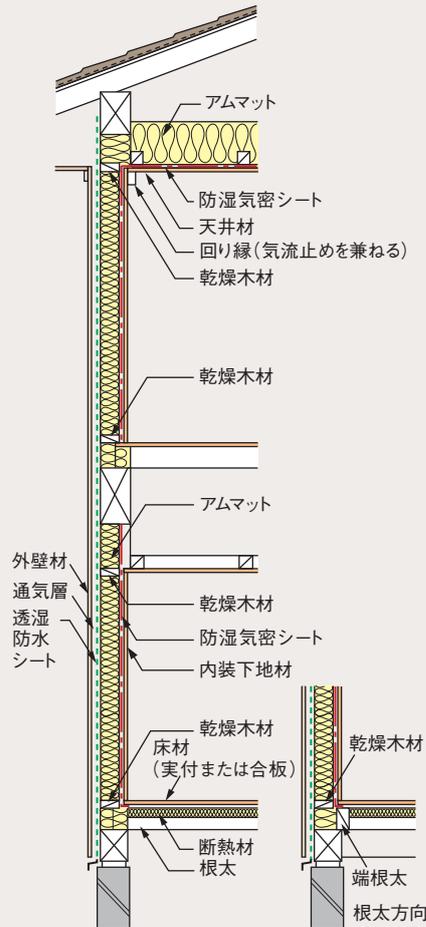
③ 乾燥木材による方法

- 小屋裏(天井)との取合い部: 乾燥木材による気流止め
- 床との取合い部: 乾燥木材による気流止め

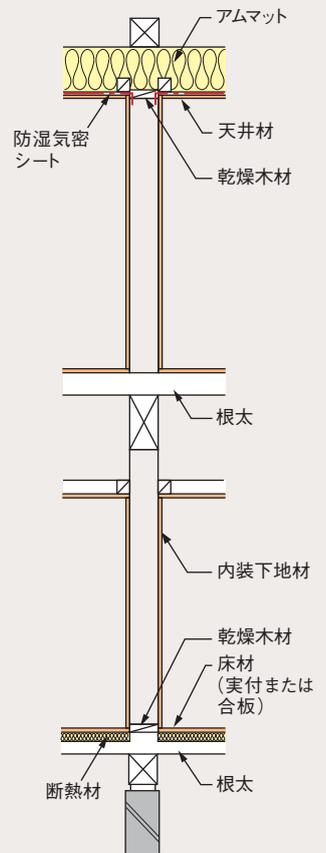
外壁(大壁)の場合



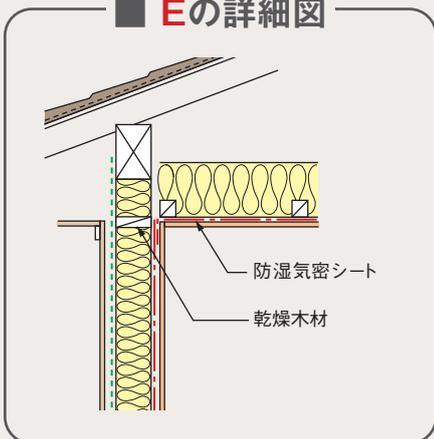
外壁(真壁)の場合



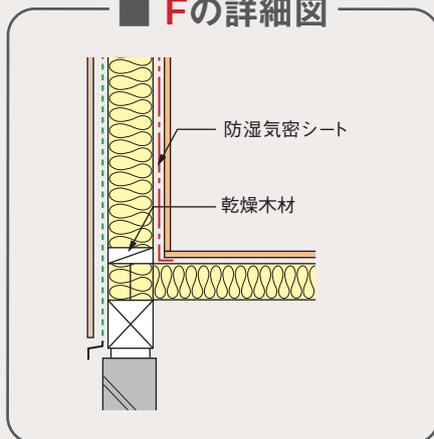
間仕切り壁(非耐力壁)



■ Eの詳細図



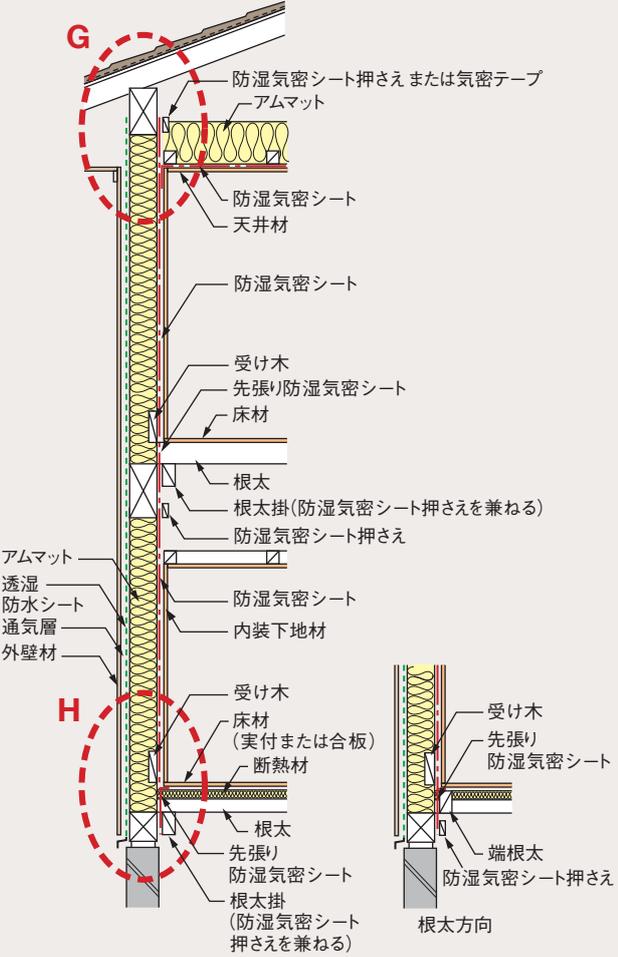
■ Fの詳細図



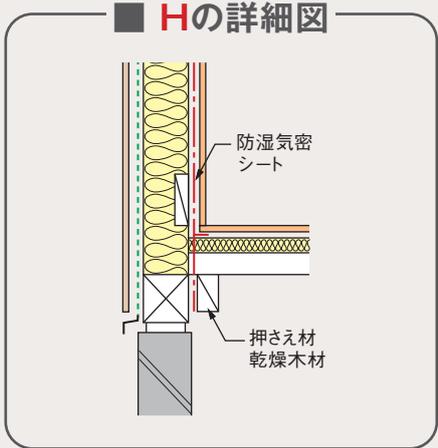
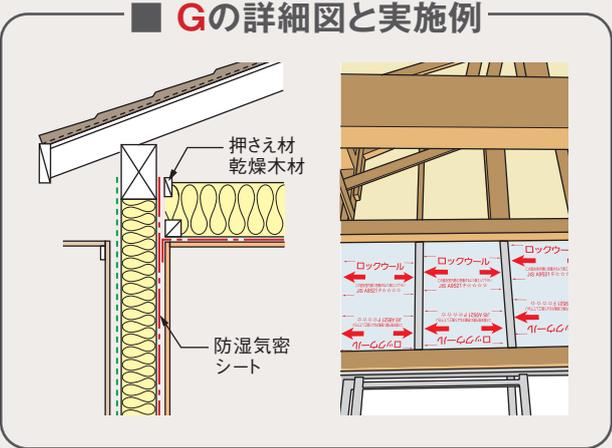
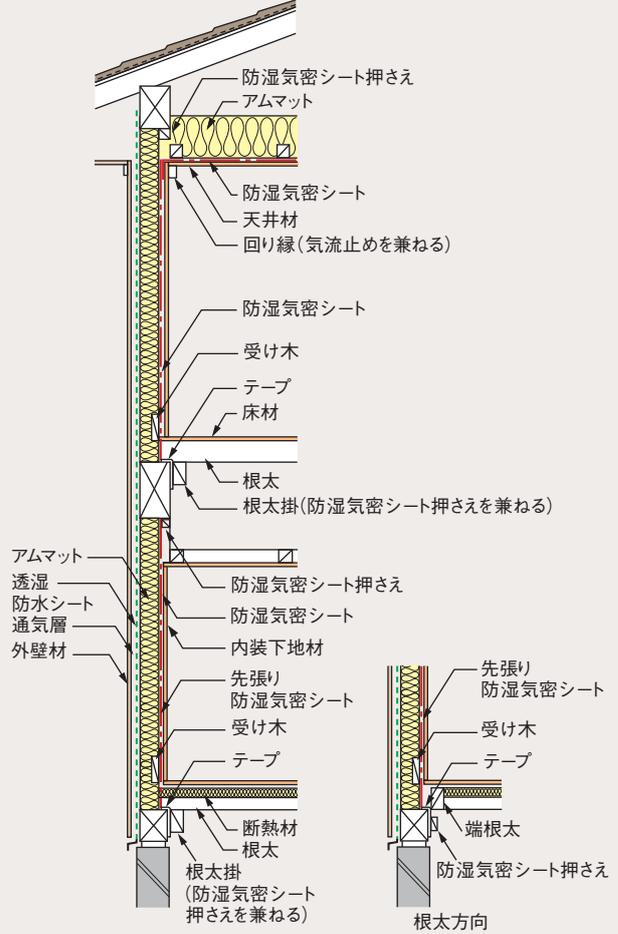
④ 防湿気密シートと押さえ材等による気流止め

- 小屋裏(天井)との取合い部: 防湿気密シートと押さえ材または気密テープによる気流止め
- 床との取合い部: 防湿気密シートと受け木による気流止め

外壁(大壁)の場合



外壁(真壁)の場合



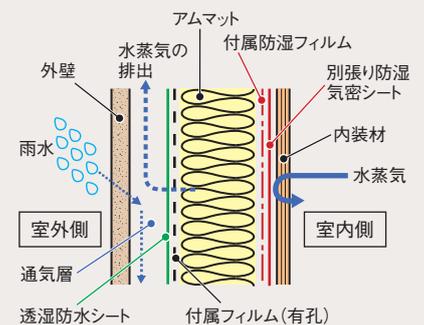
防露性能の確保に関する配慮事項

平成25年省エネルギー基準では、P.63の「断熱材等の施工に関する基準」にもある様に、断熱された壁体の防露性能を確保するためには、断熱層の室内側には透湿性の少ない防湿性能を有する材・層を設け、断熱層の室外側は透湿性・防風性・防水性を有する材・層を設け、その外側に通気層等の措置を講じることが基本となっており、「防湿層」・「防風層」と「通気層」の設置が定められています。

断熱壁体の構成

断熱壁体は断熱材の他に①防湿層（別張りの防湿気密シート）、②防風層（透湿防水シート）、③通気層を設置することが基本構成となっています。それぞれの役割を下記に示します。

①防湿層	室内側には、水蒸気を通しにくい透湿抵抗の高い防湿層を設置し（例：防湿気密シート）、室内側で発生した水蒸気を壁体内に可能な限り侵入させないようにします。
②防風層	柱の室外側には、透湿性が高く壁体内に侵入した水蒸気を通気層に排出する防風層を設置します。防風層は一方で、外壁側から侵入した雨水を壁体内に侵入させない機能も重要であり、室内側からの湿気を排出し、室外側からの水滴は浸入させない「透湿防水シート」を使用します。元々は風の侵入を防ぐ意味もあり、防風層と呼ばれています。
③通気層	通気層は防風層と外壁の間に位置し、室内側から排出された水蒸気を上部に（主に軒裏から）排出する役目を果たします。通気胴縁を設置し通気層を確保するのが一般的です。



①防湿材

- JIS A 6930に定める住宅用プラスチック系防湿フィルム又はこれと同等の防湿性を有するもの
 - JIS A 6930以外の防湿材
- ※別途防湿材を施工する方法と付属防湿層付繊維系断熱材があります。

②防風材

一般的には透湿防水シート、合板、火山性ガラス質複層板、MDF、OSB、付属防湿層付き断熱材の外気側の外被

アムマット プレミアム(P.9)の付属防湿シートなら①防湿材の要件を満たします。

【防湿層を省略できる要件】

- 地域区分が8地域である場合
- コンクリート躯体又は土塗壁の外側に断熱層がある場合
- 床断熱において、断熱材下側が床下に露出する場合又は断熱層下側が湿気の排出を妨げない構成となっている場合
- 透湿抵抗比が規定の値以上である場合
- 上記a.からd.までに掲げるものと同等以上の結露の発生防止に有効な措置が講じられていることが確かめられた場合

【通気層を省略できる要件】

- 鉄筋コンクリート造等であるなど躯体の耐久性能を損なう恐れのない場合
- 地域区分が3地域から7地域までで、かつ、防湿層が $0.082[\text{m}^2 \cdot \text{s} \cdot \text{Pa} / \text{ng}]$ ($170[\text{m}^2 \cdot \text{h} \cdot \text{mmHg} / \text{g}]$)以上の透湿抵抗である場合→該当する防湿材：住宅用プラスチック系防湿フィルム（JIS A 6930）A種
- 地域区分が3地域から7地域までで、かつ、断熱層の外側に軽量気泡コンクリート（JIS A 5416（ALCパネル）に規定するもの）またはこれと同等以上の断熱性及び吸湿性を有する材料を用いる場合、かつ、防湿層が $0.019[\text{m}^2 \cdot \text{s} \cdot \text{Pa} / \text{ng}]$ ($40[\text{m}^2 \cdot \text{h} \cdot \text{mmHg} / \text{g}]$)以上の透湿抵抗である場合、またはこれと同等以上の措置を講ずる場合
- 地域区分が8地域である場合
- 透湿抵抗比が規定の値以上である場合
- 上記a.からe.までに掲げるものと同等以上の結露の発生防止に有効な措置が講じられていることが確かめられた場合

防湿層を省略できる透湿抵抗比の値

地域	1～3地域	4地域	5～7地域
屋根又は天井	6	4	3
その他の部位	5	3	2

通気層を省略できる透湿抵抗比の値

地域	1～3地域	4地域	5～7地域
屋根	6	4	3
外壁	5	3	2

■ 防湿層と通気層を「透湿抵抗比の計算で省略」できる要件

2009年(平成21年)の省エネルギー法改正において「透湿抵抗比」の考え方が示されました。透湿抵抗とは、材料ごとに定まる水蒸気の通りにくさを表しており、数値が高いものを室内側に配置する手法です。透湿抵抗比が規定値以上の壁体は、防湿層・通気層の省略要件となります。この防湿層・通気層の省略については積極的に推奨するものではなく、あくまでも部分的対応や断熱壁体の設計の自由度を向上するための措置です。平成25年省エネルギー基準でもこの考え方は継承されています。

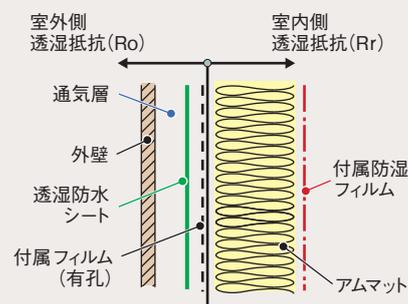
【透湿抵抗比による防露性能の確認の適用範囲】

構造	木造(軸組工法、枠組壁工法)、鉄骨造、鉄筋コンクリート造等。	壁体の 断面構成	断熱層が単一の材料で均質に構成される壁体。なお、断熱性能(熱伝導率)及び透湿性能(透湿率)の異なる複数の断熱材が同じ壁体内にある場合並びに断熱性能(熱伝導率)及び透湿性能(透湿率)が同じ複数の断熱材同士の間異なる材料がある場合等については、この評価方法は適用できない。
部位	外壁、天井、屋根、外気に接する床、小屋裏に接する断熱壁。なお、小屋裏換気を行っていない天井、基礎、床についてはこの評価方法は適用できない。		

【外壁(充填断熱)・屋根の場合】

外壁・屋根における透湿抵抗比は、断熱壁体の外側(アムマットの裏面を中心)として室内側の透湿抵抗の合計を室外側の透湿抵抗値の合計で除した値のことを言います。

$$\begin{aligned} \text{透湿抵抗比} &= \frac{\text{室内側の透湿抵抗 } R_r \text{ の総和}}{\text{室外側の透湿抵抗 } R_o \text{ の総和}} \\ &= \frac{(\text{せっこうボード} + \text{付属防湿フィルム} + \text{アムマット})}{(\text{付属フィルム(有孔)} + \text{耐力面材} + \text{透湿防水シート} + \text{通気層})} \end{aligned}$$



<透湿抵抗比の算定位置例>

- * せっこうボードについては、2×4構造のように横架材まで張り上げない限り室内側の透湿抵抗に算入することはできません。
- * 一般的な内装材仕上材は、室内側の透湿抵抗に算入することができません。

【天井断熱の場合】

天井に断熱材を施工した場合、室内で発生した湿気(水蒸気)は、天井の隙間・材料を介して、小屋裏空間に流れ小屋裏換気によって希釈・排出されます。温暖地(4地域以南)においては、透湿抵抗比が規定値以上となれば別張りの防湿気密シートを省略することができますが、その他の前提条件を満たす必要があります。前提条件を満たすことが困難な場合は別張りの防湿気密シートをご使用願います。

$$\text{天井の透湿抵抗比} = \frac{\text{室内側の透湿抵抗 } R_r \text{ (せっこうボード+付属防湿フィルム)} - \text{移流補正係数 } C_r \text{ (建設地域に応じた係数)}}{\text{外気側の透湿抵抗 } R_o \text{ (室外側付属防湿フィルム等)} + \text{外気側の透湿抵抗 } R'_o \text{ (建設地域に応じた係数)}}$$

天井の透湿抵抗比の適用条件

- 小屋裏換気口面積*が基準値を満たしていること
- 壁体内の気流止めが施工されていること
- アムマットが隙間なく施工されていること
- 天井野縁を格子組みとし内装材の周囲4辺を留め付けること
- アムマットを2枚以上重ねて施工していないこと

* 住宅性能表示制度の劣化対策等級又は住宅金融支援機構標準仕様書に対する基準値を満たす必要があります。

防露性能の確保に関する配慮事項

各種材料の透湿率・透湿比抵抗・透湿抵抗

断熱材・土壁、コンクリート等	材料名	透湿率		透湿比抵抗		厚さ [mm]	透湿抵抗 (=透湿比抵抗×厚さ[m])		備考
		[ng/(m・s・Pa)]	[g/(m・h・mmHg)]	[m・s・Pa/ng]	[m・h・mmHg/g]		[m ² ・s・Pa/ng]	[m ² ・h・mmHg/g]	
	ロックウール	170	0.0816	0.0059	12.3	100	0.0006	1.23	
	セルローズファイバー	155	0.0744	0.0065	13.4	100	0.0006	1.34	
	A種ビーズ法ポリスチレンフォーム 3号	6.3	0.0030	0.1600	330	25	0.0040	8.33	JIS A 9511:2006R*1
	A種押出法ポリスチレンフォーム 1種b、2種a・b、3種a・b(スキンなし)	3.6	0.0017	0.2800	570	25	0.0069	14.4	JIS A 9511:2006R*1
	A種フェノールフォーム 1種1・2号	1.5	0.0007	0.6700	1400	25	0.0170	35	JIS A 9511:2006R*1
	A種フェノールフォーム 2種1・2・3号、3種1号	3.6	0.0017	0.2800	570	25	0.0069	14.4	JIS A 9511:2006R*1
	吹付け硬質ウレタンフォーム A種3	31.7	0.0152	0.0315	65.7	25	0.0008	1.64	
	土壁	20.7	0.0099	0.0483	101	100	0.0048	10.1	
	ケイ酸カルシウム板	52.1	0.0250	0.0192	40	24.7	0.0005	0.988	
	コンクリート	2.98	0.0014	0.3360	699	100	0.0336	69.9	
	ALC	37.9	0.0182	0.0264	55.0	100	0.0026	5.50	表面処理なし
木材、ボード類	合板	1.11	0.0005	0.9010	1880	12	0.0110	23	
	せっこうボード*2	39.7	0.0191	0.0252	52.5	12	0.0003	0.63	
	OSB	0.594	0.0003	1.6800	3510	12	0.0200	42	
	MDF	3.96	0.0019	0.2530	526	12	0.0030	6.3	
	軟質繊維板	18.8	0.0090	0.0532	111	12	0.0064	1.3	
	木材	4.00	0.0019	0.2500	521	20	0.0050	10	
	モルタル 2210kg/m ³ *3	1.62	0.0008	0.6170	1290	25	0.0150	32	
	しっくい	52.1	0.0250	0.0192	40.0	12	0.0002	0.48	
	コンクリートブロック	7.7	0.0037	0.1300	270	200	0.0260	54	
	窯業系サイディング	2.1	0.0010	0.4800	1000	12	0.0058	12	塗装なし

* 該当する厚さの記載がない場合は、材料厚さを透湿率で除し、透湿抵抗を直接求めるが、安全側の値(外気側透湿抵抗の場合は当該厚さより大きい値、室内側透湿抵抗の場合は小さい値)を使用する。
 * 外装材表面の塗装、内装仕上げ材(ビニルクロスなど)の透湿抵抗は算入できない。
 *1 透湿抵抗は、厚さ25mm当たりの透湿係数[ng/(m²・s・Pa)]の逆数を求め、有効数字となるよう四捨五入した数値。透湿率は、厚さ25mm当たりの透湿係数[ng/(m²・s・Pa)]に0.025mを乗じて有効数字2桁となるよう四捨五入した数値。 *2 せっこうボード、壁紙などの内装仕上げ材は横架材まで張上げない限り、室内側透湿抵抗に加味することは出来ない。 *3 モルタルは、水セメント比や割合によって値が異なるため、使用する材料の確認が必要である。

透湿抵抗 = 「材料の厚さ(単位:[m])」 ÷ 「透湿率(単位:[ng/(m・s・Pa)])」 = 「透湿比抵抗(単位:[m・s・Pa/ng])」 × 「材料の厚さ(単位:[m])」

防湿気密シート・透湿防水シート・通気層の透湿抵抗

材料名	透湿抵抗		備考
	[m・s・Pa/ng]	[m・h・mmHg/g]	
防湿フィルム材質15μm以上のもの	0.0290	60	—
住宅用プラスチック系(50μm以上)防湿フィルムA種	0.0820	170.8	JIS A 6930
住宅用プラスチック系(100μm以上)防湿フィルムB種	0.1440	300.0	JIS A 6930
室外側付属フィルム(有孔)11μm	0.0039	8.12	弊社設計値*5
透湿防水シート	0.0002	0.42	JIS A 6111
通気層+外装材(カテゴリⅠ)*4	0.0009	1.88	—
通気層+外装材(カテゴリⅡ)*4	0.0017	3.54	—
通気層+外装材(カテゴリⅢ)*4	0.0026	5.42	—

【通気層の分類】

外壁	カテゴリⅠ …通気層	厚さ18mm以上
	カテゴリⅡ …通気層	厚さ18mm以上 (通気経路上に障害物がある場合)
	通気層	厚さ9mm以上
屋根	カテゴリⅢ …通気層	厚さ9mm以上 (通気経路上に障害物がある場合)
	カテゴリⅡ …通気層	厚さ18mm以上
	カテゴリⅢ …通気層	厚さ9mm以上

* 「通気経路上に障害物がある場合」とは、防火上の通気役物や繊維系断熱材を充填した際の復元厚により通気層が、狭まって通気抵抗が増加する場合等を意味する。

* 上述したカテゴリに該当しない場合は、別の評価方法に基づき算出することも可能である。
 * 通気層上下端部に取付ける通気水切や防虫ネット等については障害物として扱わずに無視できる。

*4 通気層の分類は右記をご参照ください。
 *5 弊社設計値の詳細はホームページのQ&Aを参照ください。

単位の換算

透湿抵抗の単位は、工学単位[m²・h・mmHg/g]とSI単位[m²・s・Pa/ng]があり、これらの間には次の関係式が成立します。

$$\text{SI単位 [m}^2\cdot\text{s}\cdot\text{Pa/ng]} = \text{工学単位 [m}^2\cdot\text{h}\cdot\text{mmHg/g]} \times 0.00048$$

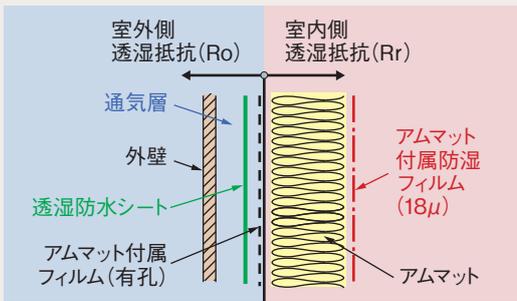
$$\text{工学単位 [m}^2\cdot\text{h}\cdot\text{mmHg/g]} = \text{SI単位 [m}^2\cdot\text{s}\cdot\text{Pa/ng]} \div 0.00048$$

* 本カタログではSI単位[m²・s・Pa/ng]を中心に使用しています。

外壁における透湿抵抗比（通気層がある構造）

*アムマットの付属防湿フィルム(18μ)の使用例です。

■ 耐力面材を使用しない場合

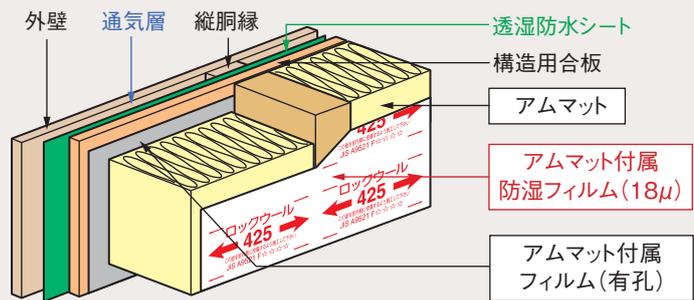
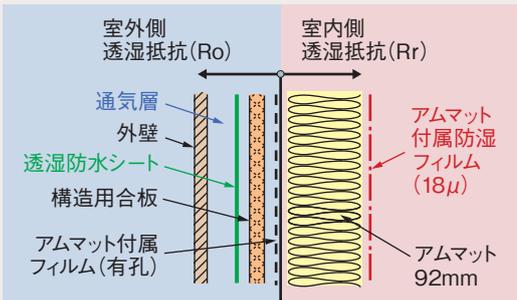


SI単位: [m²・s・Pa/ng]

室外側	透湿抵抗Ro	室内側	透湿抵抗Rr	透湿抵抗比
付属フィルム(有孔)	0.0039	付属防湿フィルム(18μ)	0.0290	$\frac{0.0295}{0.0058} = 5.1$
構造用面材	—	アムマット (92mm)	0.0005	
透湿防水シート	0.0002			
通気層18mm (障害物あり) +外装	0.0017			
合計	0.0058	合計	0.0295	判定 ◎

$$\text{透湿抵抗比} = \frac{\text{室内側の透湿抵抗 Rr の総和}}{\text{室外側の透湿抵抗 Ro の総和}}$$

■ 耐力面材を使用する場合



■ 構造用合板9mm使用例



SI単位: [m²・s・Pa/ng]

室外側	透湿抵抗Ro	室内側	透湿抵抗Rr	透湿抵抗比
付属フィルム(有孔)	0.0039	付属防湿フィルム(18μ)	0.0290	$\frac{0.0295}{0.0139} = 2.1$
合板9mm	0.0081	アムマット (92mm)	0.0005	
透湿防水シート	0.0002			
通気層18mm (障害物あり) +外装材	0.0017			
合計	0.0139	合計	0.0295	判定 ◎

■ 構造用合板12mm使用例



SI単位: [m²・s・Pa/ng]

室外側	透湿抵抗Ro	室内側	透湿抵抗Rr	透湿抵抗比
付属フィルム(有孔)	0.0039	付属防湿フィルム(18μ)	0.0290	$\frac{0.0295}{0.0166} = 1.8$
合板12mm	0.0108	アムマット (92mm)	0.0005	
透湿防水シート	0.0002			
通気層18mm (障害物あり) +外装	0.0017			
合計	0.0166	合計	0.0295	判定 ×

備考:判定が×になる場合はアムマット プレミアムをご使用下さい。

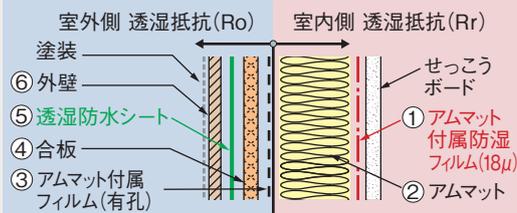
防露性能の確保に関する配慮事項

外壁における透湿抵抗比（通気層がない構造）

*アムマットの付属防湿フィルム(18μ)の使用例です。

■ 凡例 アムマットの付属防湿フィルム(18μ)を使用の計算をしています

SI単位:[m²・s・Pa/ng]



通気層のない外壁仕様は通常の通気層のある透湿抵抗の計算と異なります。
 $(①+②) \div (③+④+⑤+⑥)$
 上記透湿抵抗の計算がクリアされていても通気層の省略には十分な検討が必要です。

透湿抵抗比

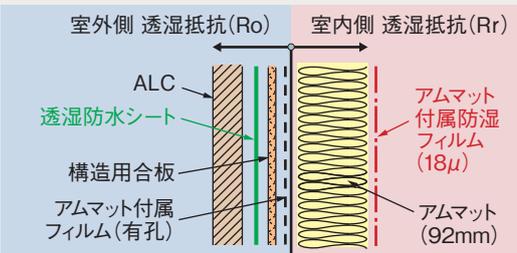
判定



備考:判定が×になる場合はアムマット プレミアムをご使用下さい。モルタル等の透湿抵抗は各メーカーにご確認下さい。

■ ALC50mm+構造用合板9mm使用例

SI単位:[m²・s・Pa/ng]



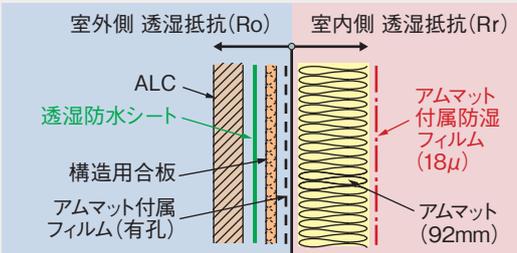
室外側	透湿抵抗Ro	室内側	透湿抵抗Rr	透湿抵抗比
付属フィルム(有孔)	0.0039	付属防湿フィルム(18μ)	0.0290	$\frac{0.0295}{0.0135} = 2.2$
合板9mm	0.0081	アムマット(92mm)	0.0005	
透湿防水シート	0.0002			
通気層なし	—			
外装(ALC)50mm	0.0013			
合計	0.0135	合計	0.0295	$2.2 \geq 2$ (5~7地域使用可)

判定



■ ALC50mm+構造用合板12mm使用例

SI単位:[m²・s・Pa/ng]



室外側	透湿抵抗Ro	室内側	透湿抵抗Rr	透湿抵抗比
付属フィルム(有孔)	0.0039	付属防湿フィルム(18μ)	0.0290	$\frac{0.0295}{0.0162} = 1.8$
合板12mm	0.0108	アムマット(92mm)	0.0005	
透湿防水シート	0.0002			
通気層なし	—			
外装(ALC)50mm	0.0013			
合計	0.0162	合計	0.0295	$1.8 \leq 2$ (全地域使用不可)

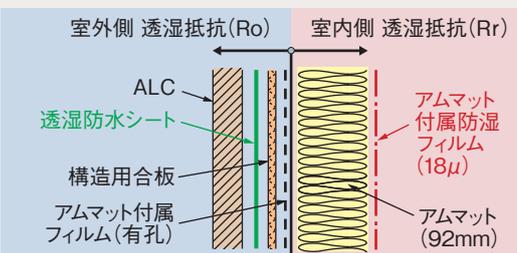
判定



備考:判定が×になる場合はアムマット プレミアムをご使用下さい。構造用面材の透湿抵抗は各メーカーにご確認下さい。

■ ALC40mm+構造用合板9mm使用例

SI単位:[m²・s・Pa/ng]



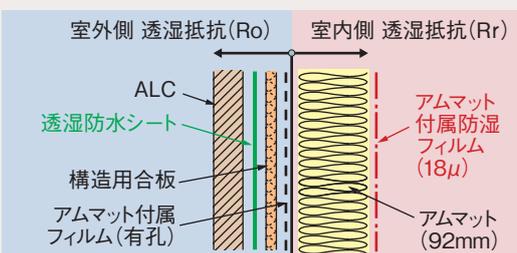
室外側	透湿抵抗Ro	室内側	透湿抵抗Rr	透湿抵抗比
付属フィルム(有孔)	0.0039	付属防湿フィルム(18μ)	0.0290	$\frac{0.0295}{0.0133} = 2.2$
合板9mm	0.0081	アムマット(92mm)	0.0005	
透湿防水シート	0.0002			
通気層なし	—			
外装(ALC)40mm	0.0011			
合計	0.0133	合計	0.0295	$2.2 \geq 2$ (5~7地域使用可)

判定



■ ALC40mm+構造用合板12mm使用例

SI単位:[m²・s・Pa/ng]



室外側	透湿抵抗Ro	室内側	透湿抵抗Rr	透湿抵抗比
付属フィルム(有孔)	0.0039	付属防湿フィルム(18μ)	0.0290	$\frac{0.0295}{0.0160} = 1.8$
合板12mm	0.0108	アムマット(92mm)	0.0005	
透湿防水シート	0.0002			
通気層なし	—			
外装(ALC)40mm	0.0011			
合計	0.0160	合計	0.0295	$1.8 \leq 2$ (全地域使用不可)

判定



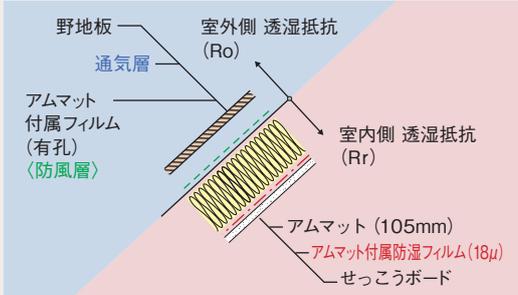
備考:判定が×になる場合はアムマット プレミアムをご使用下さい。

屋根における透湿抵抗比

*アムマットの付属防湿フィルム(18 μ)の使用例です。

■ 屋根の場合

SI単位: [m²・s・Pa/ng]



室外側	透湿抵抗Ro	室内側	透湿抵抗Rr	透湿抵抗比
付属フィルム(有孔)	0.0039	付属防湿フィルム(18 μ)	0.0290	$\frac{0.0296}{0.0056} = 5.3$
面材	—	アムマット(105mm)	0.0006	5.3 \geq 5
通気層18mm(障害物あり)+外装材	0.0017			(全地域使用可)
合計	0.0056	合計	0.0296	判定

* 施工の注意点
アムマット付属フィルム(有孔)側には通気層と防風層の確保が必要です。

$$\text{透湿抵抗比} = \frac{\text{室内側の透湿抵抗 } R_r \text{ の総和}}{\text{室外側の透湿抵抗 } R_o \text{ の総和}}$$

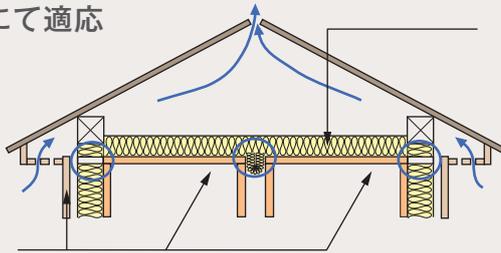
天井における透湿抵抗比

*アムマットの付属防湿フィルム(18 μ)の使用例です。

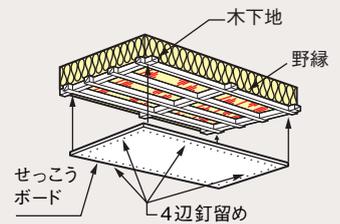
以下の条件を満足する場合、透湿抵抗比の考え方を適用し防湿層を省略することができますが、寒い地域におきましては、別張りの防湿気密シート(防湿層)をご使用することをお勧めいたします。

■ 4地域以南にて適応

【条件1】
・気流止めを施工する
・透湿抵抗比を活用する



【条件2】
想定以上の天井隙間からの移流による水蒸気の浸入を防止する為
・野縁を格子組み
・せっこうボードの端部が野縁(下地)にとめつけるよう施工



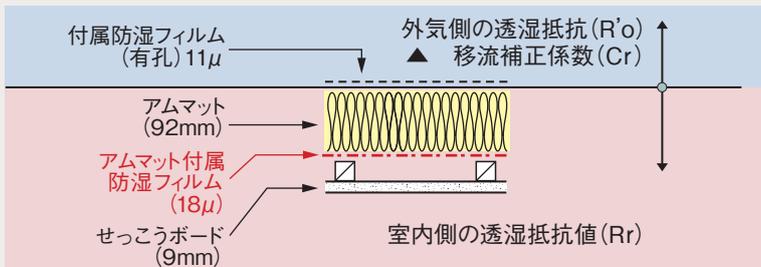
● 天井の透湿抵抗比を算出する計算式

$$\text{天井の透湿抵抗比} = \frac{\text{室内側の透湿抵抗 } R_r \text{ (断熱材等+付属防湿フィルム)} \times \text{移流補正係数 } C_r^* \text{ (建設地域に応じた係数)}}{\text{外気側の透湿抵抗 } R_o + \text{外気側の透湿抵抗 } R_o' \text{ (建設地域に応じた係数)}}$$

● 天井断熱における外気側透湿抵抗と移流補正係数

SI単位: [m ² ・s・Pa/ng]	1~3地域	4地域	5~7地域
外気側透湿抵抗 R'o	2.16 \times 10 ⁻⁴	1.59 \times 10 ⁻⁴	1.59 \times 10 ⁻⁴
移流補正係数 Cr*	2.75 \times 10 ⁻²	8.96 \times 10 ⁻³	1.44 \times 10 ⁻³

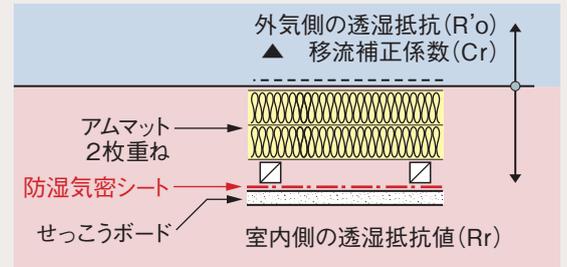
■ 5~7地域の場合



SI単位: [m²・s・Pa/ng]

外気側	透湿抵抗Ro	室内側	透湿抵抗Rr	透湿抵抗比
付属フィルム(有孔)	0.0039	付属防湿フィルム(18 μ)	0.0290	$\frac{0.028375}{0.004059} = 7.0$
外気側透湿抵抗 R'o	0.000159	アムマット(92mm)	0.0005	
		せっこうボード	0.000315	
		移流補正係数 Cr*	0.00144	
合計	0.004059	合計	0.028375	判定

■ 注意事項



※ なお、付属防湿フィルム付アムマットを2枚以上重ねて施工する場合は別張りの防湿気密シートが必要になります。

!

断熱に関する数字

材料の熱性能を表す主な用語はλ(ラムダ)・R(アール)・U(ユー)の3種です。これらは相互に関連があり、断熱設計に頻りに登場する基本用語です。

ラムダ
λ
熱伝導率

材料の熱の伝わりやすさ

単位：W / (m・K)

〈例〉ロックウール断熱材(マット)
λ = 0.038

1つの材料

〈出展：住宅省エネルギー技術講習会 設計者講習テキスト〉

アール
R
熱抵抗

材料の熱の伝わりにくさ

単位：m²・K / W

$$R = \frac{d(\text{厚さ})}{\lambda(\text{熱伝導率})}$$

1つの材料

ユー
U
熱貫流率

断熱性能を表す値

単位：W / (m²・K)

$$U = \frac{1}{R(\text{熱抵抗値})}$$

部位ごと
(複数の材料)

*部面積1m²の部分を通過する熱量。
単一材料だけでなく複合材料も表示が可能。

材料種別の熱伝導率

分類	建材名称	λ[W/(m・K)]	
金属	銅	55	
	アルミニウム	210	
	銅	370	
	ステンレス鋼	15	
岩石・土壌	岩石	3.1	
	土壌	1.0	
材料	コンクリート	1.6	
	軽量コンクリート(軽量1種)	0.8	
	軽量コンクリート(軽量2種)	0.5	
	軽量気泡コンクリートパネル(ALCパネル)	0.19	
	セメント・モルタル	1.5	
	押出成形セメント板	0.40	
	非木質系壁材・下地材		
せっこうプラスター	0.60		
漆喰	0.74		
土壁	0.69		
ガラス	1.0		
アクリルガラス	0.2		
タイル	1.3		
れんが	0.64		
ロックウール化粧吸音板	0.06		
火山性ガラス質複層板	0.13		
窯業系サイディング	0.35		
壁材・下地材	天然木材	0.12	
	合板	0.16	
	木毛セメント板	0.13	
	木片セメント板	0.15	
	ハードファイバーボード(ハードボード)	0.17	
	ミディアムデンシティファイバーボード(MDF)	0.12	
床材	ビニル系床材	0.19	
	FRP	0.26	
	アスファルト類	0.11	
	畳	0.08	
断熱材等	吹込み用グラスウール	13K、18K	0.052
		30K、35K	0.040
	吹込み用ロックウール断熱材	25K	0.047
		65K	0.039
	吹込み用セルローズファイバー	25K	0.040
	45K、55K	0.040	
壁材・下地材	非木質系	GB-R、GB-D、GB-L、GB-NC	0.22
		せっこうボード	
		GB-S、GB-F	0.24
		GB-R-H、GB-S-H、GB-D-H	0.36
	0.8 ケイ酸カルシウム板	0.18	
	1.0 ケイ酸カルシウム板	0.24	

分類	建材名称	λ[W/(m・K)]	
壁材・下地材	木質系		
	タタミボード	0.056	
	A級インシュレーションボード	0.058	
	シーリングボード	0.067	
	パーティクルボード	0.167	
床材	稲わら畳床	0.07	
	建材畳床(K、N型、II型、III型)	0.05	
グラスウール断熱材	通常品	10-50	0.050
		10-49	0.049
		10-48	0.048
		12-45	0.045
		12-44	0.044
		16-45	0.045
		16-44	0.044
		20-42	0.042
		20-41	0.041
		20-40	0.040
		24-38	0.038
		32-36	0.036
		40-36	0.036
		48-35	0.035
		64-35	0.035
	80-33	0.033	
	96-33	0.033	
	高性能品	HG10-47	0.047
		HG10-46	0.046
		HG10-45	0.045
		HG10-44	0.044
		HG10-43	0.043
		HG12-43	0.043
		HG12-42	0.042
		HG12-41	0.041
		HG14-38	0.038
		HG14-37	0.037
		HG16-38	0.038
		HG16-37	0.037
		HG16-36	0.036
		HG20-38	0.038
HG20-37		0.037	
HG20-36		0.036	
HG20-35	0.035		
HG20-34	0.034		
HG24-36	0.036		
HG24-35	0.035		

分類	建材名称	λ[W/(m・K)]	
グラスウール断熱材	高性能品	HG24-34	0.034
		HG24-33	0.033
		HG28-35	0.035
		HG28-34	0.034
		HG28-33	0.033
		HG32-35	0.035
		HG32-34	0.034
		HG32-33	0.033
		HG36-34	0.034
		HG36-33	0.033
		HG36-32	0.032
		HG36-31	0.031
		HG38-34	0.034
		HG38-33	0.033
		HG38-32	0.032
		HG38-31	0.031
		HG40-34	0.034
		HG40-33	0.033
		HG40-32	0.032
		HG48-33	0.033
HG48-32	0.032		
HG48-31	0.031		
ロックウール断熱材	LA	0.045	
	LB	0.043	
	LC	0.041	
	LD	0.039	
	MA	0.038	
	MB	0.037	
	MC	0.036	
	HA	0.036	
HB	0.035		
HC	0.034		
ファイバー断熱材	インシュレーション		
	ファイバーマット	0.040	
	ファイバーボード	0.052	
フォーム断熱材	ビーズ法ポリスチレン		
	1号	0.034	
	2号	0.036	
	3号	0.038	
	4号	0.041	

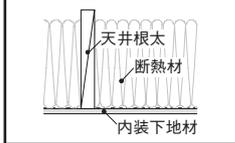
〈出典：住宅省エネルギー技術 設計者講習テキスト〉

■ 熱貫流率(U値)計算シート

例：枠組壁工法[天井・外壁・床]

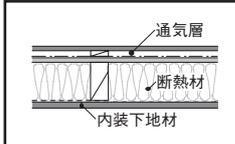
一般社団法人 住宅性能評価・表示協会の住宅の外皮平均熱貫流率計算書を使用して計算しています。

【部位】天井：200mm 【工法の種類】天井根太間に断熱する場合



	熱橋面積比		一般部	熱橋部
	熱伝導率λ [W/(m·K)]	厚さd [m]	d/λ [m²·K/W]	
熱伝達抵抗 Ri	—	—	0.090	0.090
住宅用ロックウール(アムマット)MA	0.038	0.100	2.632	
住宅用ロックウール(アムマット)MA	0.038	0.100	2.632	
天然木材	0.120	0.200		1.667
せっこうボード	0.220	0.010	0.043	0.043
熱伝達抵抗 Ro	—	—	0.090	0.090
熱貫流抵抗 ΣR=Σ(di/λi)			5.486	1.890
熱貫流率 Un=1/ΣR			0.182	0.529
平均熱貫流率 Ui=Σ(ain·Un)			0.231	

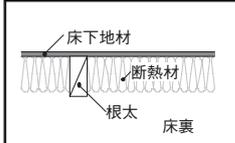
【部位】外壁：89mm 【工法の種類】たて枠間に断熱する場合



	熱橋面積比		一般部	熱橋部
	熱伝導率λ [W/(m·K)]	厚さd [m]	d/λ [m²·K/W]	
熱伝達抵抗 Ri	—	—	0.110	0.110
合板	0.160	0.009	0.056	0.056
住宅用ロックウール(アムマット)MA 92mm	0.038	0.089	2.342	
天然木材	0.120	0.089		0.742
せっこうボード	0.220	0.010	0.043	0.043
熱伝達抵抗 Ro	—	—	0.110	0.110
熱貫流抵抗 ΣR=Σ(di/λi)			2.662	1.061
熱貫流率 Un=1/ΣR			0.376	0.942
平均熱貫流率 Ui=Σ(ain·Un)			0.506	

※ツーバイシックス(2×6)工法で140mmのアムマットを使用しますと、同じ納まりで平均熱貫流率が0.347[m²·K/W]になります。

【部位】床：84(42×2枚)mm 【工法の種類】根太間に断熱する場合



	熱橋面積比		一般部	熱橋部
	熱伝導率λ [W/(m·K)]	厚さd [m]	d/λ [m²·K/W]	
熱伝達抵抗 Ri	—	—	0.150	0.150
合板	0.160	0.015	0.094	0.094
住宅用ロックウール(ボード)HA	0.036	0.084	2.333	
天然木材	0.120	0.080		0.667
熱伝達抵抗 Ro	—	—	0.150	0.150
熱貫流抵抗 ΣR=Σ(di/λi)			2.727	1.060
熱貫流率 Un=1/ΣR			0.367	0.943
平均熱貫流率 Ui=Σ(ain·Un)			0.442	

分類	建材名称			λ[W/(m·K)]
押出法ポリスチレンフォーム断熱材	1種	b	A	0.040
			B	0.038
			C	0.036
	2種	b	A	0.034
			B	0.032
			C	0.030
	3種	a	A	0.028
			B	0.026
			C	0.024
		b	A	0.028
B			0.026	
C			0.024	
硬質ウレタンフォーム断熱材	1種	1号	0.023	
		2号	0.024	
		3号	0.027	
		4号	0.028	
ポリエチレンフォーム断熱材	1種	1号	0.042	
		2号	0.042	
	2種	0.038		
3種	0.034			
フェノールフォーム断熱材	1種	1号	AI, AII	0.022
			BI, BII	0.021
			CI, CII	0.020
			DI, DII	0.019
			EI, EII	0.018
			0.018	
	2種	2号	AI, AII	0.022
			BI, BII	0.021
			CI, CII	0.020
			DI, DII	0.019
			EI, EII	0.018
			0.018	
	3種	3号	AI, AII	0.022
			BI, BII	0.021
			CI, CII	0.020
			DI, DII	0.019
			EI, EII	0.018
			0.018	
2種	1号	AI, AII	0.036	
		2号	0.034	
		3号	0.028	
3種	1号	AI, AII	0.035	
吹付け硬質ウレタンフォーム断熱材	A種	1	0.034	
		2	0.034	
		3	0.040	

■ 熱貫流率(U値)計算シート 例:木造軸組構法[外壁・床]

JSBC(一般社団法人日本サステナブル建築協会)の補助ツールを使用して計算しています。

【部位】外壁:105mm 【工法の種類】柱・間柱間に断熱する場合

				断熱部(一般部)	熱橋部	熱貫流率U [W/(m ² ·K)] (四捨五入)
面積比率→				0.83	0.17	
分類	材料	厚さ [mm]	熱伝導率λ [W/(m·K)]	熱抵抗R [m ² ·K/W]	熱抵抗R [m ² ·K/W]	
外気側の表面熱抵抗	Ro(通気層:0.11)			○ 0.11	○ 0.11	
ロックウール断熱材	住宅用ロックウール(アムマット)MA	105.0	0.038	○ 2.763	× 0.000	
木質系壁材・下地材	天然木材	105.0	0.120	× 0.000	○ 0.875	
非木質系壁材・下地材	せつこうボード	12.5	0.220	○ 0.057	○ 0.057	
室内側の表面熱抵抗	Ri			○ 0.11	○ 0.11	
断面の厚さ[mm]				117.5	117.5	
熱抵抗の合計ΣR[m ² ·K/W]				3.040	1.152	
各断面の熱貫流率U[W/(m ² ·K)]				0.329	0.868	
熱貫流率U[W/(m ² ·K)]				0.4206		

【部位】外壁:100mm 【工法の種類】柱・間柱間に断熱する場合

				断熱部(一般部)	熱橋部	熱貫流率U [W/(m ² ·K)] (四捨五入)
面積比率→				0.83	0.17	
分類	材料	厚さ [mm]	熱伝導率λ [W/(m·K)]	熱抵抗R [m ² ·K/W]	熱抵抗R [m ² ·K/W]	
外気側の表面熱抵抗	Ro(通気層:0.11)			○ 0.11	○ 0.11	
ロックウール断熱材	住宅用ロックウール(アムマット)MA	100.0	0.038	○ 2.632	× 0.000	
木質系壁材・下地材	天然木材	100.0	0.120	× 0.000	○ 0.833	
室内側の表面熱抵抗	Ri			○ 0.11	○ 0.11	
断面の厚さ[mm]				100.0	100.0	
熱抵抗の合計ΣR[m ² ·K/W]				2.852	1.053	
各断面の熱貫流率U[W/(m ² ·K)]				0.351	0.949	
熱貫流率U[W/(m ² ·K)]				0.4525		

【部位】外壁:92mm 【工法の種類】柱・間柱間に断熱する場合

				断熱部(一般部)	熱橋部	熱貫流率U [W/(m ² ·K)] (四捨五入)
面積比率→				0.83	0.17	
分類	材料	厚さ [mm]	熱伝導率λ [W/(m·K)]	熱抵抗R [m ² ·K/W]	熱抵抗R [m ² ·K/W]	
外気側の表面熱抵抗	Ro(通気層:0.11)			○ 0.11	○ 0.11	
ロックウール断熱材	住宅用ロックウール(アムマット)MA	92.0	0.038	○ 2.421	× 0.000	
木質系壁材・下地材	天然木材	92.0	0.120	× 0.000	○ 0.767	
室内側の表面熱抵抗	Ri			○ 0.11	○ 0.11	
断面の厚さ[mm]				9.20	92.0	
熱抵抗の合計ΣR[m ² ·K/W]				2.641	0.987	
各断面の熱貫流率U[W/(m ² ·K)]				0.379	1.014	
熱貫流率U[W/(m ² ·K)]				0.4866		

【部位】外壁:100mm+50mm

【工法の種類】柱・間柱間に断熱+付加断熱(縦下地)する場合

				断熱部(一般部)	断熱部+熱橋部	熱橋部	熱貫流率U [W/(m ² ·K)] (四捨五入)	
面積比率→				0.79	0.04	0.13		0.303
分類	材料	厚さ [mm]	熱伝導率λ [W/(m·K)]	熱抵抗R [m ² ·K/W]	熱抵抗R [m ² ·K/W]	熱抵抗R [m ² ·K/W]	熱抵抗R [m ² ·K/W]	
外気側の表面熱抵抗	Ro(通気層:0.11)			○ 0.11	○ 0.11	○ 0.11	○ 0.11	
ロックウール断熱材	住宅用ロックウール(アムマット)MA	100.0	0.038	○ 2.632	× 0.000	○ 2.632	× 0.000	
木質系壁材・下地材	天然木材	100.0	0.120	× 0.000	○ 0.833	× 0.000	○ 0.833	
ロックウール断熱材	住宅用ロックウール(ボード)HA	50.0	0.036	○ 1.389	× 1.389	× 0.000	× 0.000	
木質系壁材・下地材	天然木材	50.0	0.120	× 0.000	× 0.000	○ 0.417	○ 0.417	
室内側の表面熱抵抗	Ri			○ 0.11	○ 0.11	○ 0.11	○ 0.11	
断面の厚さ[mm]				150.0	150.0	150.0	150.0	
熱抵抗の合計ΣR[m ² ·K/W]				4.240	2.442	3.268	1.470	
各断面の熱貫流率U[W/(m ² ·K)]				0.236	0.409	0.306	0.680	
熱貫流率U[W/(m ² ·K)]				0.3034				

【部位】床:80mm 【工法の種類】剛床工法

				断熱部(一般部)	熱橋部	熱貫流率U [W/(m ² ·K)] (四捨五入)
面積比率→				0.85	0.15	
分類	材料	厚さ [mm]	熱伝導率λ [W/(m·K)]	熱抵抗R [m ² ·K/W]	熱抵抗R [m ² ·K/W]	
外気側の表面熱抵抗	Ro(床下:0.15)			○ 0.15	○ 0.15	
木質系壁材・下地材	合板	24.0	0.160	○ 0.150	○ 0.150	
ロックウール断熱材	住宅用ロックウール(ボード)HA	80.0	0.036	○ 2.222	× 0.000	
木質系壁材・下地材	天然木材	80.0	0.120	× 0.000	○ 0.667	
室内側の表面熱抵抗	Ri			○ 0.15	○ 0.15	
断面の厚さ[mm]				104.0	104.0	
熱抵抗の合計ΣR[m ² ·K/W]				2.672	1.117	
各断面の熱貫流率U[W/(m ² ·K)]				0.374	0.896	
熱貫流率U[W/(m ² ·K)]				0.4524		

○:断熱部、及び熱橋部において、計算に使用する材料 ×:断熱部、及び熱橋部において、計算に使用しない材料

■ 熱貫流率(U値)計算シート 例:木造軸組構法[天井]

JSBC(一般社団法人 日本サステナブル建築協会)の補助ツールを使用して計算しています。

【部位】天井:154mm 【工法の種類】桁・梁間に断熱する場合

				断熱部(一般部)	熱橋部	熱貫流率U [W/(m ² ·K)] (四捨五入)
面積比率→				0.87	0.13	
分類	材料	厚さ [mm]	熱伝導率λ [W/(m·K)]	熱抵抗R [m ² ·K/W]		
外気側の表面熱抵抗	Ro(小屋裏:0.09)			○	0.09	
ロックウール断熱材	住宅用ロックウール(アムマット)MA	77.0	0.038	○	2.026	
ロックウール断熱材	住宅用ロックウール(アムマット)MA	77.0	0.038	○	2.026	
木質系壁材・下地材	天然木材	154.0	0.120	×	0.000	
非木質系壁材・下地材	せっこうボード	9.5	0.220	○	0.043	
室内側の表面熱抵抗	Ri			○	0.09	
断面の厚さ[mm]				163.5	163.5	
熱抵抗の合計ΣR[m ² ·K/W]				4.276	1.507	
各断面の熱貫流率U[W/(m ² ·K)]				0.234	0.664	
熱貫流率U[W/(m ² ·K)]				0.2898		

【部位】天井:154mm 【工法の種類】天井に断熱材を敷込む場合

				断熱部(一般部)		熱貫流率U [W/(m ² ·K)] (四捨五入)
面積比率→				1.00		
分類	材料	厚さ [mm]	熱伝導率λ [W/(m·K)]	熱抵抗R [m ² ·K/W]		
外気側の表面熱抵抗	Ro(小屋裏:0.09)			○	0.09	
ロックウール断熱材	住宅用ロックウール(アムマット)MA	77.0	0.038	○	2.026	
ロックウール断熱材	住宅用ロックウール(アムマット)MA	77.0	0.038	○	2.026	
非木質系壁材・下地材	せっこうボード	9.5	0.220	○	0.043	
室内側の表面熱抵抗	Ri			○	0.09	
断面の厚さ[mm]				163.5		
熱抵抗の合計ΣR[m ² ·K/W]				4.276		
各断面の熱貫流率U[W/(m ² ·K)]				0.234		
熱貫流率U[W/(m ² ·K)]				0.2339		

【部位】天井:105mm 【工法の種類】天井に断熱材を敷込む場合

				断熱部(一般部)		熱貫流率U [W/(m ² ·K)] (四捨五入)
面積比率→				1.00		
分類	材料	厚さ [mm]	熱伝導率λ [W/(m·K)]	熱抵抗R [m ² ·K/W]		
外気側の表面熱抵抗	Ro(小屋裏:0.09)			○	0.09	
ロックウール断熱材	住宅用ロックウール(アムマット)MA	105.0	0.038	○	2.763	
非木質系壁材・下地材	せっこうボード	9.5	0.220	○	0.043	
室内側の表面熱抵抗	Ri			○	0.09	
断面の厚さ[mm]				114.5		
熱抵抗の合計ΣR[m ² ·K/W]				2.986		
各断面の熱貫流率U[W/(m ² ·K)]				0.335		
熱貫流率U[W/(m ² ·K)]				0.3349		

【部位】天井:92mm 【工法の種類】天井に断熱材を敷込む場合

				断熱部(一般部)		熱貫流率U [W/(m ² ·K)] (四捨五入)
面積比率→				1.00		
分類	材料	厚さ [mm]	熱伝導率λ [W/(m·K)]	熱抵抗R [m ² ·K/W]		
外気側の表面熱抵抗	Ro(小屋裏:0.09)			○	0.09	
ロックウール断熱材	住宅用ロックウール(アムマット)MA	92.0	0.038	○	2.421	
非木質系壁材・下地材	せっこうボード	9.5	0.220	○	0.043	
室内側の表面熱抵抗	Ri			○	0.09	
断面の厚さ[mm]				101.5		
熱抵抗の合計ΣR[m ² ·K/W]				2.644		
各断面の熱貫流率U[W/(m ² ·K)]				0.378		
熱貫流率U[W/(m ² ·K)]				0.3782		

○:断熱部、及び熱橋部において、計算に使用する材料 ×:断熱部、及び熱橋部において、計算に使用しない材料

別表1 木造住宅 / 充填断熱工法の仕様例

部位	熱貫流率 [W/m ² ·K]	仕様の詳細	断面構成図	ロックウール断熱材の例	床・内装下地材
屋根	0.17	たる木間にRが7.5以上の断熱材(厚さ265ミリメートル以上)を充填し、かつ、Rが0.043以上の内装下地材を用いた断熱構造とする場合		RW 285	PB 9.5
	0.24	たる木間にRが5.2以上の断熱材(厚さ185ミリメートル以上)を充填し、かつ、Rが0.043以上の内装下地材を用いた断熱構造とする場合		RW 198	PB 9.5
天井	0.17	内装下地材の上面にRが5.7以上の断熱材を敷き込み、かつ、Rが0.043以上の内装下地材を用いた断熱構造とする場合		RW 217	PB 9.5
	0.24	内装下地材の上面にRが4.0以上の断熱材を敷き込み、かつ、Rが0.043以上の内装下地材を用いた断熱構造とする場合		RW 152	PB 9.5
外壁	0.35	軸組の外側にRが1.3以上の断熱材(厚さ25ミリメートル以上)を張り付け、かつ、軸組の間にRが2.2以上の断熱材(厚さ100ミリメートル以上)を充填した断熱構造とする場合		RW 50+100	—
	0.53	軸組の間にRが2.2以上の断熱材(厚さ85ミリメートル以上)を充填した断熱構造とする場合		RW 85	—
	0.92	土壁(厚さ50ミリメートル以上)の外側で軸組の間にRが0.9以上の断熱材(厚さ20ミリメートル以上)を充填した断熱構造とする場合		—	—
床	0.24	床裏が外気に接する場合であって、根太の間及び大引又は床梁の間に合計してRが5.2以上の断熱材を充填し、かつ、Rが0.075以上の床下地材を用いた断熱構造とする場合		フェノール1種 45+70 XPS3種 45+100	合板 12
	0.34	床裏が外気に接する場合であって、根太の間にRが3.9以上の断熱材(厚さ135ミリメートル以上)を充填し、かつ、Rが0.075以上の床下地材を用いた断熱構造とする場合		RW※ 外気:140 床下:133	合板 12
		床裏が外気に接しない場合であって、根太の間にRが3.7以上の断熱材(厚さ130ミリメートル以上)を充填し、かつ、Rが0.075以上の床下地材を用いた断熱構造とする場合		RW※ 外気:122 床下:120	合板 24
		床裏が外気に接する場合であって、大引又は床梁の間にRが3.4以上の断熱材(厚さ120ミリメートル以上)を充填し、かつ、Rが0.15以上の床下地材を用いた断熱構造とする場合			
	床裏が外気に接しない場合であって、大引又は床梁の間にRが3.3以上の断熱材(厚さ120ミリメートル以上)を充填し、かつ、Rが0.15以上の床下地材を用いた断熱構造とする場合		XPS3種 外気:112 床下:104	合板 24	
	床裏が外気に接する場合であって、大引又は床梁の間にRが4.0以上の断熱材(厚さ90ミリメートル以上)を充填し、かつ、Rが0.15以上の床下地材を用いた断熱構造とする場合				
	0.48	床裏が外気に接する場合であって、大引又は床梁の間にRが3.7以上の断熱材(厚さ85ミリメートル以上)を充填し、かつ、Rが0.15以上の床下地材を用いた断熱構造とする場合		RW※ 85	合板 12
床裏が外気に接しない場合であって、根太の間にRが2.4以上の断熱材(厚さ85ミリメートル以上)を充填し、かつ、Rが0.075以上の床下地材を用いた断熱構造とする場合			RW※ 80	合板 24	
床裏が外気に接しない場合であって、大引又は床梁の間にRが2.2以上の断熱材(厚さ75ミリメートル以上)を充填し、かつ、Rが0.15以上の床下地材を用いた断熱構造とする場合					
床裏が外気に接しない場合であって、大引又は床梁の間にRが2.4以上の断熱材(厚さ55ミリメートル以上)を充填し、かつ、Rが0.15以上の床下地材を用いた断熱構造とする場合		RW※ 85	合板 24		
基礎	0.37	鉄筋コンクリート造の基礎の外側又は内側にRが3.5以上の断熱材を張り付けた断熱構造の場合		XPS 3種 100	—
		鉄筋コンクリート造の基礎の両側に、合計してRが3.5以上の断熱材を張り付けた断熱構造の場合		XPS 3種 50+50	—
	0.53	鉄筋コンクリート造の基礎の外側又は内側にRが1.7以上の断熱材を張り付けた断熱構造の場合		XPS 3種 50	—
	0.76	鉄筋コンクリート造の基礎の外側又は内側にRが0.5以上の断熱材を張り付けた断熱構造の場合		XPS 3種 15	—
	1.80	無断熱の鉄筋コンクリート構造の場合		—	—

*断熱材厚さ寸法は別表の仕様の詳細に従い、弊社ロックウールの品揃えを配慮しましたが、厚いものはそのままの寸法を表示したものがありません。施工性について配慮できない事を、ご了承ください。

※熱伝導率λ=0.036(W/(m·K))商品

別表2 木造住宅／外張断熱工法の仕様例

部位	熱貫流率[W/m ² ·K]	仕様の詳細	断面構成図	ロックウール断熱材の例	屋根下地材
屋根	0.17	Rが0.075以上の屋根下地材等の上に、Rが6.3以上の断熱材を外張りした断熱構造とする場合		フェノール1種 70+70	合板 12
	0.24	Rが0.075以上の屋根下地材等の上に、Rが4.4以上の断熱材を外張りした断熱構造とする場合		フェノール1種 49+49	合板 12
外壁	0.35	軸組の外側にRが3.0以上の断熱材を張り付けた断熱構造とする場合		XPS3種 84	—
	0.53	軸組の外側にRが1.9以上の断熱材を張り付けた断熱構造とする場合		XPS3種 54	—
		軸組の外側にRが1.7以上の断熱材を張り付け、かつ、軸組の間に土壁(厚さ60ミリメートル以上)を設けた断熱構造とする場合		フェノール1種 38	—
床	0.24	床裏が外気に接する場合であって、床梁の下側にRが4.5以上の断熱材を張り付けた断熱構造とする場合		フェノール1種 99	—
	0.34	床裏が外気に接する場合であって、床梁の下側にRが3.1以上の断熱材を張り付けた断熱構造とする場合		XPS3種 87	—
基礎		木造住宅 充填断熱工法の仕様例と同様		別表第1	別表第1

別表3 枠組壁工法住宅／充填断熱工法の仕様例

部位	熱貫流率[W/m ² ·K]	仕様の詳細	断面構成図	ロックウール断熱材の例	画材・下地材
屋根	0.17	たるきの間にRが7.5以上の断熱材(厚さ265ミリメートル以上)を充填し、かつ、Rが0.043以上の内装下地材を用いた断熱構造とする場合		RW 285	PB 9.5
	0.24	たるきの間にRが5.2以上の断熱材(厚さ185ミリメートル以上)を充填し、かつ、Rが0.043以上の内装下地材を用いた断熱構造とする場合		RW 198	PB 9.5
天井	0.17	天井根太の間にRが7.5以上の断熱材(厚さ265ミリメートル以上)を敷き込み、かつ、Rが0.043以上の内装下地材を用いた断熱構造とする場合		RW 285	PB 9.5
	0.24	天井根太の間にRが5.2以上の断熱材(厚さ185ミリメートル以上)を敷き込み、かつ、Rが0.043以上の内装下地材を用いた断熱構造とする場合		RW 198	PB 9.5
外壁	0.35	壁枠組材の間にRが3.7以上の断熱材を充填し、かつ、Rが0.046以上の面材及びRが0.043以上の内装下地材を用いた断熱構造とする場合		RW 140	合板 7.5 PB 9.5
		壁枠組材の外側にRが0.9以上の断熱材を張り付け、壁枠組材の間にRが2.7以上の断熱材を充填し、かつ、Rが0.046以上の面材及びRが0.043以上の内装下地材を用いた断熱構造とする場合		RW 50+105	合板 7.5 PB 9.5
	0.53	壁枠組材の間にRが2.3以上の断熱材を充填し、かつ、Rが0.047以上の面材及びRが0.043以上の内装下地材を用いた断熱構造とする場合		RW 85	合板 7.5 PB 9.5
床	0.24	床裏が外気に接する場合であって、根太の間にRが5.1以上の断熱材(厚さ180ミリメートル以上)を充填し、かつ、Rが0.075以上の床下地材を用いた断熱構造とする場合		RW※ 184	合板 12
	0.34	床裏が外気に接する場合であって、根太の間にRが3.5以上の断熱材(厚さ125ミリメートル以上)を充填し、かつ、Rが0.075以上の床下地材を用いた断熱構造とする場合		RW※ 外気:126 床下:120	合板 12
		床裏が外気に接しない場合であって、根太の間にRが3.3以上の断熱材(厚さ120ミリメートル以上)を充填し、かつ、Rが0.075以上の床下地材を用いた断熱構造とする場合			
0.48	床裏が外気に接しない場合であって、根太の間にRが2.2以上の断熱材(厚さ80ミリメートル以上)を充填し、かつ、Rが0.075以上の床下地材を用いた断熱構造とする場合		RW※ 80	合板 12	
基礎		木造住宅 充填断熱工法の仕様例と同様		別表第1	別表第1

*断熱材厚さ寸法は別表の仕様の詳細に従い、弊社ロックウールの品揃えを配慮しましたが、厚いものはそのままの寸法を表示したものがありません。施工性について配慮できない事を、ご了承願います。

※熱伝導率λ=0.036(W/(m·K))商品

断熱施工チェックリスト 充填断熱工法用

1. 一般事項(施工前の確認事項)

- | | |
|--|---|
| <input type="checkbox"/> ベタ基礎等の床下防露措置を行ったか? | <input type="checkbox"/> 防湿層を施工したか?(透湿性の高い断熱材 ^{*1} の場合) |
| <input type="checkbox"/> 断熱材は隙間なく施工したか? | <input type="checkbox"/> 吹付け硬質ウレタンフォームA種3に該当する断熱材を使用する場合は、防湿層を施工したか? |
| <input type="checkbox"/> 外壁、窓枠周り、軒下、棟などで通気層出入口が確保されているか? | <input type="checkbox"/> 特別評価方法認定により防湿層や通気層等を省略する場合は、対象地域、仕様、断面構成等を確認したか? |
| <input type="checkbox"/> 各部位に必要な性能(密度・厚さ等)の断熱材を施工したか? | |
| <input type="checkbox"/> 断熱材が各取合い部で連続しているか? | |

*1 透湿性の高い断熱材:グラスウール、ロックウール、セルローズファイバー等の繊維断熱材およびプラスチック系断熱材のうち吹付けウレタンフォームA種3またはA種フェノールフォーム3種2号、その他これに類する透湿抵抗の小さい断熱材

2. 浴室・玄関周り

- | | |
|---|---|
| <input type="checkbox"/> 壁の断熱施工を行い、防湿フィルムを合板等(乾燥木材、部分的には気密テープも可)で押さえたか? | <input type="checkbox"/> 下屋の場合、天井の断熱施工をしたか? |
| <input type="checkbox"/> 玄関部や浴室基礎部の断熱施工を行ったか?(必要な場合) | <input type="checkbox"/> 浴室や玄関土間部の土台部の隙間を気密パッキン等で塞いだか?(必要な場合) |
| <input type="checkbox"/> 基礎断熱材は基礎天端まで施工したか? | <input type="checkbox"/> 隣室基礎部との開口に断熱構造の蓋を施工したか? |

3. 一般床

- | | |
|--|---|
| ● 根太間断熱の場合 | ● 根太レス等の場合 |
| <input type="checkbox"/> 「押入れ」「クローゼットの床」「床の間」「階段下」にも断熱施工したか? | <input type="checkbox"/> 専用金具などで受材を施工したか? |
| <input type="checkbox"/> 断熱材と床合板の間に隙間ができていないか? | <input type="checkbox"/> 断熱材は垂れていないか? |
| <input type="checkbox"/> 床の気密は取れているか? | <input type="checkbox"/> 床の気密は取れているか? |
| <input type="checkbox"/> 床と外壁の取合い部では、断熱と気流止めの施工をしたか? | <input type="checkbox"/> 配管貫通部は気密テープ等で留め付けたか? |
| <input type="checkbox"/> 間仕切り壁下部に断熱と気流止めに施工したか? | |
| <input type="checkbox"/> 配管貫通部は気密テープ等で留め付けたか? | |

4. 外気に接する床

- | | |
|---|---|
| <input type="checkbox"/> 断熱材受け材の施工をしたか? | <input type="checkbox"/> 床と外壁の取合い部では、気流止めの施工をしたか? |
| <input type="checkbox"/> 断熱材の施工をしたか? | |

5. 外壁

- | | |
|--|--|
| <input type="checkbox"/> 野縁を組む前に胴差・桁まで断熱材を張り上げ、防湿フィルムをせっこうボード等や乾燥木材で押さえているか? | <input type="checkbox"/> 筋かい部の防湿層は連続するように施工されているか? |
| <input type="checkbox"/> 防湿フィルムは柱・間柱の見附面に留め付けているか? | <input type="checkbox"/> 外壁及び開口部上下の防湿フィルムは四辺ともに構造材に留め付けているか? |
| <input type="checkbox"/> 防湿フィルムは床下地材へ留め付けているか? | <input type="checkbox"/> 真壁ではボード受け材に防湿フィルムを留め付けているか? |
| <input type="checkbox"/> 断熱材を筋かいの裏側にも充填し、筋かいに沿って切り込みを入れ同面まで盛り上げているか?(筋かいが室内側にある場合) | <input type="checkbox"/> 配管周り、貫通部は気密テープで留め付けているか? |

6. 下屋(天井断熱の場合)

- | | |
|---|---|
| <input type="checkbox"/> 外壁部では、胴差・桁まで断熱材を張り上げ、防湿フィルムをせっこうボード等や乾燥木材で押さえているか? | <input type="checkbox"/> 小屋裏換気が確保されているか?(断熱材等で垂木間等の換気経路が塞がれていない等) |
| <input type="checkbox"/> 野縁の上に断熱施工しているか? | <input type="checkbox"/> 埋め込み照明器具まわりの断熱材は、器具種類に応じて適切に施工されているか? |
| <input type="checkbox"/> 天井部分の野縁の下に別張り防湿フィルムを施工したか? | |
| <input type="checkbox"/> 下がり壁の断熱、防湿施工を行ったうえで石こうボード等や乾燥木材で押さえているか? | |

7. 天井

- | | |
|---|---|
| <input type="checkbox"/> 断熱材は隙間なく施工されているか? | <input type="checkbox"/> 小屋裏換気が確保されているか?(断熱材等で垂木間等の換気経路が塞がれていない等) |
| <input type="checkbox"/> 押入れ、クローゼットの上部に断熱施工をしたか? | <input type="checkbox"/> 埋込み照明器具まわりの断熱材は、器具種類に応じて適切に施工されているか? |
| <input type="checkbox"/> 野縁の下に別張り防湿フィルムを施工したか? | |
| <input type="checkbox"/> 間仕切り壁上部(最上階)は断熱し、気流止めに施工したか? | |

8. 屋根

- | | |
|--|---------------------------------------|
| <input type="checkbox"/> 通気層は確保できているか? | <input type="checkbox"/> 軒裏に換気口を設けたか? |
| <input type="checkbox"/> 垂木の間に断熱材を施工し、垂木の見付け面に防湿フィルムを留め付けせっこうボード等で押さえているか? | |

(出典:住宅省エネルギー 技術講習会 HP)

断熱施工チェックリスト 外張り断熱工法用

1. 一般事項(施工前の確認事項)

- 断熱材は隙間なく施工したか?
- 外壁、窓枠周り、軒下、棟などで通気層出入口が確保されているか?
- ボード状断熱材で隙間が生じた場合は現場発泡断熱材等で適切に補修したか?
- 防湿層を施工したか?(透湿性の高い断熱材^{※1}の場合)
- 吹付け硬質ウレタンフォームA種3に該当する断熱材を使用する場合は、防湿層を施工したか?
- 特別評価方法認定により防湿層や通気層等を省略する場合は、対象地域、仕様、断面構成等を確認したか?

※1 透湿性の高い断熱材:グラスウール、ロックウール、セルローズファイバー等の繊維断熱材およびプラスチック系断熱材のうち吹付けウレタンフォームA種3またはA種フェノールフォーム3種2号、その他これに類する透湿抵抗の小さい断熱材

2. 基礎

- ベタ基礎等の床下防露措置を行ったか?
- 基礎断熱材は基礎天端まで施工したか?
- 玄関部の断熱施工を行ったか?(必要な場合)
- 基礎/土台間に土台気密材等を施工して隙間を塞いだか?
- 土台と基礎断熱材の連続性が確保されているか?
- 床下に溜まった雨水を除去したか?(床材施工前まで)

3. 屋根・下屋

●屋根断熱の場合

- 屋根断熱材と壁断熱材が隙間なく施工されているか?
- 断熱材下地もしくは断熱材継ぎ目を気密テープ等で措置したか?
- 壁と屋根の取合いは先張りフィルムや現場発泡ウレタンなどで隙間を塞ぐ措置をしたか?
- 棟部の断熱材突付け部や屋根と外壁の断熱材取合い部は隙間が生じないように施工したか?
- 通気層を設けたか?
- 軒裏に換気口を設けたか?
- 下屋部分の屋根通気が抜けるようになっているか?
- 下屋が取り付く上階外壁の通気の入口が確保されているか?

●桁上断熱の場合

- 屋根断熱材と壁断熱材が隙間なく施工されているか?
- 断熱材等を受ける下地材を設置したか?
- 断熱材もしくは下地の継ぎ目を気密テープ等で処理したか?
- 小屋裏換気が確保されているか?
(断熱材等でたる木間等の隙間経路が塞がれていない等)

4. 外壁

- 入隅に断熱材等および通気胴縁の受け材を施工したか?
- 外壁部に取り付ける羽子板ボルト等は座掘りして施工したか?
- 開口部廻り等に下地材を施工したか?
- 壁断熱材を屋根の断熱材のところまで施工したか?
- 断熱材下地もしくは断熱材継ぎ目等を気密テープ等で処理したか?
- 通気胴縁は外張り断熱専用ビスで固定したか?
- エアコンのスリーブ等、外壁貫通部周りを気密テープ等で措置したか?

5. 外気に接する床

- 通気胴縁および断熱材や下地材の受け材を設置したか?
- 断熱材もしくは下地の目地等を気密テープ等で処理したか?

6. 充填断熱工法と組合わせた場合

- 床や天井が充填断熱工法の場合、気流止めを設置したか?

〈出典:住宅省エネルギー 技術講習会 HP〉

快適で豊かな未来のために

JFEロックファイバーのロクセラムは、さまざまな建築物や工業用設備など社会のあらゆる場所で、断熱や保温・保冷、防火や耐火、また吸音など多岐にわたる用途で利用され、豊かで快適な未来の創造に広く貢献しています。

抜群の耐熱性能

ロックウールの主原料は、製鉄所の高炉から発生する「スラグ」です。この高炉スラグは無機質であるため、製造された繊維は高い耐熱性能を有します。製品は国土交通大臣の不燃認定を取得、耐火性を要求される部位はもちろん、住宅用断熱材としても幅広くご使用いただいています。

安心の断熱・保温性能

製造技術の改良を重ね、常に革新するロックウール。品質の安定した製品は、確かな断熱効果をお約束します。また、腰のある繊維と耐水性能との相乗効果で、長期間にわたって断熱・保温性能を持続します。

製造エネルギーが約1/2*

JFEロックファイバーの工場は、製鉄所の敷地内にあります。主原料の高炉スラグは、製鉄所の高炉から巨大な鍋に入れて場内専用鉄道で運ばれます。1400℃という高温のまま運搬するため、再加熱量が圧倒的に少なく、製造エネルギーは他の繊維系断熱材に比べ約1/2です。

※溶融エネルギーの比較による

優れた耐水性能

ロックウールは、断熱材としての基本性能以外に耐水性能も備えていますので、水にも強く、構造躯体の耐久性を損ないません。



優れた吸音性能

ロックウールは繊維の間に無数の空隙を持つことにより、高い吸音性能を有しています。機械室、スタジオ等の防音や、住宅の床防音材として幅広くお使いいただけます。

ロクセラムは様々なかたちで皆様のニーズにお答えしています。



住宅エリア

壁・天井(断熱)マット／壁・天井(吸音)フェルト／壁・天井(防耐火)ボード



商業エリア

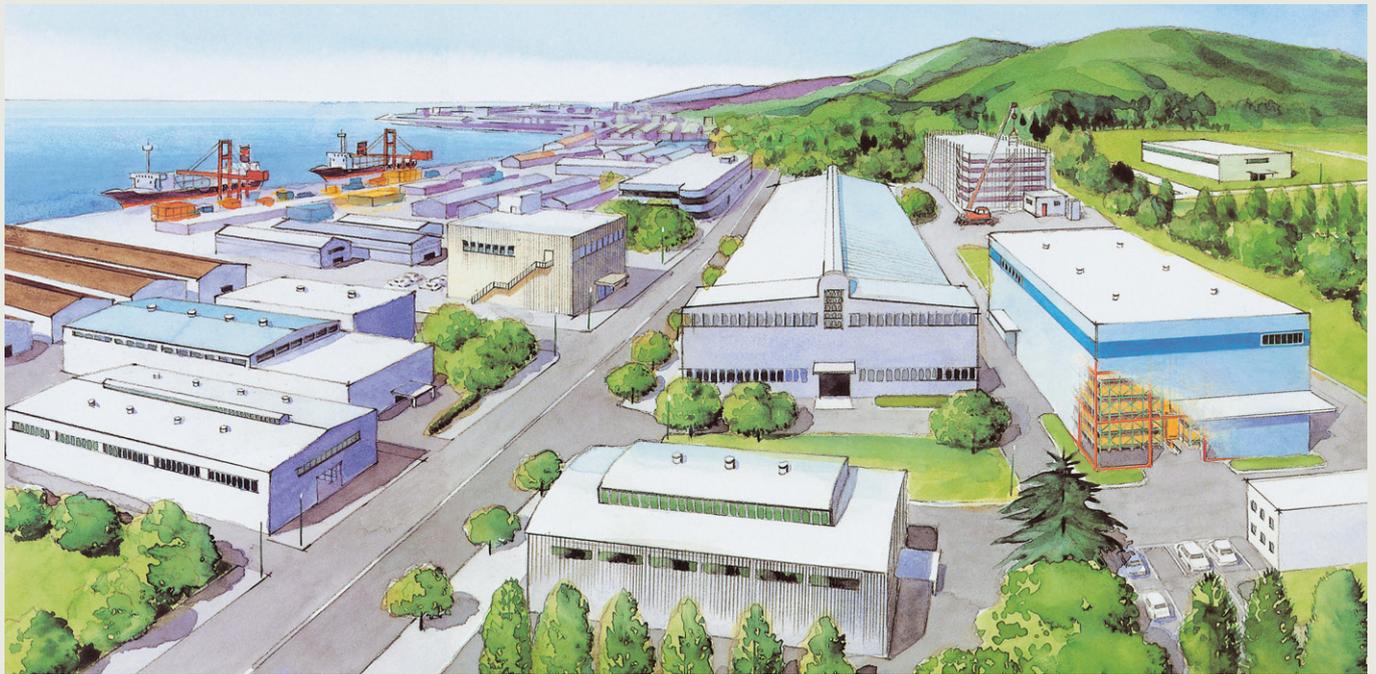
鉄骨の耐火被覆(粒状綿をセメントと混ぜて専用設備で吹付け)・天井ロックウール化粧吸音板(粒状綿は素材の一つ)





ビジネスエリア

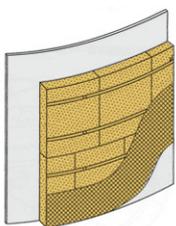
配管・ダクトの保温材(ボード、フェルト) / 地下機械室の防音(化粧ボード)



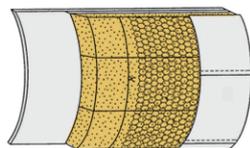
工業エリア

屋根断熱・ダブル折板間に挿入(フェルト) / 壁断熱・金属サンドイッチパネル心材(ボード)

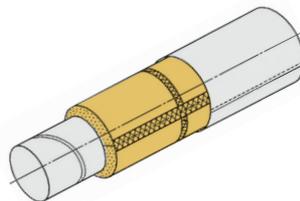
一般建築用



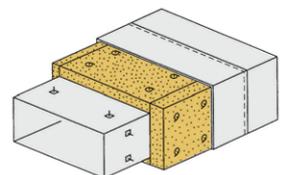
〈機器・塔槽類〉



〈熱源機器〉



〈円形ダクト〉



〈角形ダクト〉

ロックウールの特徴

ロックウールは3つのJISに性能が規定されています。

JIS A 9504 : 「人造鉱物繊維保温材」

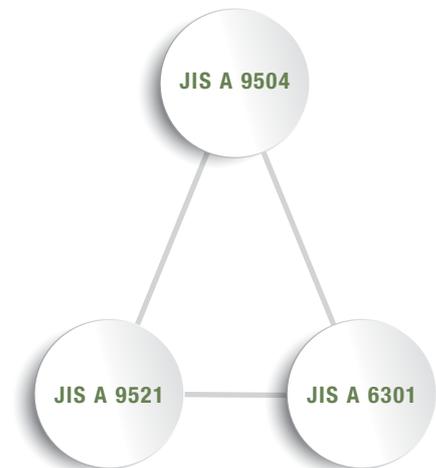
人造鉱物繊維保温材[※]について規定(材料による種類:ロックウール、グラスウール)
[※]保温とは、常温以上約1000℃以下の物体を被覆し、熱拡散を少なくすること(保温JIS解説、用語及び定義から抜粋)
[※]熱伝導率は平均温度70℃の値。

JIS A 9521 : 「建築用断熱材」

住宅及び建築物において、主として常温で使用する断熱材について規定(基材による区分:人造鉱物繊維、有機繊維断熱材、発泡プラスチック断熱材)
[※]熱伝導率は、平均温度23℃±1℃の値。

JIS A 6301 : 「吸音材料」

建築物などにおいて吸音を目的として使用するロックウール・グラスウール、ウレタンフォーム、インシュレーションファイバーボード、木毛セメント板、あなあきせっこうボード、あなあきスレートボード、あなあきハードファイバーボード、あなあきスラグせっこう板について規定する。



ロックウールはアスベストとはまったく違い「安心」です。

Q1

ロックウールとアスベストの違いは？

ロックウールは繊維径が太く、呼吸器系に入りにくいのが特徴です。

- ロックウールは、人工的に製造された鉱物繊維です。繊維径がアスベストの数十倍～百倍太くて吸い込みにくい特徴があります。
- アスベスト(石綿)は繊維径がきわめて細い天然の鉱物繊維で、吸い込みやすい特徴があります。

※弊社は創業以来「アスベスト」を使用したことはありません。

Q2

ロックウールは発がん性があるのですか？

国連の専門機関がコーヒーよりも安全と分類しています。

- WHO(世界保健機関)[※]の下部機関である国際がん研究機関(IARC)では、ロックウールを「ヒトに対して発がん性の分類をすることができない“グループ3”」とし、国際的にも安全性が認められています。コーヒーはグループ2に分類されますから、コーヒーより安全ということです。
- この結論は、世界中の研究者により長年にわたって調査・確認されたものです。

※WHO:保健衛生分野の国連専門機関

Q3

有害な揮発性化学物質は出ませんか？

ロックウールは“シックハウス”にも安心です。

- ロックウールは、ホルムアルデヒド規制の対象外となる最も安全な等級区分F☆☆☆☆に該当します。但し、保温板3号のボードのみF☆☆☆☆です。

ロックウールの特徴 (参考:保温JIS解説)

■原料、成形品の製法

ケイ酸分と酸化カルシウムを主成分とする高炉スラグを1,500~1,600℃で溶融し、遠心力などで吹き飛ばして繊維状にしたもの、バインダーを添加して硬化炉で固めて、ボード・フェルト状に加工する

■使用温度

熱伝導率算出参考式は以下の範囲で定義されている
-20℃ ≤ θ ≤ 600℃

■熱伝導率

温度の上昇とともに熱伝導率も曲線的に上昇、高密度製品の熱伝導率・上昇カーブは緩やか

■燃焼性

熱間収縮温度は厚さの収縮率が10%の点、フェルト400℃以上、保温板600℃以上

■化学的強さ

アルカリには比較的強いが、酸には弱い

■安全性

火災時に有毒ガス又は多量の煙を発生する事は無い

■施工性

断熱材カッターで切断可能

ロックウール用途拡大に向けた動き

1979年制定、2013年最終改正

エネルギーの使用の合理化等に関する法律(省エネ法)



移行(大規模建築物から順次義務化)

建築物のエネルギー性能の向上に関する法律(建築物省エネ法)

基準適合義務、適合性判定の対象となるのは施行日(平成29年4月予定)以後に建築確認申請されたもの

断熱により火・音の性能アップができるのは、ロックウール!

CASBEE(環境性能を評価するツール)

- 建築物の環境品質Qと、外部に対する環境負荷L、更に、環境効率BEE=Q/Lを評価
- 「資源を大切に使いゴミを減らす」という項目で、リサイクル材を評価
高炉スラグが原料であるロックウールも、その対象

耐火関連の規制緩和

- 2010年 公共建築物等における木材の利用の促進に関する法律
- 2014年 耐火建築物の基準が緩和
3,000㎡以内に、防火壁を設置などで準耐火も可能に!

準耐火はロックウールで!!

よくある質問

吸音と遮音

吸音性能は残響室の床に試験体がある場合とない場合の残響時間を測定し吸音率に換算して評価

…材料の評価(ロックウールの場合、厚みを増す事が、吸音率アップには有効)

遮音性能は部屋を2つに仕切る壁の開口部に設置した試験体で音源の透過損失で評価

…壁、床などの部位毎の評価(試験体の重量が大きい方が、遮音は有利)

不燃と防火・耐火

不燃は20分間、材料が①燃焼しない②避難上有害な煙を出さない③防火上有害な損傷を生じない、事が要件

…材料の評価

防火、耐火は、火災の延焼・市街地火災防止が目的で、防火は外壁・軒裏の性能が、耐火は主要構造部(柱や梁など)の耐火性能が時間で規定される

…壁、床などの部位毎の評価(国交省告示による方法と、個別認定を取得する方法がある)

取扱い及び保管上の注意事項

[取扱い上の注意] 本製品は切断等の加工をしない限り、特に注意することはない。切断等の加工をする場合は、次の注意事項を守ること。

- ①切断は、カッターナイフ等の手動の工具で行う。
- ②取扱いに際しては防じんマスクを着用し、必要に応じて、局所排気装置・除じん装置を設置する。
- ③長袖の作業衣及び保護手袋を着用する。必要に応じて、保護眼鏡を使用する。
- ④取扱い後は、うがい及び手洗いを励行する。

[使用上の注意] 本製品には数%のフェノール樹脂またはその変性物が含まれています。約200℃以上の高温下で使用する場合、樹脂の燃焼・分解により、二酸化炭素、一酸化炭素、アセトンなどが発生するので必ず換気を行うこと。

[保管上の注意] 安全上問題はないが、品質上水濡れ厳禁とする。

[廃棄上の注意] 廃棄する場合は、周辺環境中に粉じんが飛散しないように注意する。なお、ロックウール製品から発生する廃棄物は、廃棄物の処理及び清掃に関する法律に基づき、ロックウールと外被の分別を行う。尚、ロックウールは「ガラスくず・コンクリートくず及び陶磁器くず」に該当する。

製品一覧

商品名	品番	標準密度 (kg/m ²)	厚さ (mm)	幅 (mm)	長さ (mm)	入り数 (枚)	JIS規格		熱伝導率 (W/m・K) 平均温度70℃	熱間 収縮温度 (℃)	梱包仕様											
							A 9504 人造鉱物繊維保温材	A 6301 吸音材料			ポリ エチレン	ダン ボール										
フェルト外被なし	BF04025Z	40	25	910	11,000	1	フェルト	吸音 フェルト	0.049 以下	400 以上	○	○										
	BF04050B		50								○	○										
フェルトポリシート貼	BD04050P		50								○	○										
	BD04010P		100								○	○										
フェルト アルミガラスクロス貼	BD0425AGW		25								5,500	○	○									
	BD0450AGW		50								11,000	○	○									
フェルト アルミクラフト貼	BD0425A		25								8,000	○	○									
	BD0450AS		50								11,000	○	○									
ボード 外被なし	BF04050BB		40								50	605	910	8	フェルト	吸音フェルト	0.049以下	400以上	○	*1		
	BFS4050BB										50								○	○		
	BB06050	60	50	6	保温板 1号	吸音 ボード 1号	0.044 以下	600 以上	○	*1												
	BB06075*		75	4					○	*1												
	BB06010*		100	16					○	*1												
	BB08025		25	10					○	*1												
	BB08040	40	8	○					*1													
	BB08050	50	6	○					*1													
	BB08075	75	4	○					*1													
	BB08010	100	12	○					*1													
	BB12025	120	25	6					保温板 2号	吸音 ボード 2号	0.043 以下			600 以上	○	*1						
	BB12050		50	4											○	*1						
	BB12075		75	3											○	*1						
	BB12010		100	12											○	*1						
	BB15025	150	25	6											保温板3号	吸音ボード3号	0.044以下	600 以上	○	○		
	BB15050		50	4															○	○		
	BB15075		75	3															○	○		
	BB15010		100	8															○	○		
	BB20025	200	25	8	保温板 1号	吸音 ボード 1号	0.044 以下	600 以上	○	○												
	BBS6050		50	8					○	○												
	BBS6075*	60	75	6					保温板 2号	吸音 ボード 2号	0.043 以下			600 以上	○	○						
	BBS6010*		100	4											○	○						
	BBS8025		25	16											○	*1						
	BBS8040		40	10											○	*1						
	BBS8050	80	50	8											○	*1						
	BBS8075		75	6											○	*1						
	BBS8010		100	4											○	*1						
	BBS12025		25	12											○	*1						
	BBS12050	120	50	6											保温板 3号	吸音ボード 3号	0.044 以下	600 以上	○	○		
	BBS12075		75	4															○	○		
	BBS12010		100	3	○	○																
	BBS15025		25	12	○	○																
	BBS15050	150	50	6	保温板 1号	吸音 ボード 1号	0.044 以下	600 以上											○	○		
	BBS15075*		75	4															○	○		
	BBS15010*		100	3															○	○		
	BBS20025*		200	25															10	保温板 2号	吸音 ボード 2号	0.043 以下
BBS20050*	50	5		○					○													
BBS8025WP*	80	25		16					保温板 1号	吸音 ボード 1号	0.044 以下	600 以上	○	○								
BBS8040WP*		40		10									○	○								
BBS8050WP*		50	8	○									○									
BBS8075WP*		75	6	○	○																	
BBS8010WP*		100	4	○	○																	
化粧ボード ガラスクロス 額縁貼	BDS8025GC*	80	25	605	910	16	保温板 1号	吸音 ボード 1号					0.044 以下	600 以上	○	○						
	BDS8040GC*		40												10	○	○					
	BDS8050GC*		50												8	○	○					
	BDS8075GC*		75												6	○	○					
	BDS8010GC*		100												4	○	○					
	BDS12025GC*	120	25			12	保温板 2号	吸音ボード 2号					0.043 以下	600 以上	○	○						
BDS12050GC*	50		6	○	○																	
ワイヤード ブランケット 亀甲金網貼	BDS825WA	80	25	605	5,000	2	ブラン ケット 1号	吸音 ブラン ケット 1号	0.044 以下	600 以上	○	○										
	BDS850WA		50		4,000	1					○	○										
	BDS875WA		75								○	○										
	BDS810WA		100								2,000	○	○									
メタルラスブランケット メタルラス貼	BDS850ML*	80	50	605	910	8	ブラン ケット 1号	吸音 ブラン ケット 1号	0.044 以下	600 以上	○	○										
	BDS875ML*		75		6	○					○											
ベルト 寒冷紗貼	BDS725BK	70	25	605	1,820	4	保温帯 1号	-	0.052 以下	600 以上	○	○										
	BDS740BK		40								3	○	○									
	BDS750BK		50								2	○	○									
	BDS775BK		75								1	○	○									
	BDS710BK*		100								1	○	○									
ベルト アルミガラ スクロス貼	BDS725BKAG*	120	25	605	2,500	4	保温帯 2号	-	0.049 以下	600 以上	○	○										
	BDS750BKAG*		50								2	○	○									
	BDS1225BKA*		25								1	○	○									
	BDS1250BKA*		50								1	○	○									

※受注生産品:納期等詳細については弊社へお問合せください。 ※1 ご要望によりダンボール梱包も可能です。車単位の積載量はお問合せください。

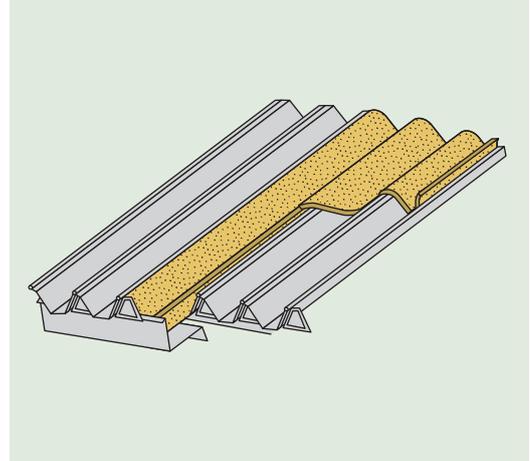
軽量で柔軟 間仕切り壁や天井裏の敷き込みに最適

ロクセラム フェルト

F★★★★

用途

- 建築物の壁・天井の断熱・吸音
- 集合住宅や一般住宅の吸音
- 間仕切り壁やドア等の充填芯材



商品名	品番	標準密度 (kg/m ³)	厚さ (mm)	幅 (mm)	長さ (mm)	入り数 (枚)	JIS規格及び認定			熱伝導率 (W/m·K) 平均温度70℃	熱間収縮温度 (℃)
							A 9504 人造鉱物繊維保温材	A 6301 吸音材料	不燃材料		
フェルト外被なし	BF04025Z	40	25	910	11,000	1	フェルト	吸音フェルト	NM-8600	0.049 以下	400 以上
	BF04050B		50								
フェルトポリシート貼	BD04050P		50								
	BD04010P		100		5,500						

* ポリシートを貼ることも可能です。弊社へお問い合わせください。

軽量で柔軟性があり、曲面部への施工性が向上

ロクセラム フェルト (外被貼) …アルミガラスクロス／アルミクラフト

F★★★★

用途

- 空調ダクト、配管等の保温断熱
- 建築物の壁や天井などの断熱・防露材
- 集合住宅の遮音
- アルミガラスクロス貼は
国土交通省の
仕様適合品です



商品名	品番	標準密度 (kg/m ³)	厚さ (mm)	幅 (mm)	長さ (mm)	入り数 (枚)	JIS規格及び認定			熱伝導率 (W/m·K) 平均温度70℃	熱間収縮温度 (℃)
							A 9504 人造鉱物繊維保温材	A 6301 吸音材料	不燃材料		
フェルト アルミガラスクロス貼	BD0425AGW	40	25	910	11,000	1	フェルト	吸音フェルト	NM-8602	0.049 以下	400 以上
	BD0450AGW		50		8,000						
フェルト アルミクラフト貼	BD0425A		25		11,000						
	BD0450AS		50		8,000						

* アルミガラスクロス:アルミ箔20μmにJISR3414(ガラスクロス)EP11Eを貼り合わせたもの
* アルミクラフト:アルミ箔7μmにクラフト紙50g/m²を貼り合わせたもの

一般建築用

低密度から高密度まで幅広い品揃え

ロクセラム ボード

BBS20025・BB20025・
BBS20050のみ

F★★★★★ / F★★★★

用途

- プラントの断熱・保温
- 工場・機械室の防音
- 間仕切りパネル、その他各種建材の断熱・防音・芯材
- 床用の断熱
- 各種耐火物のバックアップ用
- 冷蔵庫の耐火・断熱

【梱包仕様】



商品名	品番	標準密度 (kg/m ³)	厚さ (mm)	幅 (mm)	長さ (mm)	入り数 (枚)	JIS規格及び認定			熱伝導率 (W/m・K) 平均温度70℃	熱間収縮温度 (℃)	梱包仕様														
							A 9504 人造鉱物繊維保温材	A 6301 吸音材料	不燃材料			ポリエチレン	ダンボール													
ボード 外被なし	BF04050BB	40	50	605	910	8	フェルト	吸音フェルト		0.049以下	400以上	①	②※1													
	BFS4050BB											③														
	BB06050	60	50			6								①	②※1											
	BB06075*		75											4			①	②※1								
	BB06010*	100	80			25	16	10	保温板 1号	吸音 ボード 1号	0.044 以下															
	BB08025	40				8												①	②※1							
	BB08040	50				6												①	②※1							
	BB08050	75				4												①	②※1							
	BB08075	100				4												①	②※1							
	BB08010	120				12											3	保温板 2号	吸音 ボード 2号	0.043 以下						
	BB12025	25	12				①	②※1																		
	BB12050	50	6				①	②※1																		
	BB12075	75	4				①	②※1																		
	BB12010	100	150			25	12	6																		
	BB15025	40				6											①	②※1								
	BB15050	50				4											①	②※1								
	BB15075	75				3											①	②※1								
	BB15010	100	200			25	8	保温板3号	吸音ボード3号	NM-8600	0.044以下	600 以上														
	BB20025	50				8												③								
	BBS6050	75				6												③								
	BBS6075*	100				4												③								
	BBS6010*	80				25											16	保温板 1号	吸音 ボード 1号	0.044 以下						
	BBS8025					40																				
	BBS8040	50	8				③	※1																		
	BBS8050	75	6				③	※1																		
	BBS8075	100	4				③	※1																		
	BBS8010	120	25			12	6	保温板 2号	吸音 ボード 2号	0.043 以下																
	BBS12025		50													6		③	※1							
	BBS12050		75													4		③	※1							
	BBS12075		100													3		③	※1							
	BBS12010	150	25			12	6																			
	BBS15025		40												12		③	※1								
BBS15050	50		6		③										※1											
BBS15075*	75		4		③										※1											
BBS15010*	100	200	25	10	保温板 3号	吸音ボード 3号	0.044 以下																			
BBS20025*	40		5										③	※1												
BBS20050*	50	80	25	16	保温板 1号	吸音 ボード 1号	NM-8600	0.044 以下	600 以上																	
BBS8025WP*	40		10											③												
BBS8040WP*	50		8											③												
BBS8050WP*	75		6											③												
BBS8075WP*	100		4											③												
BBS8010WP*														③												

※ 受注生産品・納期等詳細については弊社へお問合せください。 ※1 ご要望によりダンボール梱包も可能です。ダンボール梱包は写真と異なる場合があります。車単位の積載量はお問合せください。

機械室・スタジオなどの化粧吸音材

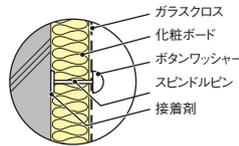
ロクセラム 化粧ボード

F★★★★

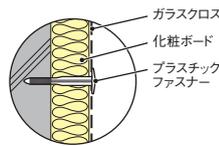
用途

- 機械室・電気室の壁・天井
- 劇場・ホール・スタジオ

【施工方法例】



<ピンボタン工法>



<プラスチックファスナー工法>



商品名	品番	標準密度 (kg/m ³)	厚さ (mm)	幅 (mm)	長さ (mm)	入り数 (枚)	JIS規格及び認定			熱伝導率 (W/m·K) 平均温度70℃	熱間収縮温度 (℃)
							A 9504 人造鉱物繊維保温材	A 6301 吸音材料	不燃材料		
化粧ボード ガラスクロス 額縁貼	BDS8025GC*	80	25	605	910	16	保温板 1号	吸音 ボード 1号	NM-8602	0.044 以下	600 以上
	BDS8040GC*		40			10					
	BDS8050GC*		50			8					
	BDS8075GC*		75			6					
	BDS8010GC*	120	4			保温板 2号	吸音 ボード2号	0.043 以下			
	BDS12025GC*	25	12								
	BDS12050GC*	50	6								

* ガラスクロス:JIS R 3414に規定するEP18Aによる無アルカリ平織ガラスクロス
* アルミガラスクロス等を貼ることも可能です。弊社へお問い合わせください。
* 受注生産品。納期等詳細については弊社へお問い合わせください。

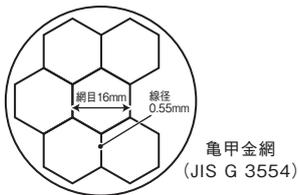
亀甲金網の強度によって複雑な曲面への施工が容易

ロクセラム ワイヤードブランケット

F★★★★

用途

- 発電所・焼却炉などの産業設備の断熱保温
- 各種タンク、丸ダクト、大口径パイプの断熱・保温
- パルプ・フランジの保温



商品名	品番	標準密度 (kg/m ³)	厚さ (mm)	幅 (mm)	長さ (mm)	入り数 (枚)	JIS規格及び認定			熱伝導率 (W/m·K) 平均温度70℃	熱間収縮温度 (℃)
							A 9504 人造鉱物繊維保温材	A 6301 吸音材料	不燃材料		
ワイヤード ブランケット 亀甲金網貼	BDS825WA	80	25	605	5,000	2	ブランケット 1号	吸音 ブランケット 1号	NM-8600	0.044 以下	600 以上
	BDS850WA		50								
	BDS875WA		75		4,000	1					
	BDS810WA		100								

* 亀甲金網なしでも受注可能です。弊社へお問い合わせください。

一般建築用

丈夫な構造で高温部での断熱・保温に適しています

ロクセラム メタルラスブランケット

F★★★★

用途

- 発電所などの大型産業設備の断熱保温
- 各種乾燥機、熱処理装置の断熱・保温
- 熱交換機、集塵機の断熱



商品名	品番	標準密度 (kg/m)	厚さ (mm)	幅 (mm)	長さ (mm)	入り数 (枚)	JIS規格及び認定			熱伝導率 (W/m·K) 平均温度70℃	熱間収縮温度 (℃)
							A 9504 人造鉱物繊維保温材	A 6301 吸音材料	不燃材料		
メタルラスブランケット	BDS850ML*	80	50	605	910	8	ブランケット 1号	吸音ブランケット 1号	NM-8600	0.044 以下	600 以上
メタルラス貼	BDS875ML*		75								

* メタルラス:JIS A 5505による防錆処理を施したプラス0号

** 受注生産品。納期等詳細については弊社へお問い合わせください。

施工性、耐熱、圧縮に強く曲面部の施工に適しています

ロクセラム ベルト

F★★★★

用途

- 空調設備の断熱、保温（ダクト、パイプ、曲がり部分）
- プラント配管の保温
- 集合住宅、レンジの排気ダクトの断熱



商品名	品番	標準密度 (kg/m)	厚さ (mm)	幅 (mm)	長さ (mm)	入り数 (枚)	JIS規格及び認定			熱伝導率 (W/m·K) 平均温度70℃	熱間収縮温度 (℃)
							A 9504 人造鉱物繊維保温材	A 6301 吸音材料	不燃材料		
ベルト	寒冷紗貼	70	25	605	1,820	4	保温帯 1号	-	NM-8600	0.052 以下	600 以上
			40			3					
			50			2					
			75			1					
			100			1					
	アルミガラスクロス貼	120	25	2,500	4	保温帯 2号	-	NM-8602	0.049 以下		
			50		2						
			25		1						
			50		1						
			50		1						

* 寒冷紗:粗く平織りした薄い綿反を糊付けしたもの

* アルミガラスクロス:アルミ箔20μmにJISR3414(ガラスクロス)EP11Eを貼り合わせたもの

** 受注生産品。納期等詳細については弊社へお問い合わせください。

強く、しなやかな繊維があらゆる用途に

ロクセラム 粒状綿

F★★★★

用途

- 産業資材用・ロックウール吸音板
- 窯業系外装材
- 耐火被覆吹付け用
- 酸素分離機などの充填材

鉄骨耐火被覆施工例



梱包前



ポリエチレン袋梱包



ベラー梱包

商品名	品番	適用	標準重量	梱包サイズ(mm)	JIS規格及び認定		熱伝導率 (W/m·K) 平均温度70℃	梱包荷姿
					A 9504 人造鉱物繊維保温材	不燃材料		
粒状綿	FS021	吹付用・ 産業資材原材料	20kg/梱	550×750×250	ロックウール F☆☆☆☆	NM-8600	0.044 以下	ポリエチレン袋梱包

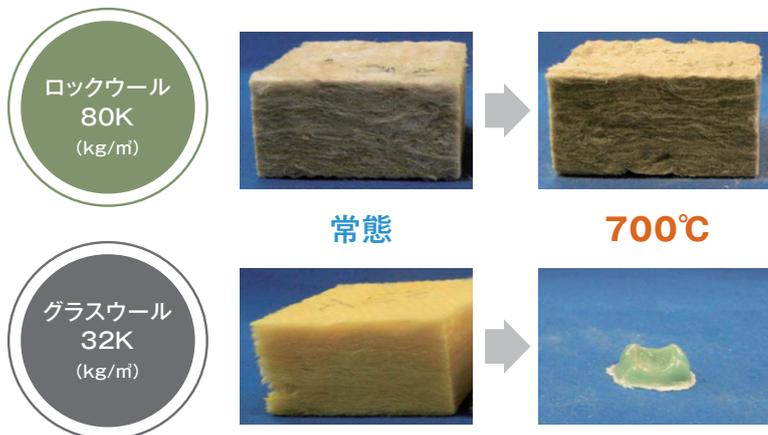
* ベラー梱包については、お問い合わせください。

一般建築用

耐熱性

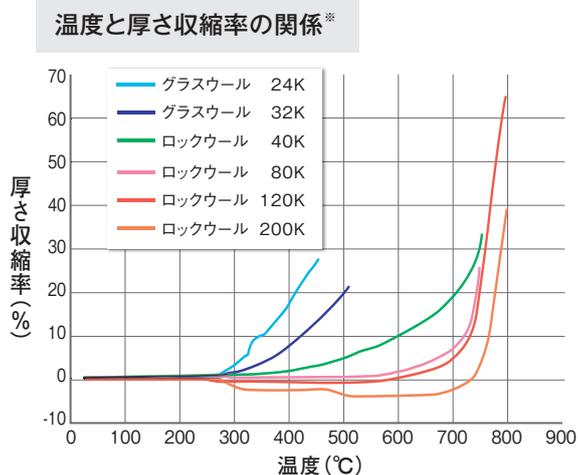
■ 外観

ロックウールと似た用途をもつ建築材料「グラスウール」との比較。700℃の高温下では、グラスウールが溶けて縮んでしまうのに対し、ロックウールはほとんど体積が変わりません。



■ 収縮性比較

グラスウールが300℃以上で急激に収縮するのに対して、ロックウールは400℃～700℃の高温になるまで収縮することがありません。

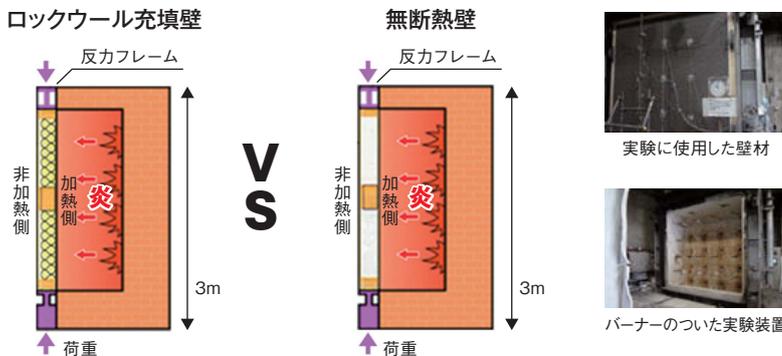


* 正(+)の値は試験体の厚さが収縮したことを、負(-)の値は試験体の厚さが膨張したことを示す。

〈出典:ロックウール工業会〉

■ ロックウールを充填した壁 VS 無断熱の壁

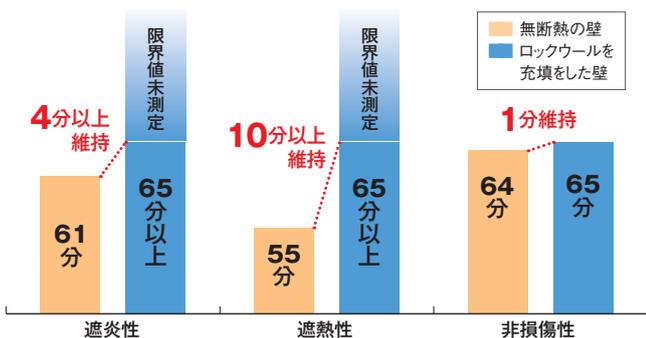
それぞれ、高さ3M×幅3Mの大型の壁を用意。実際の火災を想定して炎を当て続けます。室内からの出火、室外からの延焼を想定した2種類の実験を行いました。



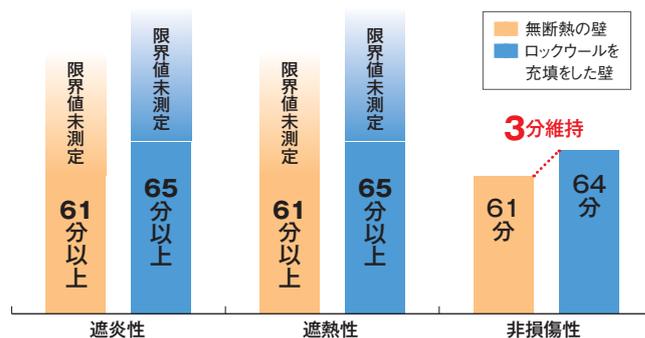
結果のデータ

実験では「遮炎性」「遮熱性」「非損傷性」の3つの基準で判定しました。また実験は、「非損傷性」が失われた時点から1分経過した時点で、測定を終了します。

室内からの加熱実験



室外からの加熱実験

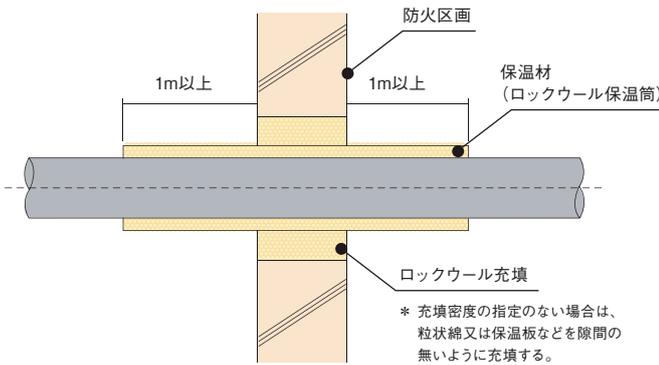


〈出典:ロックウール工業会〉

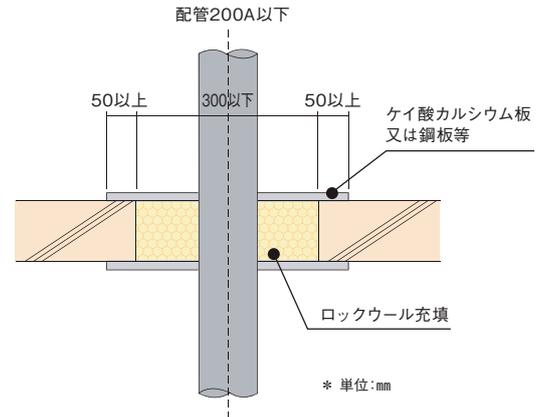
配管の防火区画貫通部の説明

建築物の安全性に関する要求が高まる今日、なかでも防火区画貫通部に関しては、火災の拡大を防止する重要な機能を持つため、多岐にわたる規制があります。このページでは区画貫通部措置工法事例と性能試験の結果を紹介します。

1. 一般区画貫通部の例

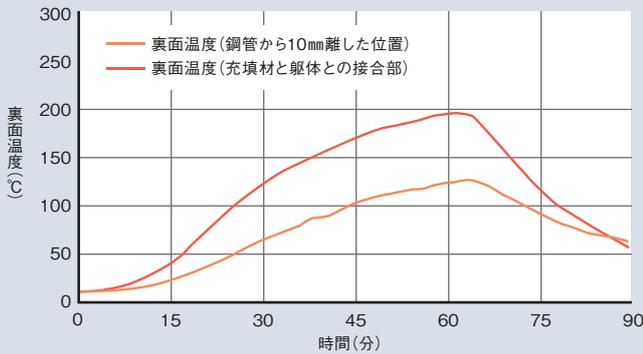


2. 令8 区画貫通部及び共住区画貫通部の例



3. 試験結果

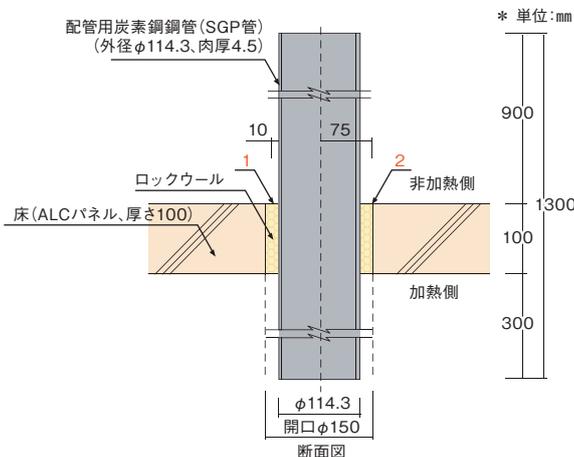
結果抜粋 ロックウール充填材 (粒状綿、密度:156.5kg/m³)



充填材:ロックウール

非加熱側へ10秒を超えて断続する火災の噴出の有無	なし
非加熱側へ10秒を超えて断続する発炎の有無	なし
火災が通る亀裂等の損傷及び隙間の発生の有無	なし

■ 試験体概要



- 1:裏面温度測定位置 (鋼管から10mm離れた位置)
- 2:裏面温度測定位置 (充填材と躯体との接合部)

■ 区画貫通部ロックウール充填試験結果

ロックウールの種類	貫通径 [mm]	給水管呼び径	充填密度 [kg/m ³]	判定			合否
				火災噴出	発炎	亀裂	
粒状綿	150	100A	150以上	なし	なし	なし	合格
			200以上	なし	なし	なし	合格
フェルト	150以上		なし	なし	なし	合格	
	100以上		なし	なし	なし	合格	
ボード	200		150以上	なし	なし	なし	合格
			80以上	なし	なし	なし	合格
保温筒+フェルト			150以上	なし	なし	なし	合格

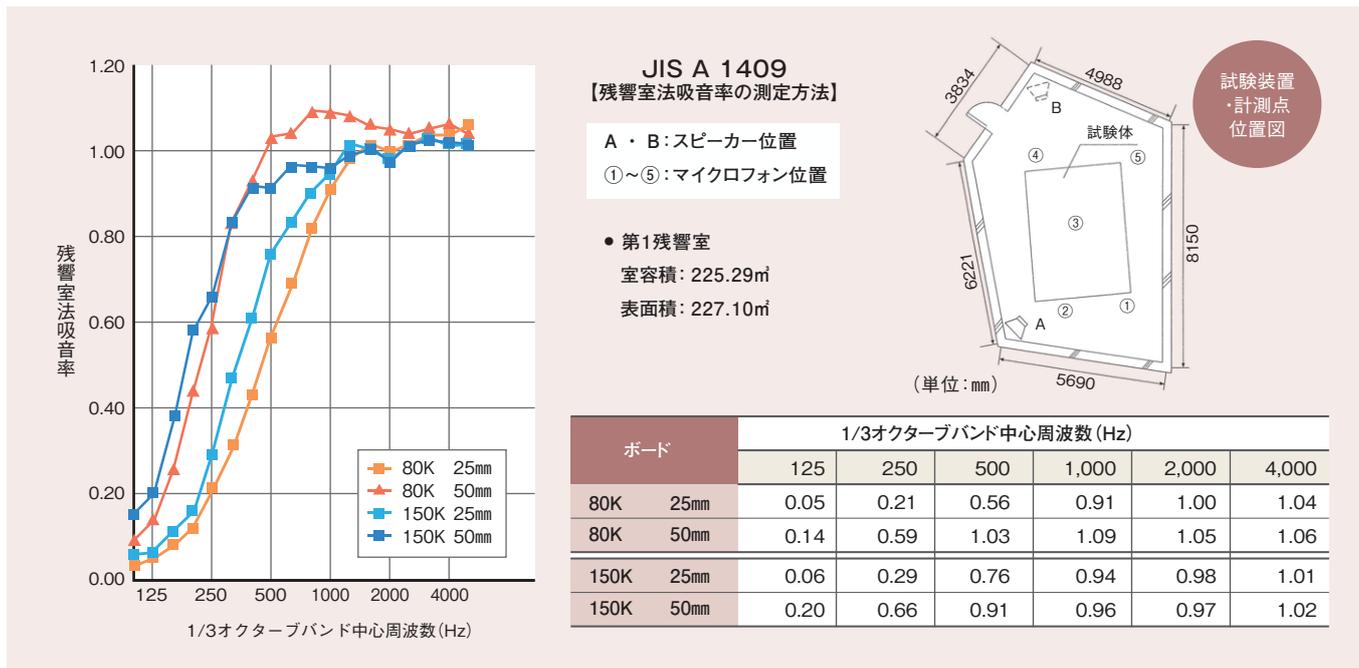
上記の通り、区画貫通部処置工法として所定の密度以上のロックウールを充填すると、建築基準法施行令第129条の2の5第1項第7号ハの規定に基づく認定基準を満たします。(加熱時間60分)

吸音性能

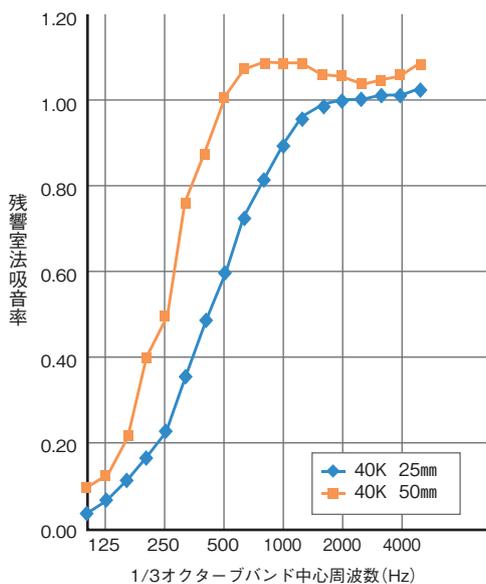
吸音効果は、ロックウールが形成する連続した細い迷路に音が入って圧縮と膨張を繰り返し、音のエネルギーが熱エネルギーに変換され、消滅することにより達成されます。吸音率曲線が示すとおり、一般に低音域(周波数が低い領域)の吸音率は高音域に比べて低いです。これはロックウールの厚さを増やすことにより改善されます。

同様に低・中音域の吸音率は、背面に空気層を設けることで著しく改善されます。

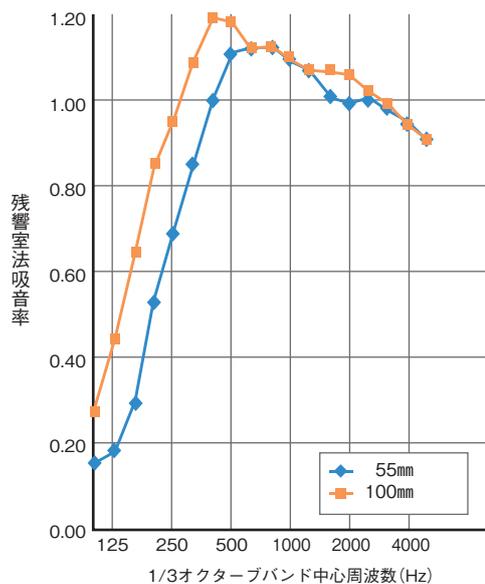
■ ボードの吸音性能



■ フェルトの吸音性能



■ 住宅用マットの吸音性能



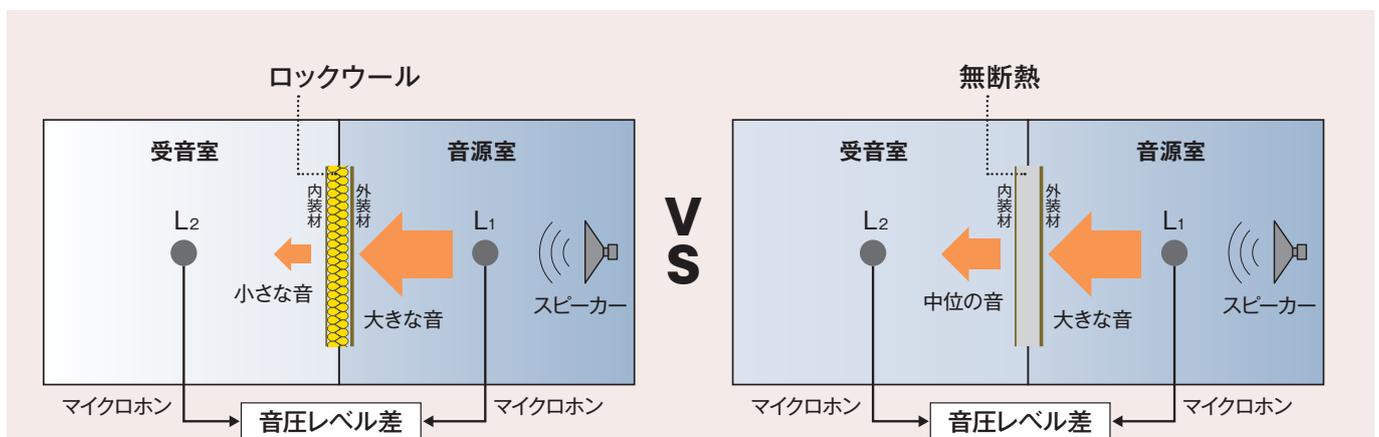
火にも音にも強いのはロックウールだけ

ロックウール工業会では、北方建築総合研究所と共同で、断熱材を含めた外壁の耐火性能の実験を行ないました。また、同じ構造壁で独自にロックウールの遮音性能の実験も実施しています。その結果、断熱材の中では唯一ロックウールだけが、「無断熱の場合に比べて、耐火性と遮音性の双方が優れている」ことが確認できました。

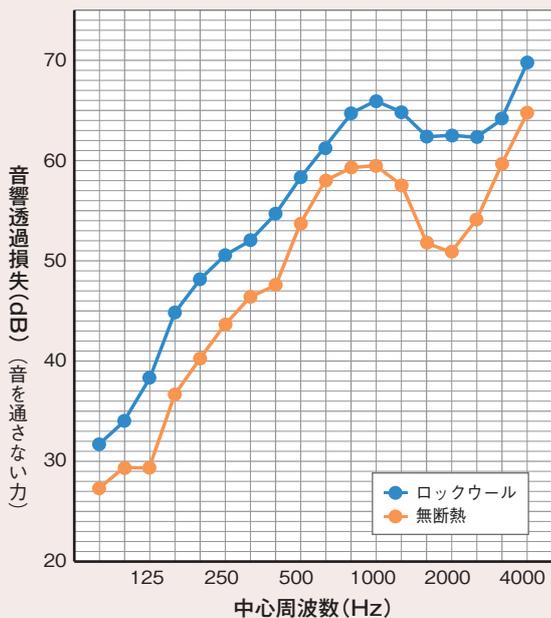
耐火性能実験はP.103参照

■ ロックウールを充填した壁 VS 無断熱の壁

それぞれの壁を通した時の音の聞こえ方を比べます。



結果のデータ



生活実感の対応例

遮音等級	ピアノ音等の大きい音	テレビ・ラジオ・会話等の一般の発生音
D-55	かすかに聞こえる	通常では聞こえない
D-50 (ロックウール充填)	小さく聞こえる	ほとんど聞こえない
D-45 (無断熱)	かなり聞こえる	かすかに聞こえない
D-40	曲がはっきりわかる	小さく聞こえる
D-35	良く聞こえる	かなり聞こえる
D-30	大変良く聞こえる	話の内容がわかる

*実際の住宅の場合窓からの侵入音がありますので、結果が変わることがあります。

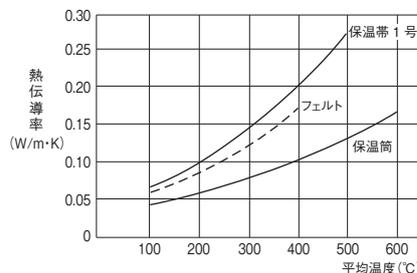
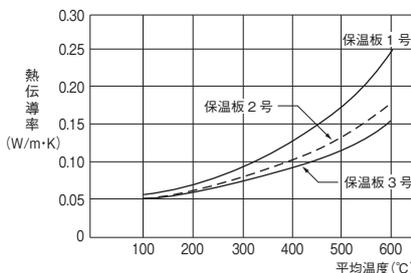
(出典:ロックウール工業会)

断熱性能

ロックウールの断熱効果は、その体積中の95%以上を占めている空気が、ロックウールの繊維によって微細な空隙に区切られ、動きにくくなることによって発揮されます。ロックウール中の空気はその温度が上昇するにつれて、より活発に活動するため、雰囲気温度の上昇とともに断熱性能は低下します。しかしロックウールの密度が高いほど、つまり単位体積中のロックウール繊維本数が多いほど、空気の流れの抵抗（通気抵抗）が増し、断熱性能の低下を防止します。

熱伝導率 (100~600℃) 参考データ

(JIS A 9501 保温保冷工事施工標準一般式より)



■ 高温雰囲気下の断熱性能

ロックセラムは耐火性に優れ、400℃程度の高温領域でも断熱材として利用できるため、プラント設備など厳しい条件下で幅広く利用されています。

熱伝導率算出参考式(保温JIS解説から抜粋)

	密度 (kg/m ³)	熱伝導率 算出参考式 W / (m·K) θ : 温度 (°C) (° ²)
ロックウールボード 保温板 1号	40~100	0.0337+0.000151·θ (-20≤θ≤100) 0.0395+4.71×10 ⁻⁵ ·θ+5.03×10 ⁻⁷ ·θ ² (100<θ≤600)
ロックウールボード 保温板 2号	101~160	0.0337+0.000128·θ (-20≤θ≤100) 0.0407+2.52×10 ⁻⁵ ·θ+3.34×10 ⁻⁷ ·θ ² (100<θ≤600)

■ 温域別での断熱性能

低温域 (100℃以下)

密度が80~100kg/m³で最低値を示しますが、全密度範囲で大きな差はありません。

高温域 (100℃以上)

100℃以上では、温度の上昇とともに熱伝導率は二次関数的に上昇します。なお、この傾向は密度が高くなるほど穏やかになります。

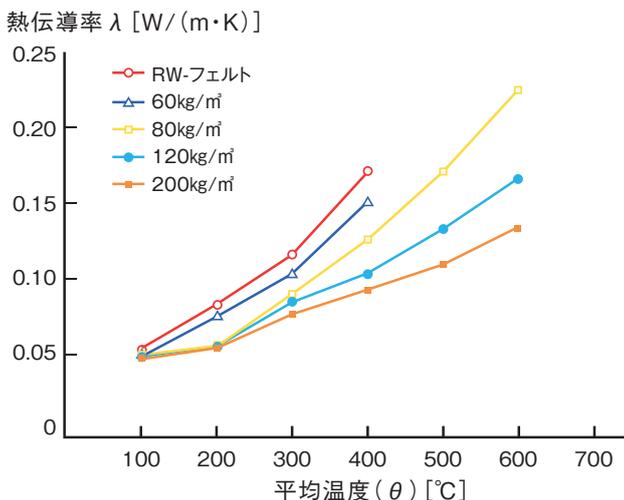
【ロックウールの平均温度(θ)と熱伝導率(λ)の関係】

ロックウールの熱伝導率(λ)は、平均温度(θ)が高くなると上昇し、ロックウールの密度(ρ)が低い程その上昇が著しくなります。これらの関係を図1、図2に示しました。

● ロックウールの平均温度と密度の関係

図1

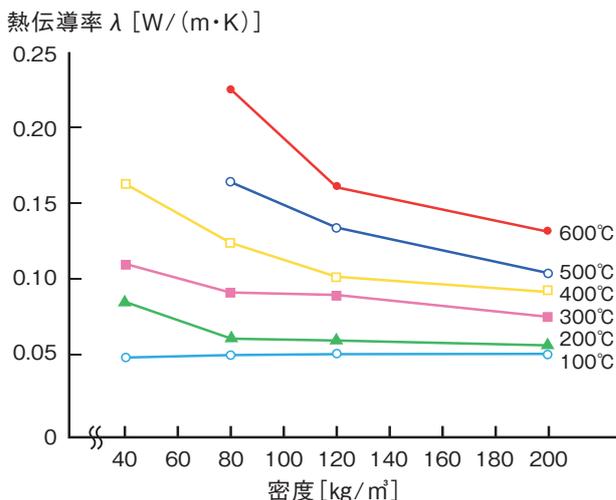
ロックウールの平均温度(θ)熱伝導率(λ)の関係



● ロックウール密度と熱伝導率の関係

図2

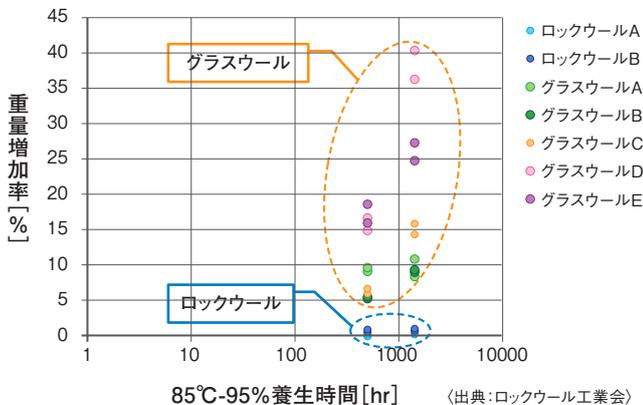
同一平均温度(θ)に置ける
ロックウール密度(ρ)と熱伝導率(λ)の関係



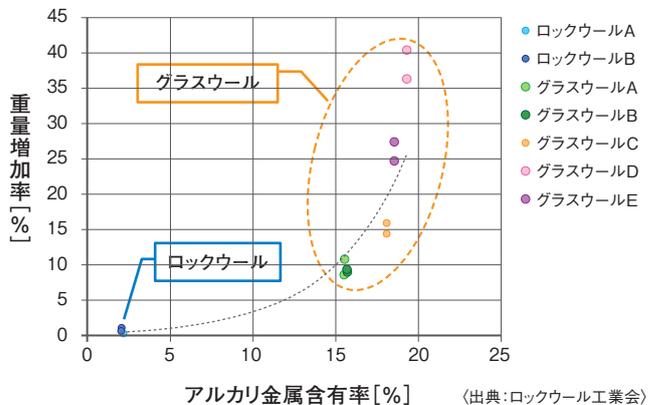
吸湿性・吸水性

■ 吸水性比較

無機繊維系断熱材の促進養生による重量変化

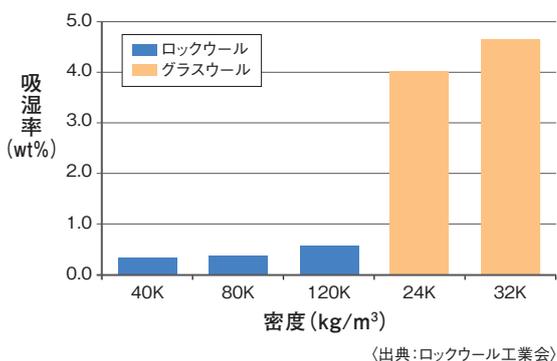


無機繊維系断熱材の化学組成（アルカリ金属含有率）と重量変化



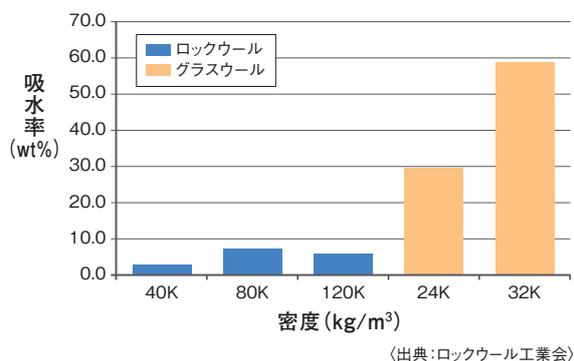
■ 吸湿性比較

同じ大きさの試験片を50°C×95%RHに48時間養生した時の吸湿率

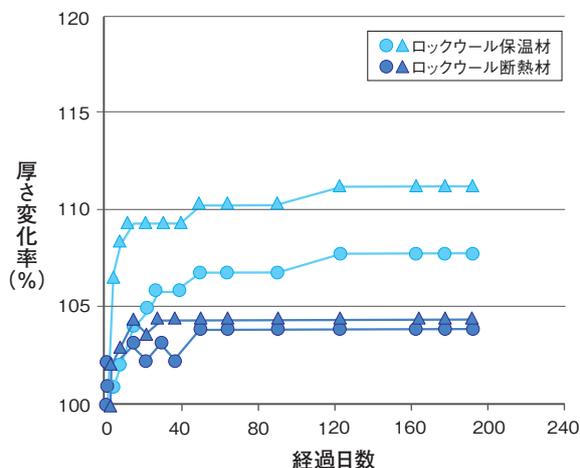
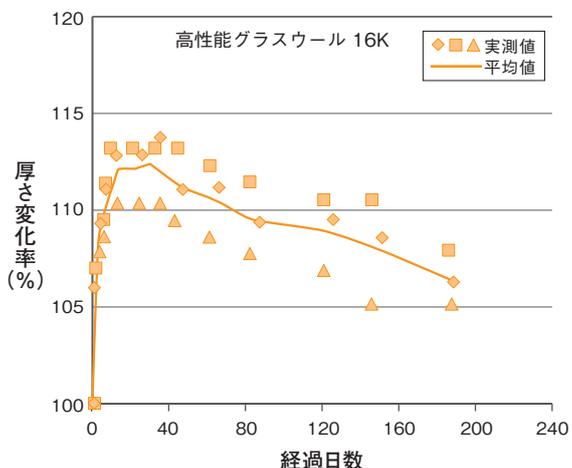


■ 吸水性比較

同じ大きさの試験片を水中に4時間つけた時の吸水率



50°C×95%RH 条件下での耐久性試験（厚さ変化）結果



参考文献

「グラスウールを対象とした熱、水分因子による長期性状変化に関する研究」,
 『日本建築学会環境系論文集』79(703), pp.753-762, 2014, 日本建築学会.

「ロックウール断熱材の耐久性試験」, ロックウール工業会, 2016.9



JFE ロックファイバー 株式会社

〒712-8074 岡山県倉敷市水島川崎通1丁目
TEL.086-447-4210 FAX.086-447-4399
<http://www.jfe-rockfiber.co.jp>



【商品に関するお問い合わせ】

〈本社営業所〉

TEL.086-448-5200 FAX.086-447-4399

〈東京営業所〉

〒105-0014 東京都港区芝3-8-2 芝公園ファーストビル5F
TEL.03-5418-6760 FAX.03-5418-6761

〈大阪営業所〉

〒530-0003 大阪市北区堂島1丁目6-20 堂島アバンザビル10F
TEL.06-6342-0647 FAX.06-6342-0645

〈九州営業所〉

〒812-0025 福岡市博多区店屋町1-35 博多三井ビル2号館7F
TEL.092-263-1450 FAX.092-263-1452

【注文窓口、納期・在庫に関するお問い合わせ】

TEL.086-447-4208 FAX.086-447-4211